

Inter BEE

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition Inter BEE

REVIEW 2015

REVIEW 2015

INTER BEE ONLINE
www.inter-bee.com

■主催: **JEITA** 一般社団法人電子情報技術産業協会

■お問い合わせ: 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル5階

電話: (03) 6212-5231 FAX: (03) 6212-5225 E-mail: contact2016@inter-bee.com

開催概要

- 名 称
 (第51回)2015年国際放送機器展
 International Broadcast Equipment Exhibition 2015
 (略称: Inter BEE 2015)
- 会 期
 2015年11月18日(水)~20日(金) [3日間]
- 開場時間
 11月18日(水) 10:00~17:30(※10:00~19:30)
 11月19日(木) 10:00~17:30(※10:00~19:30)
 11月20日(金) 10:00~17:00(※10:00~18:30)
 ※印は「ラインアレイスピーカー体験デモ」実施時間(イベントホール)
- 会 場
 幕張メッセ
 展示ホール1~6・国際会議場・イベントホール・屋外展示場
- 入 場
 無料(全来場者登録入場制)
- 主 催
 一般社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA)
- 後 援
 総務省、経済産業省(建制順)
 NHK、一般社団法人日本民間放送連盟、
 一般社団法人電波産業会(順不同)
- 協 力
 IPDCフォーラム、一般社団法人IPTVフォーラム、一般社団法人衛星放送協会、特定非営利活動法人映像産業振興機構、公益社団法人映像文化製作者連盟、一般社団法人カメラ映像機器工業会、公益社団法人劇場演出空間技術協会、一般社団法人次世代放送推進フォーラム、3Dコンソーシアム、全国舞台テレビ照明事業協同組合、超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム、特定非営利活動法人デジタルシネマ・コンソーシアム、一般財団法人デジタルコンテンツ協会、デジタルサイネージコンソーシアム、一般社団法人デジタルメディア協会、一般財団法人電波技術協会、一般社団法人特定ラジオマイク運用調整機構、一般社団法人日本アド・コンテンツ制作社連盟、協同組合全日本映画撮影監督協会、一般社団法人日本映画テレビ技術協会、協同組合日本映画テレビ照明協会、一般社団法人日本オーディオ協会、一般社団法人日本音楽スタジオ協会、一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟、一般社団法人日本CATV技術協会、公益社団法人日本照明家協会、一般社団法人日本動画協会、一般社団法人パブリックビューイング協会、NPO法人日本ビデオコミュニケーション協会、一般社団法人日本舞台音響家協会、日本舞台音響事業協同組合、一般社団法人日本ポストプロダクション協会、一般財団法人プロジェクションマッピング協会、マルチスクリーン型放送研究会、一般社団法人モバイルブロードバンド協会(50音順)
- 米国商務省 International Trade Administration 承認イベント

- 海外パートナー

- 運 営
 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3 大手センタービル5階
 電話: (03) 6212-5231



Table of Contents

Topics

- Graphic Report 04
 基調講演 1 「4K・8K ロードマップ 2015 今後の事業展開」
 4K・8K 関連展示
- Guest Interview 1 08
 アメリカ大使館 商務担当公使 アンドリュー・ワイレガラ 氏
- Guest Interview 2 10
 Microsoft 招待講演
- Guest Interview 3 12
 Amazon Web Service 招待講演
- Guest Interview 4-6 INTER BEE EXPERIENCE 14
 ラインアレイスピーカー体験デモ
 ドローン空撮デモ
 Live Entertainment & Contents Technology Conference (LECT)
- Guest Interview 7-12 Asia Contents Forum 20
 iPhone 商用映像撮影
 ブランドッドフィルム
 DigiCon6
 4DX
 Woman's Session
 「進撃の巨人」樋口監督・佐藤特撮監督

Ceremony Report

- Opening Ceremony 32
- Reception Party 34

Exhibition Report

- News Center Pick up 1 36
 株式会社 JVC ケンウッド
- News Center Pick up 2 40
 ティアック株式会社
- News Center Pick up 3 44
 株式会社東芝
- News Center Pick up 4 48
 リーダー電子株式会社
- Exhibit Map 52
 展示会場図
- Exhibitor List 56
 出展者一覧
- Online Magazine Headline 58
 INTER BEE ONLINE 掲載記事(展示会レポート) サマリー

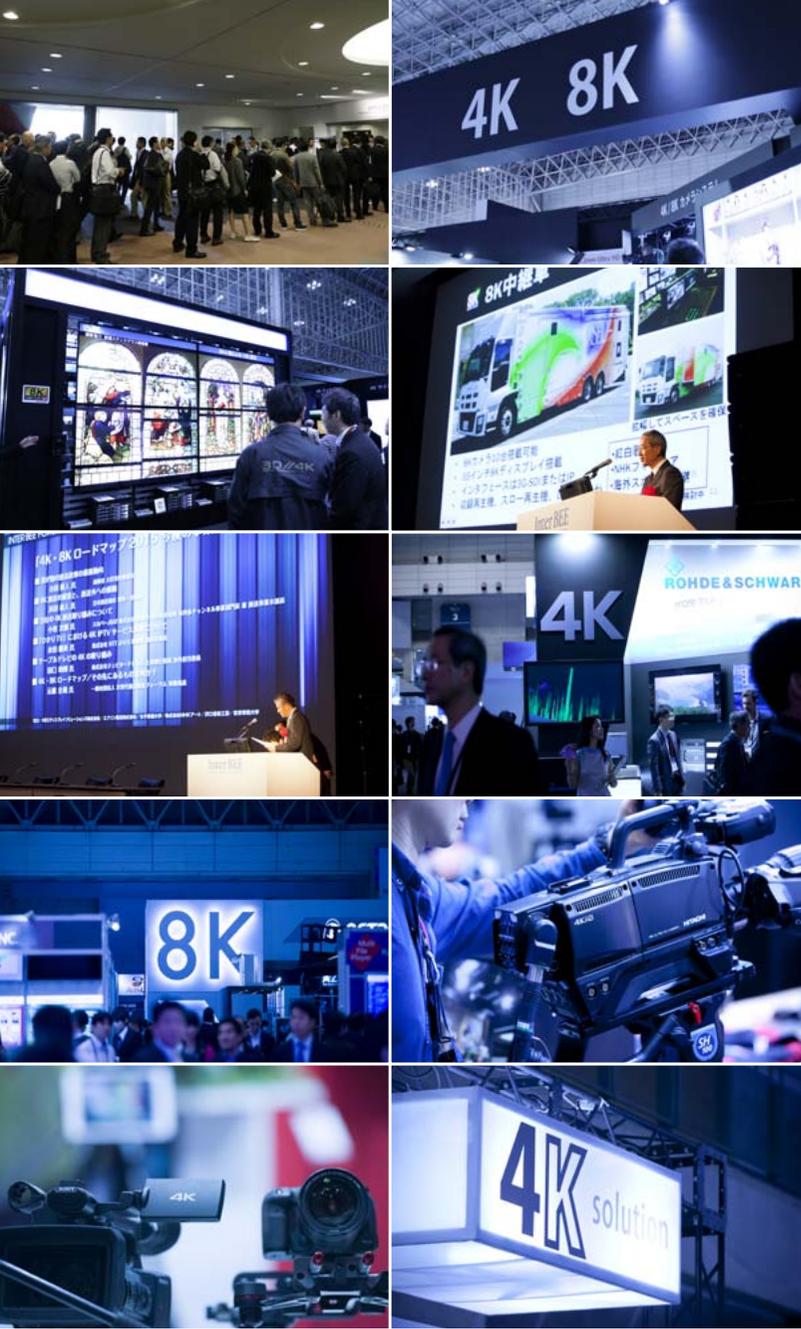
Forum & Event Report

- News Center Pick up 5 82
 基調講演 2 「民放公式テレビポータル『TVer』サービススタート」
- News Center Pick up 6 84
 特別講演 「マイナンバー時代を迎えた
 テレビ放送の次世代サービスを考える」
- News Center Pick up 7 86
 招待講演: 「ブラジルテレビ放送技術協会」 「IABM」 「NAB」
- News Center Pick up 8 88
 INTER BEE CONNECTED 企画セッション
- Programs 98
 プログラム一覧

Results

- Visitor Profile 107
 来場者アンケート実施結果
- Exhibitor Profile 110
 出展者アンケート実施結果
- Publication and Promotion 111
 来場者誘致プロモーション活動報告

2020年へ向けて動き出した 4K・8K放送



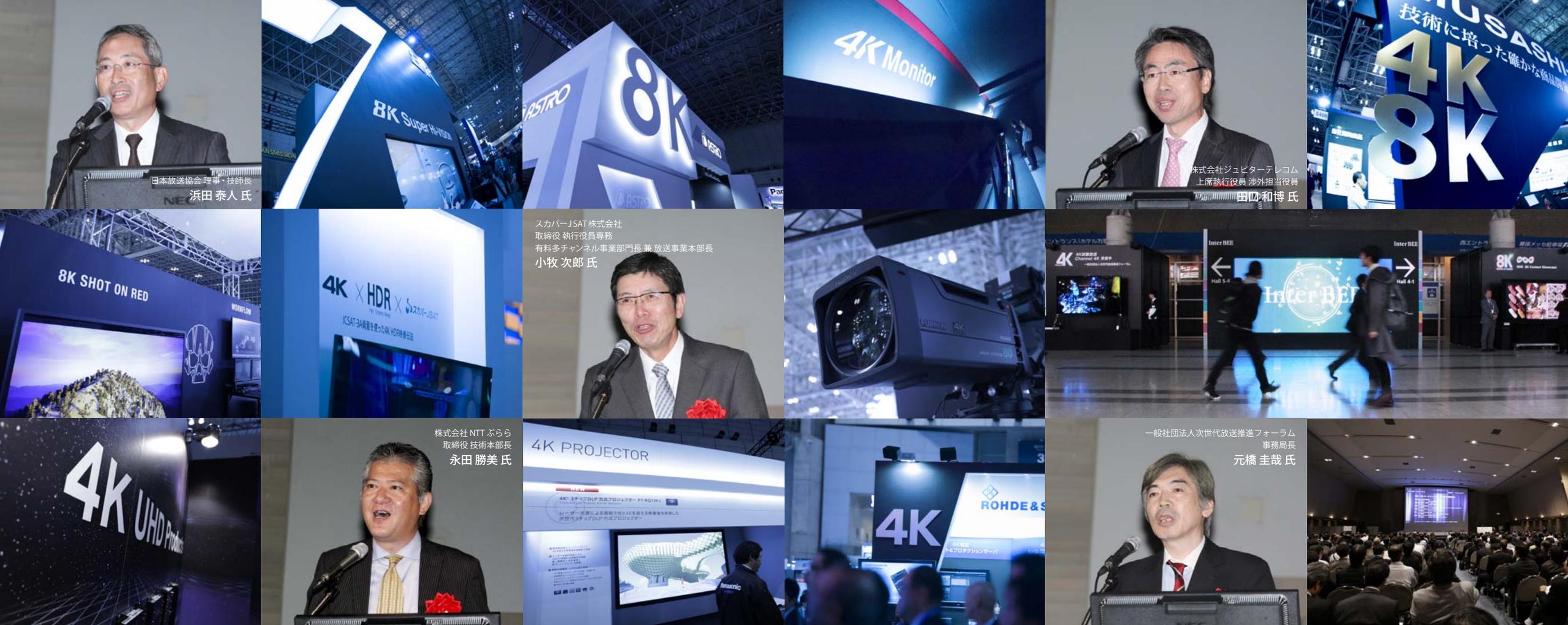
2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催時における、4K・8K放送の実現へ向けた動きが具体化してきた。2014年2月から開催されてきた「4K・8Kロードマップに関するフォローアップ会合」が2015年7月に公表した「4K・8K推進のためのロードマップ 第2次中間報告」では、CS放送、ケーブルテレビ、ブロードバンドを用いたVODなどによる4K放送・番組提供の現状が報告された。また、4Kカメラをはじめとした4K番組制作環境も整いつつあることが示されたほか、NexTVフォーラム会員企業などによる8Kコンテンツ制作への取り組みについても報告がなされた。

機器展示では撮影から伝送・収録・編集、アーカイブといった、番組制作全般において、4K対応機器が展示されたほか、8K対応機器の出展も昨年より大幅に増加。放送における番組制作を想定した提案、機器が数多く登場し、現場を支える製品が数多く出展されたのが大きな特徴といえる。



総務省
大臣官房審議官
吉田 真人氏

Inter BEE 2015では、「4K・8Kロードマップ 今後の事業展望」と題した基調講演において、施策を推進する総務省 大臣官房審議官 吉田真人氏により、4K・8Kが日本における重要産業施策であることが改めて指摘されたほか、放送・通信における推進役が登壇し、最新状況とさらなる普及の鍵について語った。吉田氏は講演の中で、4K・8Kの施策について「地上デジタル放送と同じ意味での国策ではなく、供給したい人が供給し、見たい人が見るという大原則がある」とし、あくまでも事業性を前提としたものであることを強調するとともに、4K・8Kの普及発展に向けては、「コンテンツ」、「伝送」、「受信機」をバランス良く三位一体で発展させていくことが極めて重要であるとし、放送・配信とともに、番組制作や、テレビの普及が4K・8K実現に欠かせないという考えを示した。



基調講演「4K・8K ロードマップ 今後の事業展望」 「4K・8K は日本産業再興プランの一つ」

吉田氏の講演に続いて、日本放送協会 理事・技師長 浜田 泰人氏、スカパー JSAT 取締役執行役員専務 有料多チャンネル事業部門長の小牧次郎氏、NTTぶらら 取締役技術部長の永田勝美氏、ジュピターテレコム 上席執行役員 渉外担当役員 田口和博氏がそれぞれ登壇し、それぞれの4K・8K放送への取り組みの現状を紹介した。

日本放送協会の浜田氏は、4K・8Kは映像の高度化であり、一体となって視聴者にすばらしい放送を届けるかがポイントとし、4K・8K試験放送の準備が進んでいることを述べた。また、8Kは放送外利用についても大きな期待がかけられているとし、映像の高度化を様々な産業の活性化に繋げていきたいと述べた。

スカパー JSATの小牧氏は、同社がこれまでに194番組を制作し、うち50本が生中継であるとし、6月のMr.Childrenのライブでは、2台の中継車と35台の4Kカメラを駆使した世界最大規模の4K生中継を実施したと述べた。

NTTぶららの永田氏は、2015年末までには4K番組を約700本まで拡充すると述べた。今後、世界初のスマートフォン向け4K-VODサービスなどの年内開始などの予定を披露した。

ジュピターテレコムの田口氏は、5月からJ.COMオンデマンドで4K-VODを開始し、これにより、50本以上の4Kコンテンツが追加料金なしで楽しめるとし、今後、8KについてもNHKと共同で種々の実験を重ね、将来の本格放送に備えていると述べた。

最後に、一般社団法人次世代放送推進フォーラム 事務局長の元橋圭哉氏が登壇し、「4K・8Kの普及推進への問題点」について述べ、「市場規模が全く見えない」点、「議論をする場合、狭い意味の放送に集中するキライがある」点、「スマートテレビ機能の融合が不可欠になっている」点などを挙げた。また、「デジタルになっても変えてはいけないこと、それは『ジャーナリズム』と『クリエイティブ』である」とし、「最先端の技術を活用して新しい放送・映像文化を日本から創造していきたい」と述べた。

目立った「4K」「8K」関連展示 伝送含めトータルな番組制作態勢可能に

Inter BEE 2015の機器展示会場には、「4K」「8K」のサインが数多く見られた。撮影から伝送・収録・編集、アーカイブまで、4K対応の映像制作機器が、昨年より格段に増加したとともに、機器間の連携も考慮した展示が数多く見られた点が大きな特徴といえる。

4K放送を想定したデモも各所で実施されていた。スカパーJSATは、HDR映像伝送デモを実施。東京・東陽町の東京メディアセンターの4Kマスター室から、HDRで収録したアーカイブ映像やライブ映像を、JCSAT-3Aにアップリンクし、機器展示会場における各社のブースでその受信映像が上映された。

放送機器の出展企業はいずれも、4K HDR関連製品など、幅広い放送・映像プロダクション向けソリューションや4K番組制作を想定したワークフロー環境を提案した。各社とも、4K中継番組を意識したライブスイッチャーやスタジオハンディカメラ、インテグレートドカメラといったスタジオソリューションが

ら、カメラレコーダー、アーカイブシステム、4K対応の小型スイッチャーと4K編集システムと合わせた4K制作ソリューションなどが見られた。

4Kプロダクションゾーンを設けたブースでは、ノンリニア編集システム、HDR-IMFマスタリングシステム、カラーグレーディングシステム、トランスコーダー、MAMシステムなど、4Kファイルベース対応製品を上演。4Kの番組制作が動き出している状況が見て取れた。

コーデックも進化しており、4K 4:2:2 H.265/HEVCリアルタイムエンコーダーによる4K映像が公開されたほか、4K・8K放送における新たな多重化方式「MMT (MPEG Media Transport)」などのデモも見られた。

8K放送への製品開発も小型・高性能が進み、実用モデルのカメラや周辺機材、さらには8Kレンズも参考出展で登場するなど、8K製品群の充実ぶりも目立った。



アメリカ商務省、Inter BEEを Certified Trade Fairとして承認

アメリカ商務省は今年、Inter BEEを Certified Trade Fairとして承認した。初日の18日にはアメリカ大使館 商務担当公使のアンドリュー・ワイレガラ氏 (Mr. Andrew Wylegala, Embassy of the United States of America in Japan) が Inter BEE の開催セレモニーのテープカットに参加した。ワイレガラ氏に、今回の Certified Trade Fair の承認の意義などについて聞いた。



■今回、Inter BEE がアメリカ商務省の Certified Trade Fair に承認されたのは、どのような点が評価されたか。

Certified Trade Fair は、大変厳しい基準をクリアした一部のクオリティの高いショーだけに付与される記念すべきものです。Inter BEE では、毎年過去最多の出展者を記録しており、これは放送業界への注目並びに、放送と通信の連携や ICT の利活用がますます進んでいることの現われだと考えている。



アメリカ大使館 商務担当公使
アンドリュー・ワイレガラ氏

■今年は、Certified Trade Fair の承認を記念し、フォーラムも開催。

Certified Trade Fair として認定された最初の1年でしたが、Inter BEE の主催者の方々にご協力いただき、100を超える米国の企業やブランドが出展しました。また、USA Showcase Forum と銘打って、Inter BEE の開催期間中には、「放送と ICT の未来」をテーマに、米国大使館商務部主宰のフォーラムを開催させていただいた。米国企業から Google にて YouTube Asia Pacific を統括する David Macdonald 氏 と、スマートグラスのイノベティブな企業、Vuzix 日本代表の藤井氏をお迎えし、カンファレンスを実施した。



アメリカ大使館 商務部商務官
エリック・キッシュ氏

Macdonald 氏は、YouTube は毎月グローバルで 10 億人ものオーディエンスがいるメガメディアとなっており、YouTube で発信することで、世界と簡単に繋がることができる点を強調した。また、テレビなど放送離れが懸念されている若年層へアプローチできる点や日本の映画製作・配給企業が YouTube にスペシャルコンテンツを提供し、世界中の視聴者にリーチしている事例等、今後の新しい放送と ICT の融合の可能性についても言及している。このように放送業界はデジタルなどのニューメディアとうまく融合することによって、新たな可能性が広がっていくと信じていますし、YouTube のような US 初のメガプラットフォームをぜひ活用いただきたいと思います。

また、スマートグラスのリーディングカンパニー、Vuzix からは続々と新製品が発表されており、様々な産業にて拡張現実を活用した新しいビジネスの形が生まれていることが話された。今までの、テレビといった家電製品を通じてテレビコンテンツを消費するスタイルから、モバイルやこのようなスマートグラスなどのウェアラブルテクノロジーの普及により、テレビメディアのコンテンツ消費のスタイルも今後大きく変わっていくことと思う。またスマートグラスは、放送のプロンプターとしてや、360 度カメラとの連携によってよりスケールの大きな映像を身近に楽しむことができるようになるなど、放送業界の可能性を新たに広げていくのではないだろうか。

■アメリカ大使館商務部として、日米の技術交流の現状をどう考える。

新しい技術が米国企業からもたらされていることをアメリカ大使館商務部としても大変喜ばしく思っている。また、同時に日本企業の技術力は大変高いものがあり、是非新たな分野でのコラボレーションを行うことができると考えている。

また、2020 年の東京オリンピックに向けて、まさに IoT 時代の放送のあり方というものに関わられていくと思う。今後どのように展開していくのか、また業界の枠をこえて、新たな産業が生まれていくと考えており、是非そのような機会においても、日米での連携を強化することで新たなイノベーションを生み出していきたいと、我々は考えている。今年は、アメリカ大使館商務部も 2020 年のオリンピックに向けて、新しいイノベーションや価値の提供を米国企業並びに日本企業と連携をとり、「Solutions for 2020 and Beyond」というシリーズにてカンファレンスをしていく予定だ。

「最後に、Inter BEE と関連の高い、NAB Show も来年 4 月にラスベガスで開催されます。NAB Show は米国商務省が認定する International Buyers Program の一つとなっており、NAB Show に訪問される日本企業の皆様に特別なベネフィットを提供しています。来年の NAB に訪問を予定されている日本企業の皆様におかれましては、是非アメリカ大使館商務部にコンタクトいただけますと幸いです。詳しい案内は時期が近づきましたら、ウェブサイト等に情報を掲載しますので、是非こちらからご確認ください。また、最後に、NAB の Senior Director である、Skip Pizzi 氏との出展米国企業への VIP ツアーでは、様々な情報提供をいただき、また我々の IBP プログラムに多大なるご協力をいただき、この場を借りて心から感謝いたします。」



米国および海外イベント情報▶▶▶▶
<http://www.buyusa.gov/japan/events/index.asp>

新しいメディア インターネットストリーミング 映像とメタデータを組み合わせた 新たな視聴体験を提供

11月19日のINTER BEE FORUM 2015の招待講演にマイクロソフトコーポレーション ワールドワイドメディア業界ビジネス開発担当マネージング ディレクターのトニー・エマーソン氏と日本マイクロソフト テクニカルエバンジェリストの島山大有氏が登壇し、「最新 Azure と Windows 10 の Premium Video Delivery 事情—クラウドでの MPEG-DASH/4K/DRM として、その活用—」と題した講演を実施した。トニー・エマーソン氏と日本マイクロソフト 島山大有氏は、マイクロソフトが考える動画配信プラットフォームの方向性と Azure の特徴などについて事例を交えて話してくれた。



マイクロソフトコーポレーション
ワールドワイドメディア業界ビジネス開発担当 マネージング ディレクター
トニー・エマーソン氏

マイクロソフトが考える 放送局向けメディア・ビジネス

■「テレビのチャンネル以外に 新たなチャンネルをビジネスに活用」

メディア・ビジネスが取り組む3つの要素には、「コンテンツ配信のインフラ」「メタデータと視聴者分析」「制作現場を支えるバックエンドシステム」の3つがある。

「コンテンツ配信」におけるネットの導入は、視聴者に番組を提供するためのより多くの機会を提供することになる。たとえばオリンピックなら、たとえ40競技あってもそれらを同時に配信することができ、視聴者も自分の観たい競技を視聴できる。

フジテレビは2014年、同社のCSチャンネル「フジテレビNEXT ライブ・プレミアム」の24時間ライブストリーミングサービス「フジテレビNEXT smart」のインフラに Azure を採用した。これにより、CSやケーブルテレビによる視聴に加え、インターネット経由でも同番組を視聴できるようになった。

また、配信コストも大幅に低減する。米国のスポーツ専門局 NGSN (Next Generation Sports Network) も、Azure を導入することで、南米、欧州、日本を含むアジアの12のサッカーリーグの試合放送を、スマートフォン、MAC/PC、ゲームBOX、テレビ向けに同時に配信しているが、10人以下という非常に少人数で対応している。NGSNは今、低コストで数十チャンネルのスポーツ番組を提供している。視聴者が少ないコンテンツでも、世界に配信するロングテールコンテンツであれば、収益が取れるようになってきているのだ。

ロンドンオリンピックやNFL スーパーボールのライブ配信など多くのスポーツ番組のライブ配信を実施しているNBCは当初、ネットによる視聴機会を提供することでテレビの視聴数が増えることを心配していたが、実際にはテレビ視聴者数も増え、インターネットで配信を行ったことで新しい視聴者を獲得することにつながっている。

■「アナリティクスとメタデータの活用が今後重要に」

当社で提供しているシステムでは、いつ・どこで・誰がそのコンテンツを視聴したかというデータの収集・分析が可能だ。欧州サッカークラブの名門、レアル・マドリードでは、彼らの試合をインターネットで配信し、世界各国で同チームの試合中継が観られ、FacebookやTwitterなどのSNSを使い、全世界のレアル・マドリードファンと共有しながら視聴していることが分かり、その情報をビジネス展開につなげている。

■「新しい視聴体験の提供をサポート」

選手情報やスコア情報といった試合における統計データやカメラの角度などのメタデータを、映像と併せてすべてクラウド上に保存している。これらのデータを活用することで、現場で簡単に過去のシーンや得点の入ったシーンと結び付けられる。

また、視聴者が観たいシーンやゴールシーンハイライトなどをすぐに観られる。好きな選手やチームの映像のみを観るといったことも可能だ。今までの放送とは異なる視聴体験を提供することがインターネットではできるようになった。

■「強力なセキュリティとシステム連携」

バックエンドシステムは、動画配信基盤とともに、放送局ならではの社内システムとの連携やセキュリティが重要だ。香港のテレビ局ではインターネットストリーミング以外に、デジタル放送で実施している電子投票を Azure で実施。同時に大量のデータを扱い、かつデジタル放送機器との連携にも対応している。

■「制作工程からデータ破棄までの プロセスでコンテンツ保護」

Azureはメディア配信機能をAPIとして提供している。同時に制作工程も含めたセキュリティの確保がなされている点が大きな強みだ。ソリューションプロバイダーでCDSA認証を取得しているのは、当社のみだ。CDSA認証とは、Content Delivery Security Associations Content Protection and Security Program certificationの略で、コンテンツ制作、加工、保存、物理的もしくはデジタル配信、破棄までの全てのプロセスにおいて、包括的かつ標準的なコンテンツ保護とセキュリティが実施されていることを証明するものだ。Azureはまた、ビデオフォーマットのProResや、GoogleのDRM「Widevine」など、利用者の要望にあわせ、柔軟にサポートの幅を拡張している。

日本ではすでに、フジテレビの同時再送信で採用されており注目を浴びた。今後、放送局は、配信がもたらす新しいビジネス機会を活用していくことになる。そのときに鍵となるメタデータや過去のアーカイブとの連動など、クラウドによってさまざまな可能性を引き出す提案を進めていく。



日本マイクロソフト株式会社
テクニカルエバンジェリスト
島山 大有氏

コンテンツの高解像度化に伴う クラウドの活用がワークフローを効率化 大規模コンテンツの 流通プラットフォームに

アマゾンウェブサービス(以下、AWS)は、2006年に開始したAmazon Web Services, Inc.が提供するクラウドコンピューティングサービス。現在、190以上の国・地域で100万人以上のユーザに利用されている。アジアパシフィック地域では、東京とシンガポール、シドニー、中国、韓国にデータセンターがありメディア業界での活用事例も数多い。INTER BEE FORUM 2015の招待講演で登壇したAWSのその最新事情と今後のトレンドについて、招待講演で登壇した各氏に聞いた。

「クラウド活用によるメディアワークフローの進化」と題した招待講演に登壇したのは、AWSのデジタルメディアパートナーエコシステムマネージャのバービック・ピアス氏、ソリューションアーキテクトのウスマン・シャキール氏、そして、AWSジャパン技術本部テクニカルソリューション部部長/ソリューションアーキテクトの北迫清訓氏の3氏だ。

クラウドで ワークフローを効率化

4K・8Kと解像度が向上するにつれ、ストレージ容量とコンピュータの処理性能への要求も高まる。柔軟で無限の拡張性とより高速なコンピュータ・パワーの提供が求められている。AWSのクラウドストレージサービス「Amazon S3」は、こうした要求に対応。大きな特徴は、最新のニーズにマッチしたサービス

でありながら、初期費用なしで開始でき、使用したストレージ分のみ支払う従量課金のシステムにある。低スペックなものから非常に高スペックなものまで、GPUも含めたクラウドサービス「Amazon EC2」により、コンピュータ・パワーにおいても柔軟な拡張性を持つ。

「Amazon S3」は、メディアのワークフローを効率化する「コンテンツ・グラビティ」というコンセプトがある。これは、クラウド上でコンテンツを移動せずに、トランスコーダやエディター、レンダリングなどの処理を実行できるもの。また、クラウドをハブとして使うことで、異なる場所から作業が可能になり、業務を効率化できる。



アマゾンウェブサービスソリューションアーキテクト
ウスマン・シャキール氏

動画配信プラットフォームに クラウドを活用する事例が増加

米国では今、NFLやWWE、HBOなど、配信事業者を使わず、AWSが提供するクラウドの動画配信プラットフォームから直接、エンドユーザにコンテンツを届ける傾向にある。プラットフォームに、ストレージやエンコーダ、レンダリング、CDNサービスなどの基盤を提供しているため、短期間で低コストでコンテンツ事業を展開している。



アマゾンウェブサービス
デジタルメディアパートナーエコシステムマネージャ
バービック・ピアス氏

自由な拡張性と選択肢の多彩さ

AWSは、配信ビジネスを行う上で必要な機能をクラウド上で利用できる点が特徴だ。また、アマゾンマーケットプレイスから必要な機能を選び、簡単にライセンス購入することができるBYOL (Bring Your Own License) という仕組みがある。多くのパートナーが提供する機能を利用した分だけ支払えば良いという非常に使いやすいサービスだ。これによって、例えば、トランスコーダでも、当社の「Amazon Elastic Transcoder」や、パートナー企業であるブライトコープ社のクラウドベースのゼンコーダなど、複数の選択肢が揃っている。それ以外にも、クラウド上で動作するソフトなら自由にインストールして利用できる。

9月にマルチスクリーンコンテンツ配信向けビデオソリューションを提供する米エレメンタルテクノロジー社を買収。エレメンタルは、映像業界でABCやBBC、Comcastなど非常に多くの顧客を抱えている。クラウド上でソフトウェアベースのエンコーダ/トランスコーダ技術を実装している。AWSにジョインすることで、より良いトータルソリューションを提供できる。

AWSのサービスは「完全な従量課金とサービス開始までのスピード」も特徴だ。使った分だけ支払えば良いため、コストを抑えながら、色々な取り組みを試みることができる。また、日本国内のみならず、グローバルなサービス展開も可能。ハードウェアの購入やセットアップといった手間がなく、使いたいと思ったときに、すぐに使うことができる。

TVerで採用、4K番組配信でも 各社がAWSを利用

日本の放送業界では今、映像制作でのクラウド活用事例が非常に増えている。AWSは大手の放送局などで、コンテンツ流通プラットフォームとして導入が進んでおり、局間や会社間での映像コンテンツの受け渡しに活用されている。

朝日放送は、ネットを利用してスポーツ素材の局間共有をトライアル中。フジテレビでは、長崎軍艦島で4K収録した番組素材のアップロードや、IMAGICAからフジテレビへの4K映像のオンライン納品にAWSが利用されている。WOWOWは、米東海岸から日本までのグローバル映像伝送にAmazon S3のリージョン間レプリケーションと高速ファイル転送機能(マルチパートアップロード)を利用した実証実験を行った。

またTOKYO MXが実施したIPを使ったサイマル配信サービス「エムキャスト」において、フレッツ網を利用したHybridcast向け4K映像配信の検証をしているが、AWSと専用線がつながっているNTT東日本社が提供するフレッツ・キャストを利用している。さらには、在京民放5社が提供する動画配信サービス「TVer」の一部でAWSが利用されているなど、実績を重ねつつ、放送局の新たな展開をサポートしている。

AWSは、様々な国・地域にデータセンターがあり、高速ネットワークでつながっている。海外や国内で撮影した映像データをその場から伝送する場合にも活用できると考えている。



アマゾンウェブサービスジャパン株式会社
ソリューションアーキテクト
北迫清訓氏

音響メーカー 13社による ラインアレイスピーカーの体験デモを実施 イントレでの吊り上げ・吊り下げ作業と 大音量の迫力を実演

サウンドデザイナー 大内 健司 氏 インタビュー

Inter BEE 50周年を記念する催しの1つとして、昨年初めて実施された「ラインアレイスピーカー体験デモ」。大好評を博した前回に引き続き、今回はさらにスケールアップした体験デモが行われた。

参加ブランドは昨年の9社を上回る13社に拡大した。9,000人収容できる幕張メッセのイベントホールに、13社13セットのラインアレイスピーカーが一堂に会したのだ。

均一で明瞭な音を伝えられるラインアレイスピーカーは、コンサートやイベント会場などで幅広く利用されている。その一方、2基1セットで構成されるスピーカーの1基だけでも大型のものは重量が800kgから1tはある。それを会場内に設置するのは大変な作業だ。音質はもちろん、その作業負担の軽減は舞台設営期間の短縮、安全対策の観点からも極めて重要になっている。今回は各社ごとにスピーカーの吊り上げ作業から大音量によるデモンストレーション、デモ終了後の吊り下し作業までトータルのプレゼンを行い、各社製品の特徴や個性をより

イナミックに実感できるようにした。前回に引き続き、この体験デモの制作を担当したサウンドデザイナーの大内健司氏に、体験デモの狙いと意義、来場者の反応などについて話を聞いた。



設置作業と音響効果を披露

■体験デモの内容と狙い

ラインアレイスピーカー体験デモの狙いは大きく2つある。1つは実際の現場に近い環境で各製品の設置作業を見てもらうこと。もう1つは音響面を比較検証してもらうことである。

各社に与えられた時間は、デモ30分とその前後に作業が30分ずつ。この間にラインアレイスピーカーを目的の位置に吊り上げ、大音量によるデモンストレーション、デモ終了後の吊り下し作業とプレゼンテーションまで行わねばならない。

今回は会場内に約10mのイントレを構築し、会場2階席の約7mの高さから吊した。人の高さを考慮すると、ちょうどイントレの頂上部分と視線が合う。音響面については各社が同じ会場、同じ音源を使って行う。条件が同じだから、各社製品の真価がより問われる。最初は反射の多いこの会場に難色を示すメーカーもあった。各社とも、事前に綿密に下調べし、システムで反射を抑える工夫を施し、最良の音質でデモに臨んだ。会場にはコンサートの運営会社、レンタル会社、大型コンサートを手掛けるPA担当者など業界のプロが集まる。各社とも自社製品の力を最大限に発揮してくれた。

参加企業は 昨年の9社から13社へ

■体験デモの見所

参加企業は有力な音響メーカーばかり。それぞれの製品に特徴がある。1社に与えられた時間は吊り上げで30分だが、その中でも作業時間に差がある。また小型で大音量のもの、音質の鮮明さを追求したものなど様々だ。

■デモの実現に向けて苦労した点

最も大変だったのは安全面だ。先述したようにラインアレイスピーカーは1基だけでも最大1t近くある。荷重に耐えられるようにイントレを設計し、モーターや吊り上げ用の機材まで慎重に選別したという。

背面カメラで “裏方”の仕事も見せる

■今回工夫したポイント

吊り上げ・吊り下しのデモでは、どれだけ簡単に、どれだけ少ない人数で作業できるかが重要なポイントになる。昨年はこのプロセスを見せていなかったため、スピーカーの背面は立ち入り禁止にしていた。だが、吊り上げ・吊り下し作業の全貌を把握するには、正面からの様子だけでなく、背面からの様子も知りたいはずだ。そこで今回はイントレ背面にカメラを設置し、作業中の様子を大型ディスプレイで映し出すようにした。「実際の作業をイメージしやすい」と非常に好評だった。

■今後の展望

参加メーカー、来場者にも好評だったことから、ラインアレイスピーカー体験デモは来年以降も継続して行っていきたい。またラインアレイ以外のスピーカーについても試聴会を行ってみたい。各メーカーはそれぞれ特色のある製品を持っている。その魅力を最大限に引き出し、メーカー、利用者双方にとってメリットのある展示の実現に貢献していきたいと話す。



国内初！ドローンによる 空撮フライトのライブデモを実施 映像表現の可能性を広げる 飛行・撮影技術に多くの来場者が熱視線

MTS&プランニング ドローン事業部 ドローン事業課
宇田 丞 氏 インタビュー



“空の産業革命”と言われる「ドローン(無人航空機)」に対する期待は大きい。産業、農業、災害支援など活用用途は多岐にわたる。映像・放送業界でも、その活用に向けた動きが活発化している。ドローンを利用すれば、人が入り込めないエリアの撮影や、鳥のような俯瞰的な映像表現が可能になる。

ニーズの高まりを受け、Inter BEE 2015では今回初めてドローンの空撮デモを実施した。実際の空撮現場に近い屋外環境で専門オペレーターによる撮影フライトを行い、その性能や活用性をデモンストレーションするというもの。会場内に設置された屋外大型LEDディスプレイに空撮映像が映し出されると、来場者の多くが驚きの声を上げた。

ドローン世界最大手の中国・深セン市大疆創新科技(DJI)をはじめとするドローンメーカーが、それぞれの製品のデモを通じて活用方法などを提案した。デモ参加企業はエンルート、サークル、DJI JAPANの3社だ。

今回オペレーションを担当したのは、MTS&プランニング、エンルート、ヘキサメディアの3社によるチーム。MTS&プランニング ドローン事業部 ドローン事業課の宇田 丞氏に、ドローン活用の可能性や来場者の反応などを聞いた。

「陸」と「空」から ドローンで撮影

■体験デモの内容と狙い

同社が実施したデモは、自走型ロボットとドローンを組み合わせ「陸」と「空」から撮影を行うもの。1つは自走型ロボットにガード付小型ドローンの「PG360」を組み合わせた。もう1つは自走型ロボットとマルチコプタータイプの大型ドローン「PG700」を組み合わせた。いずれも自走型ロボットとドローンをケーブルで接続し、有線給電を受けながら撮影を行うスタイル。

自走型ロボットとドローンに搭載したカメラで撮った映像はフルハイビジョンで伝送され、会場内に設置された屋外大型LEDディスプレイにリアルタイムで映し出す。「陸」と「空」の映像が遅延なく伝送できることをアピールした。



空撮映像を大画面で リアルタイムに表示

■ドローンによる空撮実績

同社はテレビユー福島の子会社。番組の景観空撮や遠隔地を実施する積算業務において、2013年よりドローンによる空撮映像の制作を手掛けている。なかでも火山活動の監視業務では国内屈指の実績があるという。

宇田氏は、「ニーズの高まりを受け、今年新たに私が所属するドローン事業部を立ち上げた。豊富な実績を強みに景観空撮、インフラ点検、計測用飛行、調査飛行などの業務を請け負っている」という。

これまでの空撮実績に加え、今年2月にはドローンの技術開発を行うエンルートと業務提携し、受注生産体制を整備。エンルートの技能認定資格を持つ専門オペレーターを多数擁しており、空撮や計測飛行に必要な技術・知識の指導も行う。ドローンの販売・製作(カスタマイズ)、オペレーション指導、アフターメンテナンスまで含めたワンストップサービスを提供できるという。

■初めての空撮デモを振り返って

ドローンの商業展示会としては、今回のデモは国内で初めての取り組みだ。宇田氏は「多くの来場者に足を運んでいただき、映像・放送業界のドローンに対する関心の高さを改めて痛感した」という。デモ会場については「ドローンの魅力や性能を十分に伝えることができたと思っている」と話す。

空撮デモはドローンの 魅力を伝える絶好の機会

■Inter BEE への期待と今後の展望

実際に専門オペレーターが屋外でドローン进行操作し、撮影フライトを披露する展示会はなかなか実施が難しい。「今回のデモは画期的。今後も継続して行ってほしい。多くの人にドローンの魅力と可能性を伝えていきたい」(宇田氏)。

一方でドローンを悪用する事件の発生などを受け、飛行を規制する改正航空法が12月10日に施行された。公共性や安全面を考慮すれば、当然の措置だと思う。一旦ドローン飛行の門は閉ざされるが、安倍首相が宅配サービスに使用させたい考えを示すなど産業利用の可能性はますます広がつつある。今後は一定のルールの中で、ドローンの産業分野への活用が進むものと思われる。



VRによる 疑似体験型コンテンツが 映像の新しい使い道を 切り拓く原動力に

HEART CATCH CEO & Co Founder
西村 真里子氏 インタビュー



INTER BEE EXPERIENCEでは、ライブエンターテインメントやコンテンツテクノロジーを核とした新しいクリエイティブの姿を探るカンファレンス「LECT 2015」(Live Entertainment & Contents Technology Conference)が11月18日に開催された。13社がテーブル展示、12のプレゼンテーションと企画セッションで構成された、今回初めてのイベント。その一つが「VR/ARが切り拓く、疑似体験型コンテンツの未来」と題したパネルディスカッションだ。

VR(仮想現実感)を中心に、映像コンテンツの将来像について、熱い議論が飛び交った。モデレーターを務めた映像プロデューサーでHEART CATCH CEO & Co Founderの西村 真里子氏に、パネルディスカッションの狙いと意義を尋ねた。



LECTでは、主催者企画ステージとして二つのパネルディスカッションが開かれ、それぞれのテーマに沿ってアーティストらによるプレゼンが催された。企画ステージの一つ「VR/ARが切り拓く、疑似体験型コンテンツの未来」では、西村氏がモデレーターを務め、VRコンテンツディレクターのカヤック 泉 聡一氏、ドローン撮影カメラマンのヘキサメディア 野口 克也氏、アーティスト、インタラクションデザイナーの市原 えつこ氏がパネリストとして参加し、同テーマについて現状と展望を議論した。

西村氏は、VRを「映像が体感に近くなる」という。「没入感による臨場感で映像に新たな価値が生まれる。言ってみれば体験に近づく映像の表現力だ。今回、Inter BEEでセッションを開催したのは、映像がそうした新しい価値を生み出すことができるということ、映像制作機器やソフトウェア開発者、さらに映像制作の現場にいる人に伝えることが狙い」(西村氏)



コンテンツ編集力と 体験の提供がポイント

セッションに登壇した泉氏は「次のステップは自分がそこにいるという感覚を与えることだ」と言う。市原氏は、「クリエイターには複合的な体験を編集する力、キュレーション力が求められる」と今後のコンテンツ製作者に求められるポジションを説く。野口氏は「たとえばスポーツの試合を、ドローン×360°カメラでリアルタイムに配信し、VRで視聴することができれば、国内外どこにいてもまるでスタジアムで観戦しているような体験ができるようになる。今後はそのようなコミュニケーションや共有体験を提供していくことになるのでは」と、映像コンテンツの変化を指摘する。

西村氏は、キーワードとして「編集力、キュレーション力の要求」、さらには「新しい体験の形の提供」を掲げた。VRやARといった新しい映像表現がクリエイターに求めるものは、従来型のコンテンツとは違う立ち位置にあるようだ。

西村氏は「テレビ番組制作の高いクオリティーがVRの世界に入ってきたら、より没入感のある映像体験が提供できると信じています。VRはネット系クリエイターだけではなく、テレビ業界・映画業界の人こそ取り組んでほしいと考えています」と話す。

高解像度化で より深い体験を

疑似体験型のVRのコンテンツというと、エンターテインメント性の高いものを想像することが多い。しかし、西村氏はもっと違う分野でもVRの活かし方があるのではないかと問題提起をする。「臨場感、没入感、高解像度化により、さらに高いレベルに達することができる。VRも含めた新しい映像表現について、テレビをはじめとしたプロフェッショナル映像制作者が積極的に活用していくことが大切。新しいデバイスや技術と、今までのノウハウを掛け算してこそ新たな映像体験が提供できる」(西村氏)。





iPhone だからこそ撮れたし、 iPhone だからこそ意味があった。 新たな表現を開拓したプロフェッショナルたち。

iPhoneだけで商用映像が撮影できる時代に！ AppleのCMで使われた美しいパプアニューギニアの景色、女子高生たちが忍者のように街中を駆け巡っていくサントリー C.C.レモンのネット用映像。いずれもiPhoneだからこそ捉えることができた映像で構成されている。パプアニューギニアの映像を撮影した岩元康訓氏、忍者女子高生を制作した博報堂ケトルの石原篤氏、BIJIN&Co.の西藤篤史氏、CG&VFXアーティストの西藤立樹氏に、どのようなコンセプトと想いでこれらを作り上げたのかを語っていただいた。



「誰もが撮影を行える」そこに意味がある。

例えば、いつ転覆するかわからない丸木舟には高価なハイスピードカメラを乗せられないし、水深30mの海中・珊瑚礁の下のわずかな隙間がつつりしたカメラなんて仕込めない。「大きなカメラでは怖がって出てきてくれない動物も、iPhoneだったら威圧感がないのか目の前に出てきてくれるんです」と岩元氏。

実際、その地域では初観測、映像に捉えられたのは世界でも2例目というエポレットシャークの撮影に成功している。だが、iPhoneを使ったのはそうした「初」を目指したからではない。「高画質なカメラだからその映像が撮れたんでしょ？」という風潮に対するアンチテーゼの意味で、誰にでも扱えるiPhoneを使いたかったのだと岩本氏は言う。18倍の望遠レンズも1万円しない中国製のものを使っている。

「iPhone1つだけで誰もが映像を作れるんだよ、という土壌を作りたかったこともあります。こんなに手軽に誰もが映像を撮影できて編集できる、映像の歴史の中でもこんな状況は初めてです。機材を持てる人だけが作れる世界ではなく、誰もがアイデア勝負で映像を作れる。

その道が開けたらいいなと思っています」

一方、忍者女子高生のチームは素直に「面白い映像を作りたい」という部分からスタートしている。「監督やカメラマンだけではなく、アシスタントプロデューサーや役者も含め、全員でiPhoneを持って撮影していました。だからカメラマンが撮ったカットじゃないものも結構あります」と石原氏。

誰もが撮れるし、その場でプレビューできるので、現場のサイクルが早かったと西藤篤史氏。「厳しいカメラじゃないので、一緒にどう作ろうか、スタッフ・役者ともに盛り上がり、よりよい方向に進みました」

「iPhoneだと身構えずに演技できるのがいいですね。ラストカットの炭酸が飛び出る部分、合成ではなくアナログで作った仕掛けで、あれはリアルな役者さんの反応なんです」(西藤立樹氏)。

いずれの作品も、素の面白さをどのように映像に残すかという部分にiPhoneが生かされているように感じる。4Kも撮影できるようになり、さらなる可能性の広がりが見えてきている。



ムービーディレクター
岩元 康訓 氏



株式会社博報堂ケトル
クリエイティブディレクター
石原 篤 氏



BIJIN&Co. 株式会社
プロデューサー
西藤 篤史 氏



CG&VFX アーティスト
西藤 立樹 氏

新たな映像表現の可能性へ。 ネットターゲットだから生まれた、 ショートフィルム。



街中にある謎のボタンを押すと、通りすがりの人が突然野球を始めるトヨタの『G's』、教室でのちょっとした遊びがエスカレートし、女子高生二人が街中を忍者のように縦横無尽に駆け巡るサントリーの『忍者女子高生』。全編1カットでドローン撮影したOK GOの『I Won't Let You Down』PV。いずれも既存のCMとは異なる、面白い・すごい短編映像が実はプロモーションになっているという作品たちだ。これらをブランデッドフィルムと命名し紹介した、コマーシャル・フォト総括編集長の川本康氏と、P.I.C.S.クリエイティブディレクター寺井弘典氏に話を伺った。

写真左
コマーシャル・フォト 総括編集長
川本 康氏

写真右
P.I.C.S. クリエイティブディレクター
寺井 弘典氏



まとめるきっかけは、 映画祭からのアプローチ

二人が組むことになったそもそもの始まりは、P.I.C.S.が2005年頃から積極的にバイラルCMに取り組んでおり、コマーシャル・フォトで記事にしていたことにさかのぼる。そのような流れがここ1、2年で活発になり、札幌国際短編映画祭側から「クライアントありきのおもしろ映像をとりあげられませんか」とアプローチされたのだ。

「毎年、ネット上でどうやって話題を作るのかという部分がどんどん進化している感じがありますよね。その最先端が今日見た作品群だと思うんです。メーカーさんやクライアントさんも、このムーブメントは無視できない状態まで来てるんです」(寺井氏)

「広告表現ってなかなか自由度がな

かったりするんですが、ネットに向けたところに新しい表現のチャンスがあったんですね。それをブランデッドフィルムと名付けたんです」(川本氏)

2015年10月9日に札幌国際短編映画祭で初上映されたが100人規模の館は満員となり1作品上映するたびに拍手が起こったという。基本的には1画面1人の視聴想定で作られた映像だが、不特定多数の人と共有することで新たな視聴のあり方が生まれた感じがしたという。「ネット配信を目的に制作された動画でも、アイディアが際立っていれば劇場型上映も満足できることが分かりました。複数の方々が同時に見る、表現の自由度の高いブランデッドフィルムの上映を来年も川本さんとやっていきたいですね」(寺井氏)





アジアのクリエイターたちを支援して10年。
今、新たに増えてきたもの。
そしてこれからのDigiCon6。

DigiCon6がアジア展開を始めて10周年を迎えた。10年間に多くの受賞作が世に出、それがきっかけで立ち上がったスタジオなどもある。節目の年として、この10年間の受賞作を振り返り、アジアにおけるクリエイティビティは変化したのか成長したのか?をテーマに講演が行われた。講演後、DigiCon6の創設者であり、フェスティバルディレクターを2013年まで務めた山口泰広氏と、2014年よりフェスティバルディレクターに就任した山田亜樹氏に話を聞いた。



「伝えたい」のその先へ。 クリエイターの次の形

ステージでは10年間の受賞作を上映しつつ振り返り、今年度のdc6 ASIA Goldに輝いた『Johnny Express』の圧倒的な完成度、弱冠17歳ながらプロ顔負けのストップモーション作品を展開しdc6 JAPAN Youth Goldを獲得した『故障中』に触れ、今後の展望などを語った両氏。登壇後に、改めて感じたことを聞いてみた。

「アニメーションの技術や画面サイズ、手法などは変わりましたが、表現したいもの自体は変わってないと思います。面白いものは、昔の作品であっても今でも面白い。結局作る“人”なんだと思います」(山田氏)

「昔は技術先行が多いかな、というのがあったんですが、この10年を見ると“ス

トーリーをよく考えるようになったなあ」と思いますね。見せるということを意識して、1つのフィルムとしての完成度が上がってきてるなと思いました。これを作るってすごいでしょ、というところから、僕たちはここから世界に行くんだ、という明確な意識に変わっているのが感じられますね。例えば『故障中』の17歳の天才少年。見る人が楽しんでくれるような作品を作りたいというのが根底にあって、まず自分の作品を作ってアドマンスタジオに入って、その後独立して……という未来のビジョンを明確に持っている。こういったクリエイターがもっともって増えてくれればいいなと思います」(山口氏)



dc6 JAPAN Youth Gold を受賞した水越清貴さんのストップモーションアニメ『故障中』



「見る」だけではなく「体感」を加えて、 新たな没入型映像エンタテインメントへ。

劇場での映像体験は進化し続けている。高解像度と高視野角のIMAX、立体表現を加える3D、VRとの組み合わせなど様々な方向に展開されている。そこへ視覚だけではなく、体感によって新たな没入感を得るようなアプローチが登場し、広がりをみせている。

4DXは、映画を「観ること」から「経験すること」へのパラダイムシフトを引き起こす革新的な映画フォーマットだ。スクリーン上の視覚効果を大幅に高めるために、画面上の動きと座席が同期されるほか、風、霧、雨、雷、匂い、雪そして暴風雨を再現。五感に訴えかける、没入性の高い映画体験となっている。

これは、CJ 4DPLEXが開発した技術で、導入している映画館の数は毎年増加している。2015年12月時点で37カ国の228拠点で30,000以上のシートが4DX対応となっている。日本は急成長市場であり、国内で33拠点を運営。2010年以来、290以上のハリウッド映画及び邦画が4DXで上映されている。

この4DXを展開している、CJ 4DPLEXのクリエイティブディレクター、チェ・ヨンスン氏に展望を聞いた。



続々増える対応館。 3スクリーンの新型も開発中

4DX対応映画は年々増えており、2015年には『ジュラシック・ワールド』『マッドマックス』などが日本でも4DX上映されたが、ハリウッドのブロックバスターの多くが4DX対応となっている状態だ。全ての4DX映画館にはスクリーン上のアクションと完璧に同期したモーションチェアや風、水、霧、雷、泡そして匂いを含めた多感覚環境効果が装備されている。要素だけ見れば、テーマパークのライドと変わらないように見えるが、大きく違う点がある。ライドでは常に何らかの効果が観客に与えられるが、4DXでは演出上、意味のあるシーンにのみこれらの効果を加えて、より観客の没入感を促すように考慮されている。

「まず最初に、モーションエディターが、映画を100回以上観て、どのような効果を出したらいいのかを絵に描いて組み上げていくんです。最終的に自ら座ってデザイン調整し、監督のクオリティ承認を得てからリリースされます」

4DXは映画だけに使われるわけではなく、車や飛行機、コーヒーなどのCMにも効果的。さらに、ミュージカルやコンサート映像などにも展開している。

それぞれの映画で、平均的な映画館の視聴覚の限度を超えて観客を刺激することを意図したモーション、振動、空気、水、臭い、霧、雷、泡等を注意深く組み合わせさせて演出する。

これに加えてScreenXと呼ばれる新

しいスクリーンモデルは、ストーリーの表現力を高め、観客にパノラマ体験を提供する三面構造で、映像を映画館の壁面に投影することで観客に対してスクリーンの枠を超えた体験を提供できる世界初のマルチプロジェクションシステムとなっている。これによって、観客をより深く映画の世界に引き込む没入性の高い270°の視聴環境が実現される。

「映画館で、映像の世界に没入できるような体験ができるよう、これからも最善を尽くしたいと思います」



テレビ局の海外進出は女性が決め手！ 女性の特性が活きてくる、 開拓と文化交流のリアル。



クリエイティブの現場で働いている女性にフォーカスを当てる『Woman's Session』。2015年は、テレビ局の中で海外事業を担っている女性にフォーカス。ソニー・ピクチャーズと共にシンガポールで合併会社を設立、GEM(ジェム)というチャンネルをアジア向けに展開する日本テレビの藤本鈴子氏。海外市場へ番組販売やフォーマット販売などを行っているテレビ朝日の新堀仁子氏。海外でのビジネスモデルを企画し、複数の共同制作番組を立ち上げているTBSテレビの和田のり子氏。日経BPヒット総合研究所長・執行役員、麓幸子氏をモデレータに、実情や課題などが話し合われた。その登壇後、可能性や展望について聞いた。



日経 BP ヒット 総合研究所長・執行役員
日経ウーマン前編集長
麓 幸子 氏



株式会社東京放送ホールディングス 次世代ビジネス企画室兼
メディア戦略室「i-camp」担当局長/国際共同制作プロデューサー
和田のり子 氏



日本テレビ放送網株式会社
海外ビジネス推進室 海外事業部長
藤本 鈴子 氏



株式会社テレビ朝日
総合ビジネス局 国際ビジネス開発部長
新堀 仁子 氏

文化の違いをどう生かして 商品にしていくか

海外での仕事で一番難しいのは何かと聞くと、お三方とも「マネタイズ」を挙げられた。ステージでは、「コンテンツを持つ者が勝ちにいける」という話が展開されていたが、同時に「テレビ局には番組以外に売れるものがない」という状況でもある。商材が乏しい中、でもだからこそ、女性の柔軟性が活かせる場でもあるという。

「短期間で利益を上げて、成果を出そうと思っていたら、できない仕事ですよ」と新堀氏。市場としての可能性はあるものの、現状ではまだまだ手探りで開拓しているような状況であり、2~3年では手堅い見通しは立たないという。「今までのノウハウがあまり通用しない世界ですからね。そういう意味で女性は向いていると思います、あきらめないから」と性質的なメリットを説く和田氏に続き、藤本氏も「TV局って本質はかなりドメスティックな業界だから、そこでメインストリームを走っている男性にはやり辛いですよ。女性は出世ばかりに目が向いていないぶん、この仕事は向いてるかもしれないですね」と立ち位置の違いが活かされていることも強調する。

さらに、海外とのやり取りの中では、

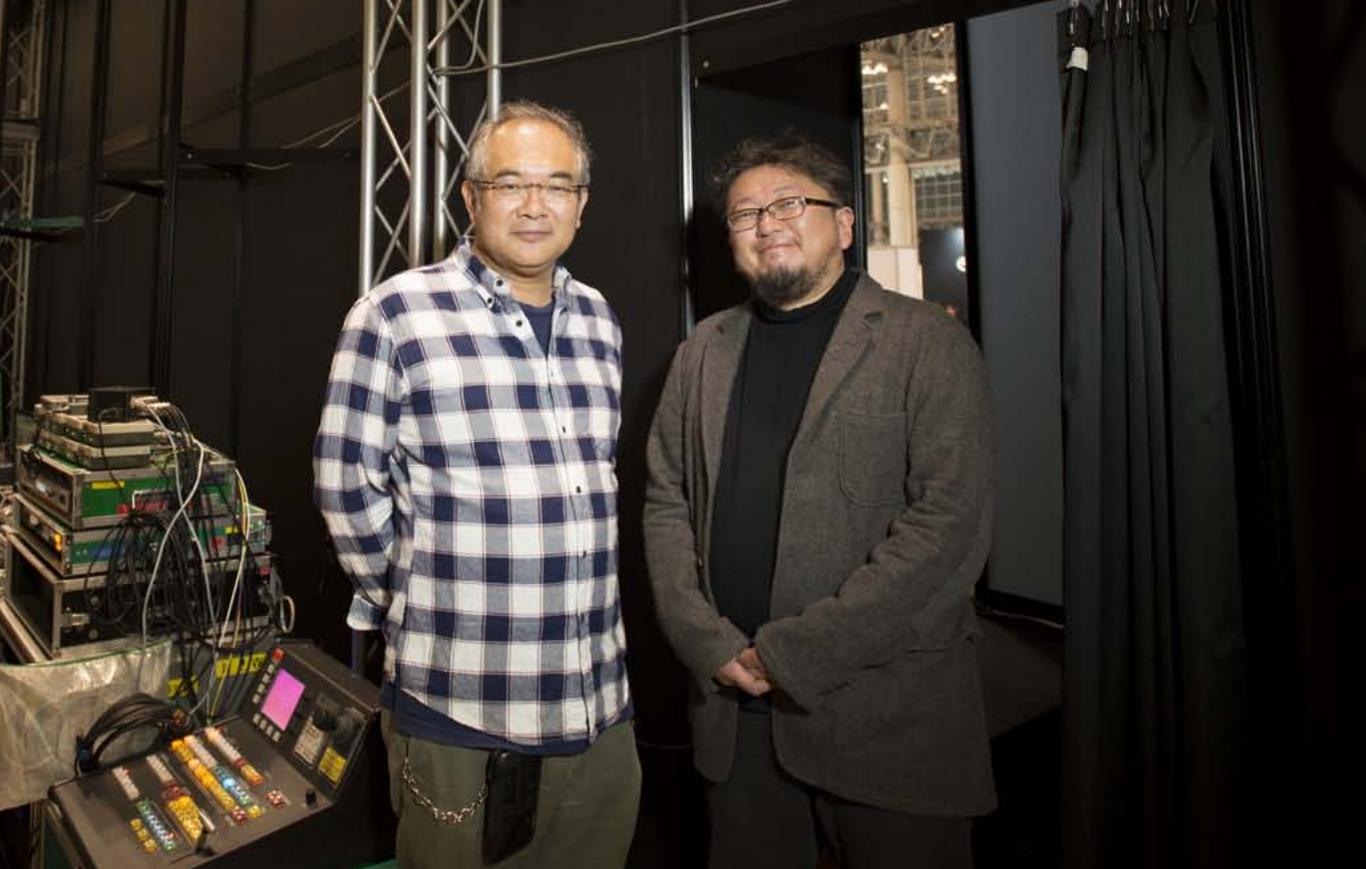
文化の違いに振り回されることも多いのだそう。予告なしに4週間の休暇に出る、CMが飛ばされる、声が吹き替えられる、ラマダンのときは仕事がストップする、など予想外の展開が起こるからこそ「共存から生まれる文化やメッセージがあると思う」と和田氏。そんなお三方の今後の展望について聞いてみた。

「マレーシアのゴールデンタイムに、TBSと日本テレビで木曜・金曜と枠を持っていた時、お互いに協力して視聴率を上げるようなキャンペーンができませんかと考えました。正直、海外はまだ競い合うほどの市場規模になっていないですから」(和田氏)

「GEMを成功させないといけなくて。東南アジアって、モールなどのサイン会やコンサートイベントの効果が大きいんです。韓国などではすごくやっていて成功しているんですが、日本はまだまだ。実績を作ってちゃんと日本のタレントを呼べるようにしたいですね」(藤本氏)

「モバイルで見られるコンテンツを作りたいですね。アプリとの連携もそうですが、これからの人たちが興味を持って見てくださって国境を越えられるようなものが出来たらいいですね」(新堀氏)

『進撃の巨人』の裏側！ 樋口監督が目指したテイストと、 それを支えたVFXの技。



2015年夏、前後編にわたって公開された映画『進撃の巨人 ATTACK ON TITAN』。制作開始から公開までの時間が非常に短かったにも関わらず、「巨大な壁」「立体起動というギミック」「巨人」の作品的な3つのテーマが、そのまま映像制作のハードルにもなっていたこの作品。これらを現場がどうクリアしていったのか、何が検討されたのか、どのように映像化していったのか、といったことを監督の樋口真嗣氏とVFXスーパーバイザー/特撮監督の佐藤敦紀氏に講演いただいた。講演後、さらにコアな部分について、お二人に話を伺った。



映画監督
樋口真嗣氏



VFXスーパーバイザー/特撮監督
佐藤敦紀氏



巨人もフィルムも荒々しさの中で生まれた

■本作に対するこだわりはどこでしたか？

樋口：「若さ」ですね。未成熟＝可能性であったり、無謀な勢いだったりを様々な表現の中に入れてます。わざと「きっちり」「どっしり」しない作りですね。原作者もキャストも若いんですね。自分はどうちかという巨人の側に近いので(笑)、若さを忘れないようにと。意識しないと、ついつい自分の実年齢に合わせた物の作り方になってしまうので。

佐藤：結構、下駄はかせてるって感じなんです。

樋口：ええ。無理して若作りしてます。

佐藤：無理してるかな？結構、素のまま出ている気がするけど(笑)。

樋口：え～？ 相当、疲れますよ。「うおー！若いもんには負けんぞー！」って走るとぜいぜいしちゃう。

佐藤：脂っこい映画も出来たってことですね。

樋口：脂っこい!? おかしいな、そんなつもりなかったのに。スポーツドリンクみたいな、さわやか？コーラみたいな方向を……。

佐藤：結果的には背脂チャッチャ系のラーメンみたいになってるよ。コクがないとね、みたいな。おなかいっぱいにならないと満足しないから、ね。

樋口：どんどん食べて！お代わりしてって！みたいな感じですか(笑)。

■メイキングを見せていただいて、撮影したカットをパズルのように組みわせているのに驚きました。

佐藤：例えば、しっかり画角合わせて作ると、逆にパース感が出なかったりするんです。さりどてVFXのルールブックみたいなものに沿った撮り方してるかって言ったら、落第生もいいところですよ。

樋口：でも、馬鹿正直にモーションとかを使うよりは、そっちのほうがいいわけでしょう？

佐藤：馬鹿正直にやってたら撮影終わってなかったしね。

樋口：縦方向の移動をトラッキングかけて止めると、画は止まってるんだけどパースだけ変わってきますよね。それをもう1つのほうに、固定したレイヤーとしてコン

ポジットすると意外と合う。滑りはしないし、かといって板っぽくもならないという。

佐藤：激ムズだけどね、それ。冒頭のおとり巨人とかがそれですね。

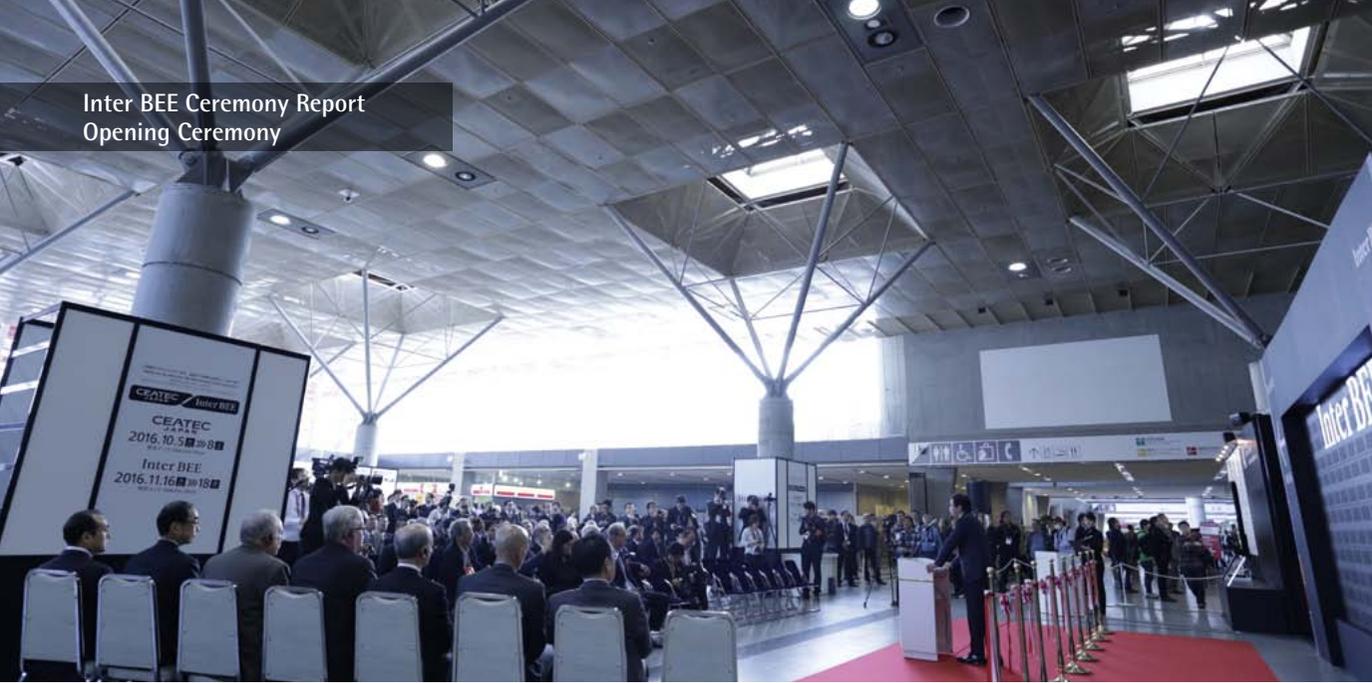
樋口：すごいうまくいってるよね。あれは、たまたまなんですか？

佐藤：いえ、たまたまではございません。かなりの微調整が必要だったんです。

■講演で『巨神兵東京に現わる』の話が出ましたが、今回も特撮手法を現代風に入れるようなアプローチはありましたか？

佐藤：俺と尾上(克郎・特技監督)さんは、その意識はありました。特に尾上さんはオールCGになったときの画面のツヤのなさをすごく警戒してましたね。巨神兵からもう一歩進んだところで、じゃあ今度は？ っていう課題はありました。

樋口：そういう部分はもちろんあるけど、「昔の映画っぽくしたい」とかそういうのはないですね。回顧主義でなく、今どきの映画にしなきゃいけないってのはありましたね。



音と映像と通信のプロフェッショナル展 Inter BEE 2015 過去最多となる996社・団体が1,780小間出展 2020年以降の新たなパラダイムへ向け、始動

開会セレモニーとともに華やかに開幕

一般社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA: 会長 水嶋繁光 / シャープ株式会社取締役会長) 主催による、音と映像と通信のプロフェッショナル展「Inter BEE 2015 (インタービー 2015)」が、11月18日 (水) から20日 (金) までの3日間、幕張メッセで開催された。開催規模は、過去最多となる昨年をさらに上回り、出展者数996社・団体 (うち海外31カ国・地域から540社)、出展小間数

1,780小間となった。開会式では、後援の総務省、経済産業省、NHK、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人電波産業会の関係者のほか、米国大使館、全米放送事業者協会 (NAB)、国際放送機器協会 (IABM)、ブラジルテレビ放送技術協会 (SET) の要人も列席し、Inter BEE 開幕の催しが執り行われた。



国内外の業界関係者によるテープカット (テープカット登壇者左から)
塚本 昌人 委員長
(2015年国際放送機器展実行委員会)
オリビオ・フランコ 氏
(ブラジルテレビ放送技術協会 会長)
スキップ・ピーズィ 氏
(全米放送事業者協会ニューメディアテクノロジーズ
シニアディレクター)
前田 泰宏 氏
(経済産業省 大臣官房審議官)
吉田 真人 氏
(総務省 大臣官房審議官)
アンドリュー・ワイレガラ 氏
(米国大使館 商務担当公使)
ピーター・ブルース 氏
(国際放送機器協会 APAC 理事)
川上 景一 常務理事
(一般社団法人電子情報技術産業協会)



■総務省 大臣官房審議官
吉田 真人 氏

「革新的な新サービスの創出による 強い経済の実現へ」

来賓あいさつに立った、総務省 大臣官房審議官 吉田真人氏は、次のように述べた。

Inter BEEは昭和40年にスタート。半世紀に及ぶ歴史を誇るイベントだ。また、国内外の最先端の放送機器や放送分野の専門家の皆様、あるいはメディア産業を率いる多くの方々が一堂に会する場でもある。今年も放送分野の一層の発展に繋がるような素晴らしいアイデアが、この会場から数多く生まれる事を大いに期待をしている。

放送開始以来の大きな事業であった「地上テレビのデジタル化」については、放送産業の関係者、さらには視聴者、国民の多大なる協力により、本年3月に移行作業が完全に終了した。しかし、放送技術の変化・スピードは激しい。すでに関心は4K・8Kスーパーハイビジョンに移っている。4K・8Kは政府全体の戦略である「世界最先端IT国家創造宣言」においても、新事業創出、あるいは国際競争力の強化の中心的な役割に位置づけられている。

総務省は、この4K・8Kに対応した放送サービスのスムーズな実現に向けて、関連するロードマップをこの7月に改訂し、ロードマップに沿った取り組みを強力に推進している。

4Kはすでに本年3月から4月にかけて124・128度のCSや光サービスによる実用放送が相次いで開始されている。12月にはケーブルテレビによる4K実用放送も始まる。2016年には、BSによる4K・8Kの試験放送が開始される予定だ。

東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年には、およそ全世帯の半数の世帯で4Kテレビが普及するという試算もある。高臨場感、高品質の映像を各家庭で視聴できる環境の整備が期待されている。4K・8Kは放送分野のみならず、教育・学術・医療など、様々な産業用途を含め幅広い分野への応用が期待されている。今年の展示会場でも、これらの取り組みに関係する様々な機器が数多く展示されていると聞く。

我が国は、放送機器の分野ではこれまでも世界をリードしてきたが、革新的な新サービスの創出といった面で強い経済の実現、成長を促進する社会の実現に向け、関係者の協力を得て、さらに取り組みを強化していきたい。



■経済産業省 大臣官房審議官
前田 泰宏 氏

「新しい時代に向けた パラダイムの提示に期待」

続いて、経済産業省 大臣官房審議官の前田泰宏氏が来賓あいさつに立ち、次のように述べた。

1964年の東京オリンピック・パラリンピックを契機に、カラーテレビ全盛の時代が日本、あるいは世界で始まった。このInter BEEも1965年なので、オリンピックの余韻が冷めやらぬ時に第一回が始まった。それから今までに50年経った。

2020年、我々はどういう放送コンテンツ・映像をどのように作って、どのような機器・空間を通して、オリンピック・パラリンピックを楽しむのか。50年間カラーテレビが主役の座を譲ることはなかった。これからも、放送の世界について、非常に重要なメディアだが、一方でIoTの時代になったとき、メディアは多様化していくだろう。

2016年のブラジル・リオのオリンピックが終わると、世界は東京一色になる。私の知人は、「渋谷のスクランブル交差点で、バーチャルに砲丸投げの選手を出演させたい」という。あるいは、日本にあるいくつかの寺社・仏閣に大きなスクリーンを用意し、陸上100メートル競争の決勝戦が放映され、そのもとで子供たちがかけっこをするというシーンも容易に想像できる。

そうした中で、Inter BEEという大きな伝統ある展示会が、2020年に向けてどういった新しいメディア・放送を発信していくのか。グローバルに向け、このメッセージが問われる時代がきた。既存の考え方も重要だが、新しい時代に向けた一つのパラダイムがどう変わるのか。1964年のオリンピック・パラリンピックと何が違うのかを明確にしながら、メッセージを発信していきたい。総務省と共にInter BEEを盛り上げていきたい。





Inter BEE レセプション 4K・8K 放送の幕開けを飾る Inter BEE 2015 新たな放送の時代へ向け 出展企業、放送局の連携を示す催しに



開催初日の18日午後6時、APAホテル東京ベイ幕張において、「Inter BEE 2015 レセプションパーティー」が、後援団体、協力団体、NHK、民放各局関係者、および出展企業各社の幹部を招いて開催された。



冒頭、Inter BEE 2015 実行委員会の塚本昌人委員長が登壇し、主催挨拶を述べた後、一般社団法人日本民間放送連盟 技術対策小委員長の川口忠久氏が来賓祝辞をし、日本放送協会の理事・技術長 浜田泰人氏による乾杯挨拶で会場に集った関係者による乾杯が一同に執り行われた。会場は多くの業界関係者で埋まり、過去最高の出展企業数が参加する51回 Inter BEE を象徴する賑わいとなった。

「過去最多の996社が出展」

国際放送機器展 実行委員長の塚本氏は、次のように挨拶した。「51回目の開催となります今回は、過去最多となる996社に出展頂き、本日盛大に開幕した。今回の Inter BEE が情報交流やビジネス創出の場として役割を果たし、出展者・来場者の皆様がこの機会を効果的に活用され、十分な成果が得られることを期待申し上げます」



「放送高度化技術の最前線を Inter BEE で」

続いて来賓祝辞に立った、一般社団法人日本民間放送連盟 技術対策小委員長の川口氏は、まず2015年の春までに一部の世帯に残っていた難視対策がすべて終了し、日本の全世帯が地上デジタル放送に移行したことを報告。「地デジ移行という大事業が、放送開始から11年の歳月を経て、最終的に完成した」と述べ、「ここにお集まりの放送機器メーカーの皆様や全ての関係者のご尽力・ご協力に対し、改めて感謝を申し上げます」と、業界一丸となつての地デジ移行達成に感謝の意を表した。

続いて、地デジ難視対策に使用していたBSの帯域において4K・8K試験放送が行われることに触れ、「新しい時代の幕開けを実感」と述べた。

川口氏は「4K・8Kのコンテンツ制作の分野では、その高解像度はもちろん、広い色域、高品位の音声、さらに急速に検討が進んでいるハイダイナミックレンジに、世界的に高い関心が寄せられている」と指摘。「こうした新しい技術をどのようにテレビ放送に取り入れていけばいいのか、質感や臨場感に溢れる映像を視聴者にどのようにお届けできるかしっかり検討していきたい」と述べた。

また、AMラジオのFM補完放送が全国各地ではじまり、ワイドFMという愛称で普及が進んでいることや、来年3月にV-Low

マルチメディア放送が開局すること、さらに在京民放テレビ5社共同で10月26日から始まった見逃し配信サービスの民放公式テレビポータルTVer開始に触れた。

「外部環境は大きく変化し、視聴者のニーズは多様化している。それに応えるべく、放送の高度化技術も着々と準備されており、その最前線を Inter BEE の会場において、様々な形で見ることができる」とし、「放送機器メーカーの皆様共々、大きなチャンスと捉えて、ビジネスを拡大するためにも、これからも支援・協力をお願いする」と締めくくった。



「新しい放送機器で様々な放送の ワークフローを改革」

続いて乾杯の挨拶に立った日本放送協会 理事・技術長の浜田泰人氏は、乾杯の発声に先立ち、次のように挨拶をした。

昨年、Inter BEE が50回を迎えたことについて、「世界的には米国のNABや欧州のIBC、南米のSETなどがあるが、半世紀の時を経て、来場者数過去最高を記録した Inter BEE の存在感は、年々高まっている」と指摘。「最先端の技術を活用した放送機器を毎年出展された各出展者の尽力の賜物。こういった放送機器を通じ、我々は新しい映像文化、放送文化をお届けし、放送の現場での様々なワークフローを改革してきた」と述べた。

続いて、4K・8K試験放送に話題を転じ、「年が明けるといよいよBSで新しい4K・8Kスーパービジョン放送が開始される年になる。我々も、様々な取り組みをしており、ぜひご期待いただきたい。今回の Inter BEE 2015 を一つのきっかけにして、関係者の増々の飛躍の年にしていきたい。」と抱負を語った。





「つくる」「つたえる」をテーマに 最新4Kカメラシステムなどを展示 編集・配信のワークフローも提案し、 多彩な映像表現の可能性を追求

株式会社JVCケンウッドは「つくる」「つたえる」をテーマに、最新の4Kカメラシステム、4K対応の映像制作ワークフローシステムなどを出展した。

同社は日本ビクターとケンウッドが経営統合し、2008年10月に共同持株会社として誕生した。2011年10月には日本ビクター、ケンウッド、J&Kカーエレクトロニクスの3社を合併。新しい企業ビジョン「感動と安心を世界の人々へ」をスローガンに、一体会社としての事業展開を強化している。

今回のInter BEEでは昨年に引き続き、4K対応製品の展示に力点を置いた。業務用4Kメモリーカードカメラレコーダー「GY-HM200」、Super 35mmイメージセンサー搭載の業務用4Kメモリーカードカメラレコーダー「GY-LS300CH」、分離型4Kカメラシステム「GW-SP100」などはその代表格だ。

さらにアライアンスパートナーとの連携による4Kノンリニア編集システムなど、映像撮影後の編集・配信まで一貫して行うワークフローの提案にも注力している。

今回のテーマに込めた思いや展示内容などについて、メディア事業統括部 プロカメラ統括部 プロカメラ マーケティング部 ソリューション1グループで国内市場の販促活動に携わる古川 寛氏に話を聞いた。



株式会社 JVC ケンウッド
メディア事業統括部 プロカメラ統括部
プロカメラ・マーケティング部 ソリューション1グループ
スペシャリスト
古川 寛 氏



固定焦点レンズでズーム撮影を可能にする4Kカメラ

■今回の出展テーマと主力展示

今回のブースのテーマは「つくる」「つたえる」だ。放送の高精細化、デジタルネットワーク化に対応する多様な製品を展示し、映像の撮影・制作・編集から配信までトータルにカバーする“ソリューション”としてのメリットをアピールするのが狙いである。

展示の中心となるのが、4Kメモリーカードカメラレコーダーの「GY-LS300CH」と「GY-HM200」、分離型4Kカメラシステム「GW-SP100」などだ。

「GY-LS300CH」は、4K対応Super 35mmイメージセンサーとマイクロフォーサーズシステムレンズマウントを採用し、多様なレンズ装着が可能だ。ブースでは動作確認済の多種多様なレンズの試用コーナーを設置。レンズ交換型の利点を体験できるようにした。

今回の展示で特にアピールしたいのが「バリアブルスキャンマッピング」技術である。これは様々なレンズを最高のパフォーマンスで使用することを可能にした当社独自の新技術。レンズの有効径がセンサーサイズ未満の時に「ケラレ」が発生するが、スキャンサイズを変更することで、様々なレンズ・有効径に合う最適なセンサー領域を設定することができる。「Super 35mm」「MFT」「Super 16mm」などの多彩なレンズに対応する。

2015年9月にリリースした最新ファームウェアのVersion2.0では、この機能を進化させ、本体のズームレバーの操作で、撮像センサーのスキャンサイズの変換が可能となっている。固定焦点レンズで、

4Kの場合に最大約1.2倍、HDで最大約2.3倍のズームレンズとして使用できるのだ。ズームレバーでズーム速度を可変にすることもできる。固定焦点レンズのまま「もう少し被写体に寄りたい」「少しだけ画角を調整したい」といった撮影が可能になる。

機動力を活かした4K映像の撮影も可能に

■多彩な4Kカメラシステム

一方、「GY-HM200」はハンドヘルド型の4Kメモリーカードカメラレコーダー。持ち運びが容易な小型・軽量の4Kビデオカメラとして、機動力を活かした現場での活用を提案している。

また2016年1月以降に搭載を予定している多彩なカラーマトリクス設定や、最大120fps（フルHD時）の撮影機能を参考展示した。特にカラーマトリクス設定については、メーカーや機種の違いによる撮影映像の色合いの違いを調整できるのが特徴だ。違和感のない映像品質を確認できるようにするため、収録素材を使ったカラーマッチングのデモも展示した。

さらに「GW-SP100」はカメラ部と本体、モニター部分を分離した4Kカメラシステム。こちらも4K対応のSuper 35mmイメージセンサーおよびマイクロフォーサーズシステムレンズマウントを採用し、各種レンズの交換が可能となっている。4K（3840×2160）／60p撮影にも対応する。また分離型の強みを活かし、複数カメラによる連結撮影や遠隔操作撮影も可能だ。ブースでは2連結による切れ目のない撮影映像をデモ展示し、

多彩な映像表現の可能性を提案した。

そのほか、PTZリモートカメラシステムも参考出品した。これは4K対応Super 35mmイメージセンサーを搭載した小型4Kカメラモジュール。英Bradley社と共同開発した。遠隔操作でパン、チルト、ズームが可能で、光ファイバーケーブル1本で4K（3840×2160）／60p映像信号を長距離伝送できる。スタジオ、舞台撮影、野外撮影など幅広い用途で活用できる優れた設置／運用性能をアピールした。



来場者の意見が新機能開発のヒントに

■来場者の反応

今回のInter BEEでは4K製品に対する“潮目”が変わりつつあるのを実感する。昨年までは来場者の反応は様子見の感が強かったが、4K本放送の開始を間近に控え、導入を真剣に考え始めたようだ。価格や搭載機能、実際の操作性など質問もより具体的になった。カメラ製品だけでなく、編集・配信まで見据えたシステムに関する関心も高い。

当社としても、JUNSのノンリニア編集機との連携による4K／60p素材の取り込み・編集をシームレスに行える4Kノンリニア編集システムのデモ、朋栄製「MediaConcierge」との連携によるIPベースのメディアレス・ワークフローなどを提案した。

それに加え、お客様の導入事例や実例作品の展示を増やし、来場者に質問に的確に対応できるように常駐する技術説明員も例年より増員した。

■Inter BEEの位置づけと今後の展望

Inter BEEは最新製品や技術的な取り組みを広く紹介できる国内最大規模の展示会。お客様と直に接し、貴重な意見や要望が寄せられることもある。先に説明した「GY-LS300CH」の単焦点レンズでズーム撮影を可能にする機能は、実はお客様からの意見をもとに開発を進めたもの。バリアブルスキャンマッピング技術の特性を活かせば、技術的にできることはわかっていたが、昨年のInter BEEで来場者の方から指摘を受け、潜在的なニーズがあることを実感した。これを技術部門にフィードバックして新機能化したものだ。多くの課題やヒントを得られるほか、業界の技術動向も肌で感じられるので、当社では技術責任者が積極的に会場に足を運ぶように推奨している。

デジタル技術や放送技術の進化は速く、カバーすべき領域も広がりがつつある。当社の技術だけでは市場のニーズに迅速に対応することは難しいこともある。今後は他社との連携強化も視野に入れ「スタジオオートメーション」を実現するソリューション開発を強化していきたい。そのパートナーを発掘する場としても、Inter BEEには大きな期待を寄せている。



音響機器の利用シーン拡大に 音響、映像部門の2ブースで訴求

ティアック株式会社はInter BEE 2015のブースに、同社のレコーディング機器に使用されているブランド「TASCAM」の新製品を中心に展示した。デジタルマルチトラックレコーダー「DA-6400シリーズ」、カメラ用リニアPCMレコーダーの「DR-701D」、マイク用のリニアPCMレコーダー「DR-10シリーズ」といった新製品で、レコーディングの幅広い用途に応える。ティアックは1953年(昭和28年)に東京テレビ音響株式会社として設立、テープレコーダーなど録音機の製造販売を始めた。64年にティアック株式会社が発足、74年からはミュージシャン・スタジオ用製品のブランドネームとして「TASCAM」を使用する。51回目を迎えたInter BEEには、36回の出展の歴史を持つ。今回は、プロオーディオ部門のメインのブースだけでなく、映像・放送関連機材部門にも1コマのブースを構え、映像に興味を持つ来場者にもティアックの存在をアピールした。出展内容のポイント、テーマ、狙いなどをティアック音響機器事業部プロフェッショナルオーディオビジネスユニット 事業企画部 企画・販売促進課課長の遠藤一彦氏に尋ねた。



小型マルチチャンネルレコーダー新製品を 幅広い業界にアピール

■今年の出展のテーマと狙いは？

ティアックでは、『お客さまへ一歩前進』を営業スローガンとして活動しており、Inter BEEはお客さまと直接触れ合い、実際製品を見て頂き、生の声を聞ける場として重要なイベントと位置づけています。TASCAMブランドの製品と信頼性をアピールする貴重な場だと考えています。特に、放送局や放送業界をターゲットにした製品への本格参入から5年ほどが経過した現在、放送関係者が多く来場するInter BEEでは認知度の向上を目指しています。

来場者としては、放送局の関係者が最も多いのですが、それだけでなく劇場やアミューズメント施設、システム設計者、レコーディングエンジニアなどが、幅広くまんべんなく訪れます。単体機器を作るオーディオ機器メーカーが少なくなっていることから、応援してくださいとお客さまも多くみられます。

■デジタルマルチトラックレコーダーをメイン展示

1Uサイズで64チャンネルの音声の録音/再生が可能なデジタルマルチトラックレコーダーの新製品『DA-6400シリーズ』を前面に押し出して展示しています。1Uのサイズで、64チャンネルのインプットとアウトプットに対応するため、様々なシーンで

扱いやすいレコーダーです。オーディオインターフェイスは、カードスロット方式を採用しており、MADIやDanteといった標準的なインターフェイスなど、利用環境に合わせてインターフェイスカードの交換で対応可能です。記録メディアはSSDで、収納ケースに組み込んだ状態でホットスワップにも対応するため、現場でのメディア交換なども容易にできます。

Pro Toolsシステムなどのパソコン上のDAW(デジタルオーディオワークステーション)と同期運転することが可能で、連携したバックアップ録音が可能です。MADIインターフェイスに対応したスタジオなどのシステムでは、MADI Thruによりミキサー卓とDAWの間にインサートするだけでバックアップシステムが構築できます。テレビ局やスタジオのバックアップ録音システムとして使えるほか、メインの録音システムとしてライブレコーディングを行うコンサートホールなどでの利用も想定しています。

録音系の市場以外での導入も目指しており、再生系の市場では、1Uの小型筐体でマルチトラックの同時再生ができるシステムとしての引き合いも頂いております。テーマパークやアミューズメント施設、劇場などで複数音源の同時再生を管理するシステムでの導入も推進しています。また、複数の会議の同時録音や、語学学校などの授業内容の録音など、新しい市場へのアピールも続けていきます。



映像関係者にも「音質」を積極的にアピール プレゼンスを高める出展方法に成果

■小型のレコーダーで高音質録音の用途を拡大

デジタル一眼レフカメラで映像を撮影するユーザーに向けたカメラ用リニアPCMレコーダーの『DR-701D』『DR-70D』『DR-60D MKII』も来場者に注目されています。デジタル一眼レフカメラで動画を撮る際に、カメラ内蔵のマイクと録音システムでは音質に満足できないケースも増えており、外付けのカメラ用リニアPCMレコーダーで動画撮影に高音質の音声の録音が可能です。最新のDR-701Dは、HDMIコネクタを搭載し、映像とクロック同期を実現しました。高音質の録音を実現するだけでなく長時間の収録でも映像と音声のズレを解消し、HDMI経由で録音動作のシンクも実現しました。

PCMレコーダーの1つの新しい形として、マイク用のリニアPCMレコーダー『DR-10シリーズ』も出展しております。小型のPCMレコーダーで、マイクのXLRタイプのコネクタに直接取り付けて録音できる『DR-10X』、ワイヤレスマイクのマイクとトランスミッターの間に接続する『DR-10C』をラインアップしています。DR-10Xを取り付けたマイクは、単体で録音可能です。DR-10Cをワイヤレスマイクに取り付けると、ロケなどでワイヤレスマイクの通信が途切れたときにも録音のバックアップが可能。レコーダーの利用範囲を拡大できることをアピールしました。

■Inter BEEの出展方法にも工夫

今回の試みとして、プロオーディオ部門のメインブースに加え、映像・放送関連機材部門にも1小間のブースを構えてカメラ用リニアPCMレコーダー『DR-701D』などを出展しました。映像関連に興味のある来場者にティアック製品をアピールするための方策で、場所が離れているオーディオ部門のブースまで足を運ばない人へのアプローチができたと考えています。

デジタルマルチトラックレコーダーのDA-6400は、ティアックブース以外にも系統的に連携する7~8社のブースに出展させて頂きました。このように他社のブースで用途に応じた提案をすることで、『歩いているとTASCAMをよく見かけた』という声を来場者からもらうことにつながりました。出展の仕方の工夫や他社との連携によって、Inter BEEでのティアックのプレゼンスを高めることができたと考えています。





4K 本放送を見据え、 HEVC 放送用エンコーダーのデモを実施 マスターと統合バンクの一体化による 効率的ワークフローも提案

株式会社東芝は2018年に予定されている4K・8K実用放送の開始を見据え、4K・8K送出関連機器を出展した。送出関連機器コーナーでは、同社が取り組みを進めるHEVC放送用エンコーダーのデモを行った。

一方で足元の商戦を睨んだ展示にも力を注ぐ。来年以降は地方放送局を中心に、マスター設備の更改時期が相次ぐからだ。デジタル放送送出設備でトップシェアを誇る納入実績を強みに、自社製品の優位性を訴えた。具体的には省スペース・省電力化を実現した新テレビマスターシステム、ファイルベース統合バンクシステムなどを出展した。またマスターシステムと統合バンクシステムの連携ソリューションを展示し、一体構築によるワークフロー改善も提案した。

さらに送信性能の向上と小型化を実現した次期SNG用SSPA、消費電力を削減した次期テレビ送信機、設置上の自由度を向上させ工期短縮に貢献する中波ラジオ送信機なども出展。幅広い放送ニーズを網羅する展示内容で来場者にアピールした。

高精細映像のトレンドを見据えた新たな取り組みと、足元の商戦に備えた実戦ソリューションという2本柱が今回の展示のメインラインアップだ。出展製品の特徴やInter BEEへの期待などについて、放送・ネットワークシステム部 放送システム機器設計担当 参事の竹ノ内 誠氏と、コミュニティ・ソリューション事業部 放送ソリューション営業部 放送技術担当 主務の安部 隆文氏に話を聞いた。



株式会社東芝
放送・ネットワークシステム部
放送システム機器設計担当 参事
竹ノ内 誠氏

株式会社東芝
コミュニティ・ソリューション事業部
放送ソリューション営業部 放送技術担当 主務
安部 隆文氏

HD映像を4K映像に超解像アップコンバート

■今回の出展内容について

今回の出展内容は2018年の4K・8K実用放送の開始に向けた東芝の新たな取り組みを紹介するとともに、地方放送局を中心に更改時期を迎える放送設備の新しいソリューション提案に力を入れている。

4K・8K化を見据えた取り組みとして、今回は送出関連機器コーナーで「HEVC放送用エンコーダー」のデモを行った。具体的には4K映像を、20MbpsでHEVCエンコードする符号化デモを行うというもの。これを2台並べたディスプレイの一方に表示し、もう一方のディスプレイには4Kカメラで撮影したオリジナルの4Kコンテンツを流す。2つの画面を見比べて、リアルタイムエンコード前後の画質を確かめてもらうのが狙いだ。「映像クオリティの差はほとんど見られない」と来場者の声は概ね良好である。

4Kの本放送が始まった当初はコンテンツ不足が予想される。放送局側でもこれを危惧する声があり、既存資産のHD映像を活用したいというニーズが高まるだろう。このニーズを見据えて、HD映像を東芝の液晶テレビ「REGZA」に採用される超解像技術を用いて4K映像にアップコンバートし、符号化するデモも行った。

「4K-HDR放送」の受信デモも、東芝が進める新たな取り組みの1つだ。HDRは映像をより明るくリアルに映し出し、表現幅を広げる次世代の高画質技術。明るい部分の白とびや暗い部分の黒つぶれの無い鮮やかな映像を表示する。デモでは「REGZA」で

HDR放送を受信。このHDR映像を、HDRモードとSDRモードで比較展示。表現力の違いを“目に見える形”で示した。

一方、来年以降は多数の地方放送局においてマスター設備が更改時期を迎える。足元の商戦に備えた展示にも力を入れた。その1つが、開発を進める新テレビマスターシステム。省スペース・省電力で、多くの端末機能がWebアプリで提供される。

ファイルベース統合バンクシステムも足元の商戦を支える戦略製品である。高い信頼性を誇るフラッシュメモリーをストレージとして、新たにVAF機能を含めた統合サーバを開発した。ブースでは新テレビマスターシステムとファイルベース統合バンクシステムを一体化した“ソリューション”として展示し、シームレスなワークフローによる運用性の向上、ハードの削減によるコストメリットなどを訴求した。

来場者の動線を考えたブースデザイン

■展示内容の演出面の工夫

昨年はブース全体のトーンを黒ベースで統一した。マスター室という閉じられた空間をイメージするための。コンセプトはうまく伝えられたが、その反面、全体が囲われた感じになり、ブース全体を巡回しにくいという意見もいただいた。これを受け、今年はブースのデザインとレイアウトを一新。全体を白ベースで統一し、開放的な雰囲気を出した。製品の展示も来場者の動線を考えて見やすいように配置した。

例年行っているシステム説明のパネル展示にも力を入れた。システムの説明は、質問があれば担当の説明員が詳しく行うが、パネルを見ながら来場者同士で話が弾んでいるのが印象的だった。ベテラン社員が若手の社員に技術解説や製品の特徴などを話して聞かせている様子を目にした。自社の技術や製品をアピールするだけでなく、お客様同士をつなぐ役目もあることを再確認できた。



潜在的なニーズを発掘できる Inter BEE

■Inter BEEの位置づけ

大規模な放送機器展としては、Inter BEEは国内でほぼ唯一のイベント。全国はもちろん、海外からも来場者が大勢訪れる。ここで何を語るかは営業戦略的にも非常に重要である。毎年、何カ月も前から社内で企画を練り、出展に備えている。

幅広い分野の関係者に直接接することができるのも大きなメリットだ。業務用は民生の量産品とは異なるため、規定のカテゴリーのお客様に営業する形が多い。しかし、それ以外にも当社の技術や製品を求めている潜在的なお客様は少なくない。Inter BEEは規定の営業・販売チャネルではカバーしきれないお客様にもコンタクトできるため、非常に重要な場である。また多くのVOC (Voice of Customer) を収集できる絶好の機会でもある。例年、収集したVOCを社内に持ち帰り、検討することで、商品企画や営業戦略に役立っている。

個人的には、懐かしいお客様に再会できる場としても楽しみにしている。例えば、地方放送局の場合、納入後はお客様と会う機会はなかなかないが、情報収集のために地方から来場したお客様がブースに立ち寄ってくれることがある。初日の開場直後「いの一歩」に駆け付けてくれるお客様もいる。懐かしいお客様と再会できるのは本当にうれしい。Inter BEEの“吸引力”のおかげだと思っている。



■Inter BEEへの要望と今後の展望

規模・内容ともに国内最大級の放送機器展であるInter BEEは、それだけで関係者にとって大きな魅力だが、同時開催している技術報告会や有識者講演などに加えて、ほかにもイベント的な取り組みを増やしてはどうか。興味のあるイベントが豊富であれば、Inter BEEにもより足が向きやすくなり、さらなる集客につながると思う。

今後はロードマップに基づいて4K・8K関連機器をはじめとする新製品の開発、エンコーダーの画質向上などさらなる機能強化を目指す。同時にVOCに真摯に耳を傾け、お客様目線による事業展開をより加速していく方針だ。



リーダー電子株式会社
営業部 本社営業グループ
中村 忠男 氏

4K対応のラスタライザーや マルチ波形モニターなどを出展 多様なフォーマットの映像と音の品質を可視化し 放送業界の進化と発展に貢献する

リーダー電子は“Next Interface”をメインテーマに掲げ、次世代を見据えたマルチフォーマットラスタライザー「LV7390」、HDR対応のマルチ波形モニター「LV5490」などを出展した。

電子計測器の専門メーカーとして知られる同社は、ラジオ向け計測器から事業をスタートし、テレビの成長とともに業容を拡大。受信機・録画再生機などの生産やメンテナンス用、放送局向け、アンテナ工事をはじめとするフィールド向けなど、映像関連に必要なとされる幅広い計測ニーズに対応した豊富な製品群を提供する。

近年は来るべき4K・8K時代を見据えた計測機器の開発に力を注ぐ。その象徴がLV7390、LV5490などの4K対応製品である。

来期に向けた売り込みの場であると同時に、ユーザーの“生の声”を聞く貴重な場とInter BEEを位置づけるリーダー電子。今年の展示概要や最新動向などについて、営業本部 営業管理グループ PR担当マネージャーの大作 弘之氏と、営業部 本社営業グループの中村 忠男氏に話を聞いた。



リーダー電子株式会社
営業本部 営業管理グループ
PR担当マネージャー
大作 弘之 氏

常に次世代を見据え、 デジタル映像の品質向上をサポート

■今回の出展のテーマと狙い

今年はメインテーマに“Next Interface”を掲げた。HDMI、DVI、SDIなど多様化するインターフェースに対応しつつ、その先を見据えた計測ニーズを踏まえ、4K・8K時代のコンテンツ制作や放送サービスに求められる品質と安定性の向上に貢献するという思いを込めたものだ。

主力展示の1つが、新製品のマルチフォーマットラスタライザー「LV7390」である。最大4系統のSDI信号を同時に測定できる。入力信号は3G-SDIとHD-SDIおよびSD-SDIに対応する。測定画面はフルHD解像度のSDIおよびDVI-Hで出力でき、3G-SDIとHD-SDIをサポート。表示画面を自由に配置できるフリーレイアウト機能を搭載し、使用するシーンに応じて様々なカスタマイズが可能となっている。

同じく新製品のHDR対応マルチ波形モニター「LV5490」は、3G-SDIデュアルリンクまたはクワッドリンクとHD-SDIクワッドリンクによる4K映像フォーマット(4096×2160、3840×2160)に対応する。12G対応で、3G-SDIを3本使って流していた4K映像を1つの端子でまかなえるため、測定作業の大幅な効率化が見込める。

4K映像の分割伝送は「2-SAMPLE INTERLEAVE DIVISION」と「SQUARE DIVISION」の2方式に対応。表示器には視野角、色再現



性に優れた9インチフルHDの液晶表示器を搭載し、高品位ピクチャーモニターとしても使用できる。SDI出力端子およびDVI出力端子を装備しているため、画面表示を外部フルHDモニターに表示することも可能だ。また3G-SDIの4入力同時表示や3G-SDIデュアルリンクによる「1080×1920(2048) / 60p RGB 4:4:4フォーマット」に対応する点も大きな特徴である。

さらにSDI信号とテーブルス化の進展を見据え、画像品質検査装置の新製品も出展した。それがハイブリッドQCソフトウェアの「FS3102 / FS3103」である。SDI入力、MXFなどのファイル入力に対応し、同じQCスケールを用いて、ブラックアウト、フリーズ、ブロックノイズなどの映像異常、ミュート、音飛び、ノイズ、プチ音/ブツ音などの音声異常を検出しエラーアラームを表示する。そのほか光点減、ラウドネス検査にも対応する。

FS3102 / FS3103は、昨年のInter BEEに初めて参考出品したものの、来場者の関心が高く、好評価だったことから、今年3月より販売を開始した。来場者の反応が、商用化に向けた“自信”を深めることにつながった。

素材メーカーの協力を得て実践的なデモも

■今回の出展のテーマと狙い

昨年の展示構成と異なり、今年はブース全体を大きく3つのゾーンに分類した。具体的には中央にLV7390、LV5490、FS3102 /

FS3103などの新製品を配置し、その両サイドに主力の自社製品と当社が取り扱う海外メーカーの製品を分けて展示する構成にした。

狙いは来場者の反応を検証しやすくするため。ゾーンを分けることで、どのゾーンに来場者が多く集まっているか把握しやすくなるからだ。来場者の反応としては、新製品と自社製品への関心の高さがうかがえた。

製品のメリットをよりわかりやすく伝えることにも工夫を施した。例えば、HDR対応のLV5490に関しては、素材メーカーから4K 60pコンテンツの提供を受け、実際の波形をモニターするデモを行った。高品質な映像コンテンツを実際に用いることで、製品の性能を適切に把握・評価してもらうためだ。来場者の反応も非常に好評だった。技術的な裏付けを訴求するため、技術解説のパネル展示も充実させた。

ユーザーの“生の声”を製品開発に反映する

■Inter BEEの位置づけ

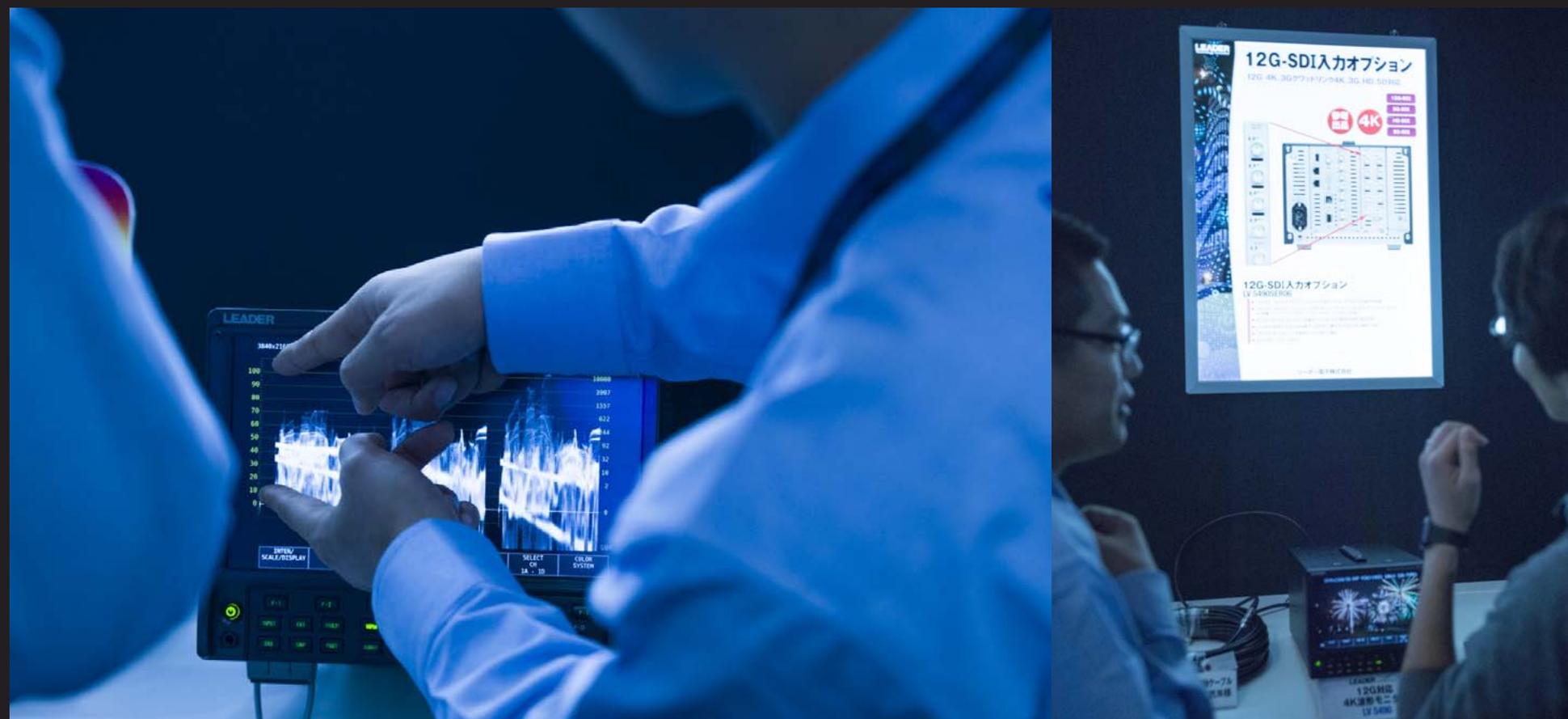
今年から来年にかけて、設備の更新時期を迎える放送局が多い。それだけに来場者の見る目が昨年に比べて、よりシビアに真剣になっているのを感じる。こうした来場者の反応を肌で感じることができるInter BEEは非常に貴重な展示会だ。来期に向けた重要な売り込みの場でもある。業界の主要なメーカーや販社が一堂に会する国内最大規模の放送機器展であり、当社としてもコスト、マンパワーともに他の展示会より力を入れている。

来場者へのアピールの場であると同時に、来場者の“生の声”を聞けることも大きなメリットだ。会期中は技術担当者が来場者の質問に応えたり、製品説明を行っている。技術者が直接ユーザーと接する機会は少ない。製品のどのような点を評価しているのか。あるいはどのような点に不満や改善点を感じているのか。そうした“生の声”に接することで、今後の製品開発のヒントにつながる。

■InterBEEへの要望

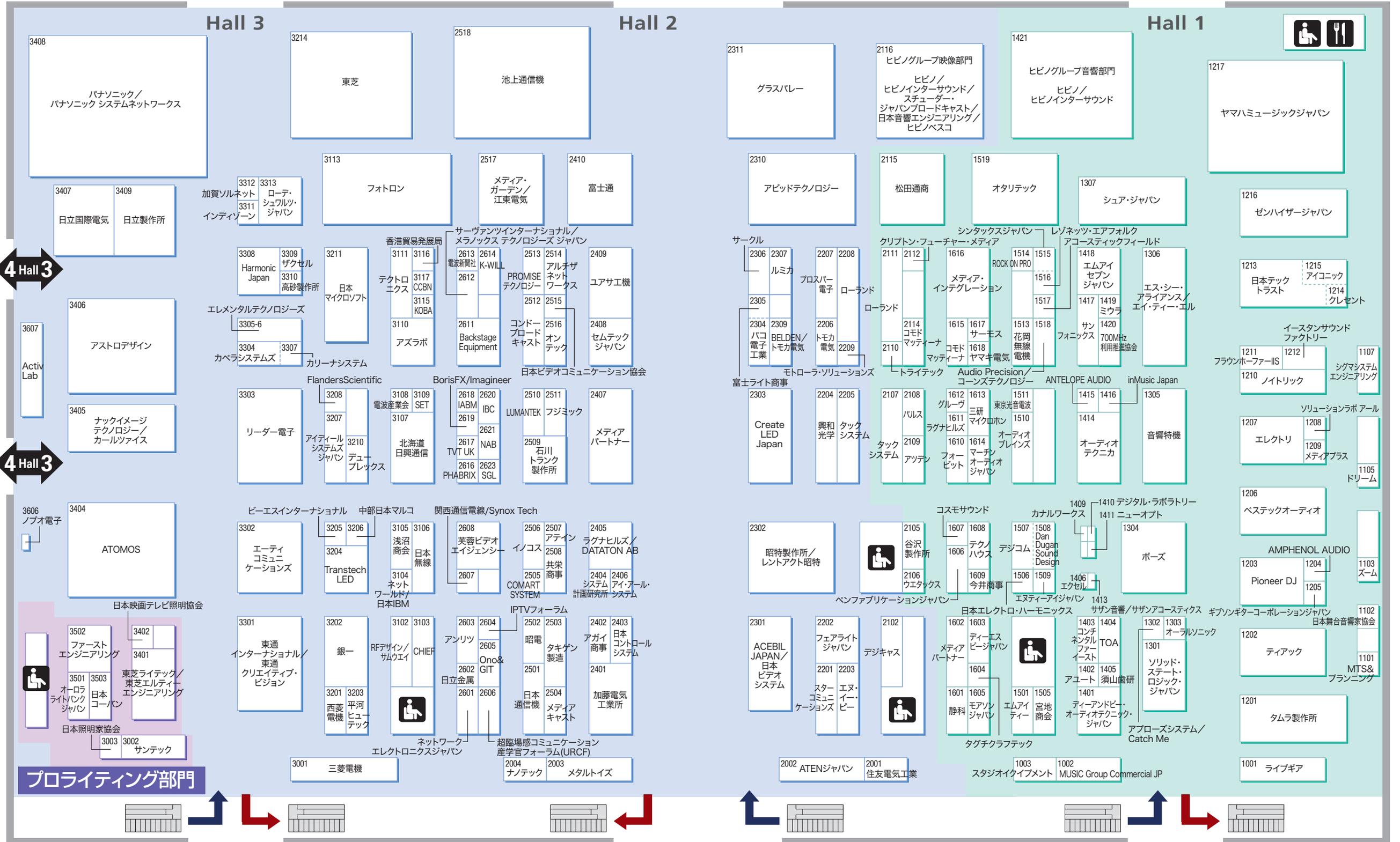
国内の放送局やメーカーに軸足を置きつつ、当社は海外展開も積極的に進めている。アジアを中心とした海外への告知や集客を強化し、海外からの来場者のさらなる拡大に努めてほしい。

当社は今後もエレクトロニクスの技術革新をいち早くキャッチアップするとともに独自の計測技術を強みに、映像・放送業界の進化と発展に貢献していく考えだ。



映像・放送関連機材部門

プロオーディオ部門





- 1215 (株)アイコニック
- 1517 (株)アコースティックフィールド
- 2109 アツテン(株)
- 1302 アプローチシステム(株)
- 1402 (株)アユート
- 1415 ANTELOPE AUDIO
- 1204 AMPHENOL AUDIO
- 1212 (株)イースタンサウンドファクトリー
- 1609 今井商事(株)
- 1416 inMusic Japan(株)
- 2106 ウエタックス(株)
- 1306 (株)エイ・ディー・エル
- 1406 エクセル(株)
- 1306 (株)エス・シー・アライアンス
- 1509 エヌティーアイジャパン(株)
- 1418 (株)エムアイセブジャパン
- 1501 エムアイティー(株)
- 1101 (株)MTS&フランニング
- 1207 (株)エレクトリ
- 1414 (株)オーディオテクニカ
- (株)オーディオブレインズ
- 1518 Audio Precision/コーンズテクノロジー(株)
- 1303 オーラル ソニック(株)
- 1519 オタリテック(株)
- 1305 音響特機(株)
- 1409 カナルワークス(株)
- 1205 ギブソンギターコーポレーションジャパン
- 1302 Catch Me (株)
- 2112 クリプトン・フューチャー・メディア(株)
- (有)グルーヴ
- 1214 (株)クレセント
- (株)コスモサウンド
- 1615 コモドマッティーナ(株)
- 2114 コモドマッティーナ(株)
- 1403 コンチネンタルファアーイースト(株)
- 1617 サーマス(株)
- 1413 (株)サザン音響/サザンアコースティクス
- 1613 三研マイクロホン(株)
- 1417 (株)サンフォニクス
- (株)シグマシステムエンジニアリング
- 1601 (株)静科
- 1307 シュア・ジャパン
- (株)シンタックスジャパン
- 1515 (株)ズーム
- 1103 (株)ズーム
- (株)スタジオ イクイブメント
- 1003 (株)須山歯研
- 1216 ゼンハイザージャパン(株)
- 1301 ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株)
- 1208 ソリューション ラボ アール
- 1604 (株)タグチクラフテック
- 2107 タックシステム(株)
- 2105 (株)谷沢製作所
- 1201 (株)タムラ製作所
- 1508 Dan Dugan Sound Design, Inc.
- 1202 ティアック(株)
- 1401 ティーアンドピー・オーディオテクニク・ジャパン(株)
- 1603 ティーエスピージャパン(株)
- 1404 TOA(株)
- 1608 (株)テクノハウス
- 1507 (有)テジコム
- (株)デジタル・ラボラトリー
- 1511 東京光音電波(株)
- 2110 (株)トライテック
- (株)ドリウム
- 1420 一般社団法人700MHz利用推進協会
- 1506 日本エレクトロ・ハーモニクス(株)
- 1213 日本テックトラスト(株)
- 1102 一般社団法人日本舞台音響家協会
- 1411 (株)ニューオブ
- 1210 ノイトリック(株)
- 1203 Pioneer DJ(株)
- 1513 花岡無線電機(株)
- (有)パリス
- 1421 ヒビノ(株)
- 1421 ヒビノインターサウンド(株)
- 1610 (株)フォービット
- 1211 フラウンホーファーIIS

- 1206 ベステックオーディオ(株)
- 1606 ベン ファブリケーション ジャパン(株)
- 1304 ボーズ(株)
- 1614 (株)マーチンオーディオジャパン
- 2115 松田通商(株)
- 1419 (株)ミウラ
- 1505 (株)宮地商会
- 1002 MUSIC Group Commercial JP(株)
- 1616 (株)メディア・インテグレーション
- 1209 (株)メディアプラス
- 1605 (株)モアソンジャパン
- 1618 ヤマキ電気(株)
- 1217 (株)ヤマハミュージックジャパン
- 1001 ライプギア(株)
- 1611 (株)ラグナヒルズ
- 1516 レゾネット・エアフォルク(株)
- 2111 ローランド(株)
- 1514 ROCK ON PRO



- 3102 RFデザイン(株)
- 2406 (株)アイ・アール・システム
- 2618 IABM
- 6406 アイエムディー・メディア・リミテッド
- 5312 (株)アイ・ディー・エクス
- 3207 アイティールシステムズジャパン(株)
- 5112 (株)アイ・ディ・ケイ
- 2620 IBC
- 2604 一般社団法人IPTVフォーラム
- 5407 アイベックステクノロジー(株)
- 2402 アガイ商事(株)
- 6210 アキティオUSA
- 3607 (株)Activ Lab
- 4513 (株)アサカ
- 3105 (株)浅沼商会
- 4206 (株)アस्क
- 4304 アストロサブ(株)
- 3406 アストロデザイン(株)
- 3110 アスラボ(株)
- 4307 (株)アセント
- 2507 アテイン(株)
- 3404 ATOMOS(株)
- 2310 アビッドテクノロジー(株)
- 4405 アミモン ジャパン(株)
- 2514 (株)アルチザネットワークス
- 5001 アルビクス(株)
- 6111 (株)アルメディア
- 6312 (株)アルモア
- 2603 アンリツ(株)
- 6405 EMCジャパン(株)
- 2518 池上通信機(株)
- 2509 (株)石川トランク製作所
- 5214 伊藤忠ケーブルシステム(株)
- 2506 (株)イノコス
- 5409 イメージニクス(株)
- 3311 (株)インディソーン
- 4308 INTOPIX
- 4205 ヴァイテックビデオコム(株)
- 5201 (株)ヴェルジリアランド
- 5511 WELL BUYING INDUSTRIAL CO., LTD.
- 4206 AJA Video Systems
- 4305 EIZO(株)
- 5107 富電(株)
- 2002 ATENジャパン(株)
- 5404 エイム電子(株)
- 5607 エーアンドエー(株)
- 2301 ACEBIL JAPAN(株)
- 6121 ATV(株)
- エーティ コミュニケーションズ(株)
- 4407 (株)エーディテクノ
- 4506 (株)エーディテクノ
- 5210 Extron Electronics, Japan
- 3109 SET
- 2623 SGL
- 4413 (株)HGSTジャパン/G-Technology
- 5301 エヌ・ディ・ティ アイティ(株)
- 5410 NEC
- 2203 エヌ・イー・ピー(株)
- 4401 (株)NHKメディアテクノロジー

- (株)NHKアイテック
- 2621 NAB
- 4607 NKKスイッチズ(株)
- 5301 NTTアドバンステクノロジ(株)
- 5301 NTTエレクトロニクス(株)
- 5301 NTT東日本
- 6118 エムアイシー・アソシエーツ(株)
- 5207 (株)エム・アンド・アイ ネットワーク
- 5509 エル・エス・アイ ジャパン(株)
- 6310 (株)エレクトリ
- 5105 エレコム(株)
- 3305-6 エレメンタルテクノロジー合同会社
- 6110 (株)おいぬビジョン
- 2605 (株)Ono&GIT
- 2516 (株)オンテック
- 5306 (株)オンリースタイル
- 3405 カーlustアイズ(株)
- 3312 加賀ソネット(株)
- 2401 (株)加藤電気工業所
- 5101 カナレ電気(株)
- 3304 カベラシステムズ
- 3307 カリナーシステム(株)
- 2607 関西通信電線(株)
- 4406 (株)ガンズイ
- 6120 (株)カンバス
- 5513 キッセイコムテック(株)
- 6123 キヤノン(株)/キヤノンマーケティングジャパン(株)
- 4203 (株)キャムキャスト7
- 2508 (株)共栄商事
- 4201 共信コミュニケーションズ(株)
- 3202 銀一(株)
- 2311 グラスバール(株)
- 2303 (株)CreateLED Japan
- 4606 Grip Factory Munich
- 6313 (株)グリップセント
- 4504 クロスイメーキング(株)
- 2614 (株)K-WILL
- 4001 (株)計測技術研究所
- 6407 (株)ケンコー・トキナ
- (株)ケンコープロフェッショナルイメーキング
- 2517 江東電気(株)
- 2204 興和光学(株)
- 6501 GoPro
- 4610 (株)小輝日文
- 5213 (株)コスミックエンジニアリング
- 5211 コスモリサーチ(株)
- 6116 コニカミノルタ(株)
- 4309 KONOVA
- 3115 KOBA 2016 (KOREA E & EX INC.)
- 2505 COMART SYSTEM
- 4403 小峰無線電機(株)
- 2512 (株)コンドプロードキャスト
- 2612 サーヴァンツインターナショナル(株) /
- メラックス テクノロジー ジャパン(株)
- (株)サークル
- 4602 Servicevision BIS S.L.U
- 4402 (株)サイトロンジャパン
- (株)ザクセル
- 5106 さくら映機(株)
- 3102 (株)サムウエイ
- 5610 三信電気(株)
- 5212 (株)サンミュロン
- 4601 (株)三和映材社
- 4601 (株)三和プロライト
- 3117 CCBN
- (株)JVCケンウッド
- 2404 (株)システム計画研究所
- 4409 一般社団法人次世代放送推進フォーラム
- (株)シナジー
- 2607 Synox Tech Co., ltd.
- 4513 (株)シバノク
- 5408 ジャパンマテリアル(株)/Matrox
- 4502 ジュエ(株)
- 2502 (株)昭電
- 2302 (株)昭特製作所
- 5102 ZhiuHai ChuanFu Optical Technology Co., Ltd.
- 5309 (株)須川映像技術研究所
- 2201 スターコミュニケーションズ(株)
- 2116 スチューダー・ジャパン・プロードキャスト(株)
- (株)ストロベリーメディアアーツ
- 5002 スネル・アドバンスト・メディア
- 2001 住友電気工業(株)
- (株)スリー・エム
- 6407 スリック(株)
- 4503 セイコーソリューションズ(株)
- 3201 西菱電機(株)
- 5310 摂津金属工業(株)
- 2408 (株)ステック ジャパン合同会社
- 4414 ソニー(株)/ソニービジネスソリューション(株)
- (株)ソリトンシステムズ
- (株)ダイナミック
- 3310 (株)高砂製作所

- 5302 高橋建設(株)
- 2503 タキゲン製造(株)
- 5203 立井電線(株)
- 2205 タックシステム(株)
- 4302 田中電気(株)
- 3103 CHIEF
- 3206 中部日本マルコ(株)
- 2606 超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム(URCF)
- FA・システムエンジニアリング(株)
- ユニコムラブラネタリウム(株)
- シャープ(株)
- 中京テレビ放送(株)
- 国立大学法人和歌山大学
- (株)ティ・アイ・ティ
- ティアック(株)
- 6109 DJI
- 6205 (株)朋栄
- 6314 (株)ダイナム
- 5104 報映産業(株)
- 4206 (株)DYNAMIC DRIVE POOL
- 2617 TVT UK
- 5207 Dataavid Japan(株)
- 3111 テクノロニクス
- (株)テクニカルファーム
- 5402 (株)テクノハウス
- 5405 デザイン・ジャパン・システム(株)
- 2102 デジキャス合同会社
- 2405 DATATON AB
- 3210 (株)デュプレックス
- 4508 TELESTREAM
- 5303 (株)テレフォース
- 3108 一般社団法人電波産業会
- (株)電波新聞社
- (株)Too
- 3214 (株)東芝
- (株)東通インターナショナル
- (株)東通クリエイティブ・ビジョン
- トープジャパン(株)
- 5103 トモカ電気(株)
- 6311 (株)トランフィックス・シム
- 3204 Transtech LED Co., Ltd.
- (株)ナックイメージテクノロジー
- (株)ナノテック
- 5204 ニッキヤビ(株)
- 5505 日鐵住金溶接工業(株)
- 3104 日本アイ・ピー・エム(株)
- 4501 日本アンテナ(株)
- 4509 一般社団法人日本映画テレビ技術協会
- 2116 日本音響エンジニアリング(株)
- 2403 日本コントロールシステム(株)
- 2100 日本通信機(株)
- 6117 日本デジタル・プロセッシング・システムズ(株)
- 4613 日本バイナリー
- 5403 日本ビジネスシステムズ(株)
- 2515 日本ビデオコミュニケーション協会
- 2301 (株)日本ビデオシステム
- 3211 日本マクrosoft(株)
- 3106 日本無線(株)
- 4002 リーダー電子(株)
- 4507 NextoDI Co., Ltd.
- 2601 ネットワークエレクトロニクスジャパン(株)
- 3104 (株)ネットワーク
- 5209 ノックス(株)
- (株)ノビテック
- 3606 ノボ電子(株)
- 3308 Harmonic Japan 合同会社
- 4408 ハイパーツールズ(株)
- 2304 パコ電子工業(株)
- 2611 Backstage Equipment, Inc.
- 3408 パナソニック(株)
- パナソニック システムネットワークス(株)
- 3205 ビーエスインターナショナル(株)
- (株)PFU
- (株)PFI
- 4303 (株)ピーテック
- 5111 ヒカリソフト(株)
- 4101 ビジュアリー・グラフィックス(株)
- 2602 日立金属(株)
- 3407 (株)日立国際電気
- 3409 (株)日立製作所
- 5311 (株)ビデオサービス
- 5409 ビデオロン(株)
- 2116 ヒビノ(株)
- 2116 ヒビノインターサウンド(株)
- 2116 ヒビノバスコ(株)
- 3203 平河ヒューテック(株)
- 5308 ヒロテック(株)
- 2616 PHABRIX LTD
- (株)フェアライトジャパン
- (株)フィアロン
- 5507 フォントワークス(株)
- 5510 フジコー工業(株)
- 2410 富士通(株)
- 4207 富士フィルム(株)

- (株)フジミック
- 2305 富士ライト商事(株)
- 6207 (株)府中技研
- 2608 (株)芙蓉ビデオエイジェンシー
- 5606 ブラックボックス・ネットワークサービス(株)
- 6502 ブラックマジックデザイン(株)
- 3208 Flanders Scientific, Inc.
- 5204 (有)フランネット
- 6119 Broadcast Camera Batteries
- ブロードデザイン(株)
- 2207 (株)プロスパー電子
- 2513 PROMISEテクノロジー(株)
- 4505 ベイテクノロジーズ(株)
- 5609 平和精機工業(株)
- 2309 BELDEN/トモカ電気(株)
- 5205 ベルボン(株)
- 4208 (株)朋栄
- 5214 報映産業(株)
- 6115 (株)放送技研
- 3107 北海道日興通信(株)
- 4305 BOXX Technologies
- 6206 ボッシュセキュリテシステムズ(株)
- 2619 BorisFX/Imagineer
- 3116 香港貿易発展局
- 6208 (株)マイクロコム
- 6211 (株)マイルランテック
- 5108 (株)マウビック
- 6309 (株)松浦機械製作所
- 2115 松田通商(株)
- 6113 マルミ光機(株)
- 4202 マンフロット(株)
- 5305 三井物産エアロスペース(株)
- 6112 三菱化学メディア(株)
- 5202 三菱ガス化学(株)
- 3001 三菱電機(株)
- 6122 三友(株)
- 5206 緑屋電気(株)
- 5608 ミナル通信(株)
- 6209 武蔵(株)
- 5406 武蔵オブティカルシステム(株)
- (株)メイコーテック
- 5109 メタデータ
- 2003 メタルトイズ
- 2517 (株)メディア・ガーデン
- 2504 (株)メディアキャスト
- 5512 (株)メディアグローバルリンクス
- 6108 メモリーテック(株)
- 2209 モトローラ・ソリューションズ(株)
- 2409 ユアサ工機(株)
- 5110 (株)ユニテックス
- 6308 横河デジタルコンピュータ(株)
- 5508 (株)よしみカメラ
- (株)ラグナヒルズ
- 6114 ラビッド・エイジー(株)
- 4301 (株)ラムダシステムズ
- 5307 ラリタン・ジャパン(株)
- 4605 ランサーリンク(株)
- 3303 リーダー電子(株)
- 4612 (株)理経
- 5208 (株)RIP-TIE
- 2510 LUMANTEK
- 2307 (株)ルミカ
- 4611 (株)RAID
- 2302 (株)レントラクト昭特
- 3313 ローダー・シュワルツ・ジャパン(株)
- 2208 ローランド(株)
- 4510 (株)ロケット
- 5506 (有)Y.D.S.



- (株)オーロラライトバンクジャパン
- (株)サンテック
- 東芝エルティエーエンジニアリング(株)
- 東芝ライテック(株)
- 日本映画テレビ照明協会
- 日本コーパン(株)
- 公益社団法人日本照明家協会
- (株)ファーストエンジニアリング



- アイディアアクセス(株)
- アドバンテック(株)
- アドビ システムズ(株)/インテル(株)
- アドビ システムズ(株)/インテル(株)
- IzumoBASE(株)
- 伊藤忠テクノソリューションズ(株)/日本オラルク(株)
- インテル(株)
- (株)エクスフローラ
- CalDigit Inc.
- (株)Gnzo
- (株)サードウェーブデジノ
- (株)サテライトコミュニケーションズネットワーク
- システムズシステム合同会社
- スキルアップ・ビデオテクノロジーズ(株)
- SPECTRACAL
- DXアンテナ(株)
- (株)テクノマセマティカル
- 5602 東京電機大学
- 6403 とくしま4Kフォーラム実行委員会
- 6001 NIMBUS, Inc.
- 6402 (株)ねこじやらし
- 6001 ハイテクインター(株)
- 6203 (株)PALTEK
- (株)フォーラムエイト
- フォレストダイナシステムズ
- (株)フラッシュバックジャパン
- (株)プラトイーズ
- 6106 (株)ボンデジタル
- 6105 北陸電話工事(株)
- 6003 メディアエッジ(株)
- 6303 ユニアテックス(株)
- 6202 (株)リクルートホールディングス
- 6107 (株)リンディール・セールス
- 6201 RED DIGITAL CINEMA USA
- 5601 (株)Wonder Wall

USA Showcase

- 5612 アメリカ大使館 商務部
- 5613 オーディオテック
- 5614 ビュージックスコーポレーション
- 5611 アメリカ州政府協会(ASOA)
- ネネシー州政府 日本事務所
- ネブラスカ州政府 駐日代表事務所
- ノースカロライナ州政府 日本事務所

INTER BEE CONNECTED

- 6704 アマゾン ウェブ サービス ジャパン(株)
- 6703 伊藤忠ケーブルシステム(株)
- 6713 (株)オルカプロダクション
- (株)TBSテレビ
- 6701 (株)テレビ朝日
- 6707 日本テレビ放送網(株)
- 6712 ニューオリア
- (株)ネクストスケープ
- 6708 (株)HAROID
- 6709 (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ
- 6706 (株)フジテレビジョン
- 6705 (株)マジックハット
- 6711 マルチスクリーン型放送研究会
- 6718 民放公式テレビポータル「TVer」

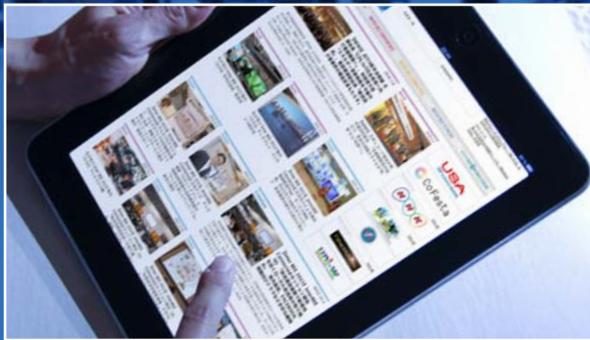
JPPA Pavilion@ASIA CONTENTS FORUM

- (株)IMAGICA
- (株)キュー・テック
- (株)東京サウンド・プロダクション
- (株)日テレ・テクノカル・リソース
- 一般社団法人日本ポストプロダクション協会
- パナソニック映像(株)
- (株)ポニーキャニオンエンタープライズ
- (株)レイ
- レスパシビジョン(株)

音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト
INTER BEE ONLINE
www.inter-bee.com

Inter BEEでは、出展情報や国内外の関連展示会情報を独自に取材するチーム「Inter BEE ニュースセンター」を設置しています。出展製品、展示会情報は、取材チームにより記事・映像コンテンツとなり、会期中、会期中、会期後と年間を通じて、Inter BEE Online内のOnline MagazineやInter BEE TVによって発信されました。

Inter BEE Online 掲載記事 (一部/抜粋)



Magazine 2015.10.31UP

ギブソンギターコーポレーションジャパン
ギター製造の老舗ギブソンがInterBEE 出展
レスポール生誕 100周年記念アクティブスピーカーを出展

Magazine 2015.11.11UP

(株)フジミック
最新版の「MXFファイル転送システム(F-BOX)」や
「気象・災害情報配信サービス」のほか
「スマートフォン+クラウド連携Live配信」を参考出展

Magazine 2015.11.4UP

(株)ティ・アイ・ディ
Accusys 高速SAN「ExaSAN」 PCIe 3.0と
Thunderbolt 2.0対応 最上位機種は
2,000MBb/s 8K環境も披露

Magazine 2015.11.11UP

(株)メディアキャスト
神戸マラソンでハイブリッドキャストによる
「マルチアングル・ライブストリーミング中継実験」
視聴者がカメラ映像を選択 Inter BEEでデモ

Magazine 2015.11.9UP

ソリューション ラボ アール
特許アシスト・ウーファー技術を進化した
スピーカー BOX 新製品をラインアップ 限りなく
生に近い臨場感を提供する独自技術をデモ

Magazine 2015.11.12UP

(株)ネットワールド/日本IBM
オール・フラッシュ SANストレージと次世代テープ・
ソリューションを出展 「FLAPE」による8K時代を
見据えた新たなワークフローを提案

Magazine 2015.11.13UP

ベルボン(株)
豪ミラー社製のビデオカメラ用三脚を販売開始
自社製三脚のUTシリーズなど多彩なアクセサリも
多数出展

Magazine InterBEE TV 2015.11.18UP

(株)アイ・ディー・エクス
Panasonicカメラコーダー用7.2vバッテリーを出展
X-TAPとUSB端子を装備し、カメラ本体への電源
供給以外に周辺機器へ電源を供給

Magazine 2015.11.16UP

(株)K-WILL
4Kフォーマット対応の画像評価装置を初出展

Magazine InterBEE TV 2015.11.18UP

(株)アイ・ディ・ケイ
ネットワークスイッチによる4K@60の高解像度AV
システムを構築

Magazine 2015.11.17UP

エレメンタルテクノロジーズ合同会社
4K/HDR/HEVCのサービス実装に向けた
映像処理ソリューションを紹介

Magazine InterBEE TV 2015.11.18UP

(株)Activ Lab
ドローン、ラジコンヘリ等による特殊撮影の実績を持つ
Activ Labが出展 8K対応空撮システムなど
要望に応じて多彩な特殊撮影機材を独自で開発

Magazine InterBEE TV 2015.11.17UP

(株)谷沢製作所
新製品の携帯型マトリクス チームトーク2出展
8x8の機能を携帯可能な大きさに集約した4x3の
簡易マトリクスミキサ

Magazine InterBEE TV 2015.11.18UP

ATOMOS(株)
4K対応レコーダーのラインナップ拡大
SHOGUN STUDIOやNINJA ASSASSINなど、
4K対応の最新機器を出展

Magazine **InterBEE TV**

(株)イースタンサウンドファクトリー 2015.11.18UP

VUE audiotechnik 社のラインアレイスピーカー『al-8』を出展 ベリリウム素材を使用し、歪みを最小限に抑えたサウンドを実現




Magazine **InterBEE TV**

NTTアドバンステクノロジー(株) 2015.11.18UP

騒音に強いヘッドセットマイク「R-Talk HS310」とファイルトランスコーダ「RealFeel FileConvert4K」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)サザン音響/サザンアコースティクス 2015.11.18UP

ハイレゾ音源対応高音質イヤホン「SAE-1」を出展




Magazine **InterBEE TV**

Harmonic Japan 合同会社 2015.11.18UP

仮想化メディア・プロセッサ Electra XVM Spectrum X メディア・サーバーを出展




Magazine **InterBEE TV**

EIZO(株) 2015.11.18UP

現在開発中のHDR 対応モニターを参考出展 広色域に加えて、高輝度、高コントラストのリアルな再現力をデモ




Magazine **InterBEE TV**

キヤノン/キヤノンマーケティングジャパン(株) 2015.11.18UP

4K 放送用ポータブルズームレンズ CINEMA EOS SYSTEM 4K ディスプレイを出展




Magazine **InterBEE TV**

シバソク/(株)アサカ 2015.11.18UP

4K HDMI コンバータ「VB4000」を出展 4K 信号を HDMI 1 本に変換




Magazine **InterBEE TV**

ハイテクインター(株) 2015.11.18UP

2.4/5GHz 帯との干渉に強い4.9GHz 帯 HD モバイル映像伝送システム「Movits」(モビッツ)を出展




Magazine **InterBEE TV**

Extron Electronics, Japan 2015.11.18UP

4K 信号対応のスクーラーを内蔵したマトリクススイッチャー「DTP CrossPoint 108 4K」を出展




Magazine **InterBEE TV**

銀一(株) 2015.11.18UP

ステディカムの次世代フラッグシップ機「Steadicam M-1」を出展 モジュラーデザインを採用し用途に応じてカスタマイズ可能




Magazine **InterBEE TV**

(株)タムラ製作所 2015.11.18UP

新製品ポータブルデジタルミキサー「NT016」を出展 カスケード機能で2台接続、物理フェーダー 32チャンネルに




Magazine **InterBEE TV**

(株)プラットイーズ 2015.11.18UP

番組メタデータの需要の高まりに応じたサービス「メタデータ API」などをアピール




Magazine **InterBEE TV**

(株)NHKメディアテクノロジー 2015.11.18UP

8K 多面ディスプレイ「Aoi - 碧 - サカナクション」を 8K 上映




Magazine **InterBEE TV**

(株)サークル 2015.11.18UP

映像機器レンタル会社だからできる 4K 機材セッティング徹底比較!




Magazine **InterBEE TV**

(株)ディストーム 2015.11.18UP

Skype 技術を用いたテレビ中継システムなどを出展




Magazine **InterBEE TV**

メディアエッジ(株) 2015.11.18UP

プロジェクター・モニター対応バーチャル電子黒板「BigNote」を出展




Magazine  **InterBEE TV**

レゾネット・エアフォルク(株) 2015.11.18UP

マルチチャンネル・オーディオIPプロトコル「ResoNetz Link」をデモ MADIをマルチチャンネルのまま遠隔地へ伝送




Magazine  **InterBEE TV**

アイベックテクノロジー(株) 2015.11.19UP

超低遅延H.264コーデック「HLD-300C」を出品 コーデック時間10msecを実現しLIVEでスムーズな掛け合いに




Magazine  **InterBEE TV**

池上通信機(株) 2015.11.19UP

8Kカメラ「SHK-810」を出品 初代8Kカメラと比べ1/10のコンパクト化を実現




Magazine  **InterBEE TV**

(株)エクスプローラ/(株)PALTEK 2015.11.19UP

8K/4K ビデオプロセッシングボード「Image CUBE」出展 8K合成や4Kから8Kへのアップコンバートが可能




Magazine  **InterBEE TV**

ローデ・シュワルツ・ジャパン(株) 2015.11.18UP

DVS社製4K/8K対応セントラル・プロダクション・ストレージ「Spycer Box Cell」やトランスコードサーバーなどを出展




Magazine  **InterBEE TV**

アテイン(株) 2015.11.19UP

大統領御用達のスピーチプロンプター、正規代理店として販売、展示




Magazine  **InterBEE TV**

インテル(株) 2015.11.19UP

4K/8KのHEVC対応製品を迅速に開発するためのインテルソフトウェアを出展




Magazine  **InterBEE TV**

NEC 2015.11.19UP

8K/4Kマスターシステムや4K HEVC素材伝送CODECを参考出展 将来的に「IP化とソフト化」をキーワードに新世代の放送システムを提案




Magazine  **InterBEE TV**

ローランド(株) 2015.11.18UP

ライブ・ミキシング・コンソール O・H・R・C・A「M-5000/5000C」を出展 最大128chを入出力に割り当て可能




Magazine  **InterBEE TV**

ATENジャパン(株) 2015.11.19UP

業界初となる4K映像をマトリックス表示するHDMIマトリックススイッチャー「VM6404H」を出展




Magazine  **InterBEE TV**

ヴァイテックビデオコム(株) 2015.11.19UP

3灯式LEDライトキット「カリバー 3ライトキット」 シンプルな操作性と高い可搬性を両立




Magazine  **InterBEE TV**

エヌ・イー・ピー(株) 2015.11.19UP

海外取材等の航空輸送でも安心な高負荷対応ニッケル水素Vマウントバッテリーを展示 放送機器アクセサリのオリジナル開発もアピール




Magazine  **InterBEE TV**

アイディールシステムズジャパン(株) 2015.11.19UP

Evertz社4K対応リプレイシステム「Dream Catcher」を出展 Ultra HDラスターでのズーム機能装備




Magazine  **InterBEE TV**

(株)アルチザネットワークス 2015.11.19UP

MMT対応のIP収録・再生・解析装置をリリース




Magazine  **InterBEE TV**

(株)エーディテクノ 2015.11.19UP

4K UHD対応3G-SDI 4系統光延長器「UHD_OTR」を展示 非圧縮映像信号を最大10kmまで伝送




Magazine  **InterBEE TV**

(株)NHKアイテック 2015.11.19UP

観光・防災情報発信型Wi-Fiシステムを展示 緊急時はWi-Fiマルチキャスト方式による情報発信




Magazine **InterBEE TV**

NKKスイッチズ(株) 2015.11.19UP

スイッチ表面に有機ELを搭載した"押すスクリーン"
多機能押ボタンスイッチ「有機ELディスプレイフル
スクリーンカラー IS」を展出




Magazine **InterBEE TV**

NTTエレクトロニクス(株) 2015.11.19UP

H.265/HEVCリアルタイムコーデック 新HHC
10000シリーズ 世界のメジャースポーツ・イベントで
採用実績




Magazine **InterBEE TV**

エムアイシー・アソシエーツ(株) 2015.11.19UP

Tiger Technology社製 高密度ストレージシステムを
展出 16Gb対応、高密度56台のSSD / HDD
RAID構築が可能




Magazine **InterBEE TV**

(株)エムアイセブンジャパン 2015.11.19UP

PreSonusのLaz Harris氏をゲストに
StudioLiveファミリーがもたらすエコシステムをデモ




Magazine **InterBEE TV**

エムアイティー(株) 2015.11.19UP

電子機器用ワイヤー・ケーブルの専門メーカー、
モガミ電線の製品群を展示




Magazine **InterBEE TV**

エレコム(株) 2015.11.19UP

米シーゲートの外付けハードディスク「LaCie」
シリーズ 1Uで最大48TB搭載の「LaCie 8big
Thunderbolt2」参考展出




Magazine **InterBEE TV**

(株)オーディオテクニカ 2015.11.19UP

デジタル有線会議システムATUC-50を発表
最大150台まで接続可能




Magazine **InterBEE TV**

カールツァイス(株) 2015.11.19UP

ZEISS CZ.2 Compact Zoomレンズ・シリーズを
展出 ズームシフトやブリーディングを抑え、高画質・
高コントラストを実現




Magazine **InterBEE TV**

グラスバレー(株) 2015.11.19UP

新製品のリアルタイムIPプロセッシングノード
「GV Node」など、IPと4Kテーマに各種新製品を展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)計測技術研究所 2015.11.19UP

8K/4K対応各種新製品を展出 HDMI2.0対応
インタフェースコンバータを初公開




Magazine **InterBEE TV**

(株)コスミックエンジニアリング 2015.11.19UP

全てが一新!コスミックのエンベデッドオーディオ製品
&CG製品




Magazine **InterBEE TV**

サーヴァンツインターナショナル(株)/
メラノックス テクノロジーズ ジャパン(株) 2015.11.19UP

4K・8K対応40GbEソリューション「Mellanox
SX1012」と次世代100Gb/s製品を展示




Magazine **InterBEE TV**

さくら映機(株) 2015.11.19UP

世界初、8K60P対応リアルタイムノンリニア編集
システム「8K Prunus」を展示 4K60P 3ストリーム
対応製品もデモ




Magazine **InterBEE TV**

三信電気(株) 2015.11.19UP

モバイル中継システム「LiveU」の最上位機種
USB型の通信端末最大8回線で国内どこからでも
より安定した映像中継が可能




Magazine **InterBEE TV**

シユア・ジャパン 2015.11.19UP

Shure ULX-D デジタルワイヤレスシステムに待望の
1.2GHz帯域モデル、いよいよ2016年1月発売




Magazine **InterBEE TV**

(株)シンタックスジャパン 2015.11.19UP

世界最小のポータブル・オーディオ・インタフェース
「RME MADI face XT」 USB3に対応
多彩な入出力を装備




Magazine **InterBEE TV**

ソニー(株)/ソニービジネスソリューション(株) 2015.11.19UP

4K / HD 制作機器やHDR制作をテーマにした展示、IPを活用したライブソリューションシステムなど多彩な提案




Magazine **InterBEE TV**

DJI 2015.11.19UP

手ぶれ補正機能付き完全一体型手持ち4Kカメラ「Osmo」を出展 8万5千円で販売




Magazine **InterBEE TV**

(株)東通インターナショナル 2015.11.19UP

ポストプロダクションに特化した4Kキャラクタージェネレータ「D.O.T」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)日立国際電気 2015.11.19UP

8K小型単板式カメラ「SK-UHD8060B」を出展




Magazine **InterBEE TV**

CHIEF 2015.11.19UP

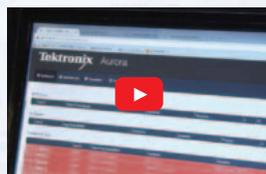
メニューボード型ディスプレイマウントを国内初展示




Magazine **InterBEE TV**

テクトロニクス 2015.11.19UP

マルチフォーマット波形モニター、波形ラスタライザ「WFM / WVR8300」を出展 導入後に4K対応へのアップグレード可能

Magazine **InterBEE TV**

(株)ねこじゃらし 2015.11.19UP

動画向けファイル共有サービス「Jector」を出展 コメント共有、再生速度変更など新機能をデモ




Magazine **InterBEE TV**

(株)日立製作所 2015.11.19UP

高性能4K映像編集システムをデモンストレーション展示 優れた4Kの読み出し操作感を体感




Magazine **InterBEE TV**

ティアック(株) 2015.11.19UP

1U 64chデジタルマルチトラックレコーダー「DA-6400」シリーズを展示 Pro Toolsシステムとの同期運転によるバックアップ録音が可能




Magazine **InterBEE TV**

(株)テクノハウス 2015.11.19UP

10月にFilmLight社と代理店契約を締結 同社製品ラインによる4K HDRマスタリングソリューションをデモ




Magazine **InterBEE TV**

パナソニック(株)/パナソニックシステムネットワークス(株) 2015.11.19UP

レンズ一体型4Kカメラレコーダー「AG-DVX200」4K/24p、UHD/60p、FHD/60pマルチフォーマットの高画質収録に対応




Magazine **InterBEE TV**

ヒビノインターサウンド(株) 2015.11.19UP

英DiGiCo製デジタル・ミキシングコンソール「S21」を出展 標準サンプリングレート96kHz 高い解像度による原音に忠実で明瞭度の高い音質を実現




Magazine **InterBEE TV**

DXアンテナ(株) 2015.11.19UP

4K/8K対応受信機器のほか、防災・福祉情報配信システムで奈良県御杖村の導入事例を紹介




Magazine **InterBEE TV**

東芝ライテック(株) 2015.11.19UP

LED「FORTEX」シリーズのラインアップを展示 照明事業125周年を記念した国内初2KW LED「グランデ」を参考出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)PFU 2015.11.19UP

8K60P非圧縮IP伝送双方向伝送をデモ




Magazine **InterBEE TV**

富士通(株) 2015.11.19UP

ICTを活用した映像収録と映像の即時取り出しが可能な情報カメラ、運用効率化ソリューション「VideoCaster Proll」を展示




Magazine **InterBEE TV**

ブラックマジックデザイン(株) 2015.11.19UP

4.6Kスーパー 35イメージセンサー搭載のURSA Miniをデモ グローバルシャッターや広大な15ストップ・ダイナミックレンジを実現




Magazine **InterBEE TV**

(株)朋栄 2015.11.19UP

1つの筐体で4K/8Kに対応した12G-SDI対応ルーティングスイッチャ「MFR-3000GB」を参考出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)マウビック 2015.11.19UP

Vislink社製 4K対応HEVCリアルタイムコーデック「ULTRA CODEC」を出展




Magazine **InterBEE TV**

マンフロット(株) 2015.11.19UP

マンフロットが初のデジタル製品「DIGITAL DIRECTOR」を出展 iPadとデジタル一眼レフを繋いでカメラをコントロール




Magazine **InterBEE TV**

(株)メイコーテック 2015.11.19UP

4K対応ビデオウォールコントローラ MVC4Kシリーズを出展 最大64入力・64出力に対応




Magazine **InterBEE TV**

(株)メディア・インテグレーション 2015.11.19UP

FOCAL製最新スピーカー「TRIO6」を出展 3ウェイと2ウェイの両方に対応




Magazine **InterBEE TV**

ヤマキ電気(株) 2015.11.19UP

サラウンド用オーディオモニター「PVM-M108Sシリーズ」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ユニテックス 2015.11.19UP

可搬型のLTO-6アーカイブシステム「HandyLT」を出展 USB3.0インターフェースを4ポート搭載しノートPCでも利用可能




Magazine **InterBEE TV**

ライブギア(株) 2015.11.19UP

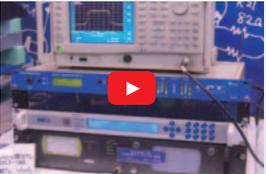
イタリア製スピーカーシステム「K-array」のムービングスピーカー「KW8」を出展 フルHDカメラも内蔵しSDI出力対応




Magazine **InterBEE TV**

RFデザイン(株) 2015.11.20UP

サムウェイ送信機FMT-1000DSほか 放送を止めることなく工具なしでの交換が可能に

Magazine **InterBEE TV**

アイエムディー・メディア・リミテッド 2015.11.20UP

クラウドベースの広告映像素材の送稿サービス「IMD Cloud」をデモ




Magazine **InterBEE TV**

アガイ商事(株) 2015.11.20UP

LEDライトーフोटディオックスとHMIライトを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)浅沼商会 2015.11.20UP

小型軽量なアイフッテージ製品を展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)アスク 2015.11.20UP

正確なタイムコードとメタデータを生成し、RF、Wi-Fi ワイヤレス接続で正確に同期、共有できるTimecode Buddyを出展




Magazine **InterBEE TV**

アストロサーブ(株) 2015.11.20UP

AV機器製品や様々なエレクトロニクス製品をコントロールする米国RTI社のシステムコントローラ機器を出展




Magazine **InterBEE TV**

アストロデザイン(株) 2015.11.20UP

8K 55インチ液晶モニタ「DM-3814」フルスペック8K SSDレコーダ「HR-7518」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)アセント 2015.11.20UP

スポーツスタジアムの興奮を最高潮へ導く全米 No.1 シェア映像演出システムを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)アルモア 2015.11.20UP

段ボールのような構造をしたプラスチック素材のケース「PLA-DAN CASE」(プラダンケース)を出展




Magazine **InterBEE TV**

イメージニクス(株) 2015.11.20UP

HDMIを同軸ケーブル一本で長距離伝送できる「イメージLINK」ソリューションを提案




Magazine **InterBEE TV**

(株)エス・シー・アライアンス 2015.11.20UP

AXIA製 最新IPネットワークコンソール「FUSION」を出展




Magazine **InterBEE TV**

アドビ システムズ(株) 2015.11.20UP

Ultra HDも縦長映像も。Adobe Creative Cloud 最新アップデート




Magazine **InterBEE TV**

EMCジャパン(株) 2015.11.20UP

EMCアイシロン スケールアウトNASをデモ 最大50ペタバイトまで拡張可能 4K素材の読み書きも高速に処理




Magazine **InterBEE TV**

(株)ヴァレッジアイランド 2015.11.20UP

テレビ局のインジェストからアウトジェストまでのトランスコーディングやコピーライト管理の全体的なフローを展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)エム・アンド・アイ ネットワーク 2015.11.20UP

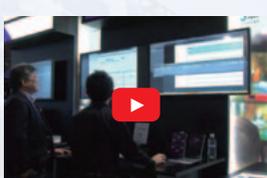
DVK-300HD 3G HD/SDクロマキーヤー TC-200 HD/SD対応タイトルクリエイター




Magazine **InterBEE TV**

アビッドテクノロジー(株) 2015.11.20UP

メディアコンポーザーと報道支援システムとの連携をデモ

Magazine **InterBEE TV**

(株)石川トランク製作所 2015.11.20UP

業界初のコーデュラバリステック製の縫製シリーズを発売




Magazine **InterBEE TV**

AJA Video Systems 2015.11.20UP

「Ki Pro Ultra」を展示 4K 60p ProRes 422 HQ 収録、ファイバー接続、HD LCD モニター搭載




Magazine **InterBEE TV**

エル・エス・アイ ジャパン(株) 2015.11.20UP

各種リアルタイム字幕システム MXF字幕ソリューションを出展




Magazine **InterBEE TV**

アルピクス(株) 2015.11.20UP

アルピクスがオールケーブル4K放送向けの放送システムを受託。4Kの送出サーバーシステムが2千万円台でプライマリ/セカンダリも含めた構築が可能




Magazine **InterBEE TV**

IzumoBASE(株) 2015.11.20UP

「IzumoFS」スケールアウトNASをソフトウェアで実現する次世代Software-Defined Storageを出展




Magazine **InterBEE TV**

エーティ コミュニケーションズ(株) 2015.11.20UP

中京テレビに納入の自家発電システム搭載型 ランドクルーザータイプのSNG車などを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)オーディオプレインズ 2015.11.20UP

AVID「VENUE」シリーズの新作「VENUE S6L」を紹介 鮮やかなタッチパネル液晶が特徴的




Magazine **InterBEE TV**

(株)オンテック 2015.11.20UP

iPhoneの4K動画にも対応のマルチファイルプレーヤー「KAMELEON」を出展 参考出展で4Kのファイルプレーヤーもデモ




Magazine **InterBEE TV**

クリプトン・フューチャー・メディア(株) 2015.11.20UP

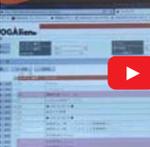
TRAX PRO、APS、SOUND IDEAS 効果音ライブラリを出展




Magazine **InterBEE TV**

シーティーシー・エスピー(株) 2015.11.20UP

DOGAlian(ドガリアン)マルチデバイス向け動画配信サービスに必要な収録連携・管理・配信機能をすべて搭載したアプライアンス




Magazine **InterBEE TV**

ジュエ(株) 2015.11.20UP

スタビライザー「Nebula4200シリーズ」小型のままにセンサーコントローラーを32bit化 1.6kgまでのカメラの搭載が可能




Magazine **InterBEE TV**

CalDigit Inc. 2015.11.20UP

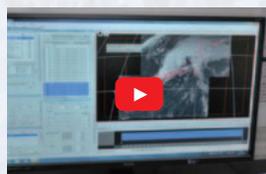
4Kワークフロー向けのThunderbolt 2対応4ベイで最大容量24TBの「T4 RAID」 水深1mで30分耐えるHDD「Tuff」




Magazine **InterBEE TV**

クロスイメージング(株) 2015.11.20UP

CATV向け気象・防災情報送出システム「Media Community Station」を出展

Magazine **InterBEE TV**

シスコシステムズ合同会社 2015.11.20UP

高密度、高帯域、低遅延のスイッチの「Nexus 9000 シリーズ」を展示




Magazine **InterBEE TV**

ZHuHai ChuanFu Optical Technology Co., Ltd. 2015.11.20UP

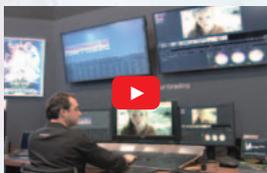
Nano IR NDフィルターなど各種シネマフィルターを展示 色かぶりなし、低反射超硬防水を実現




Magazine **InterBEE TV**

共信コミュニケーションズ(株) 2015.11.20UP

オンライン編集、VFX、カラーグレーディング、デリバリーをひとつに納めたトータルポストプロダクションシステム「Mistika」を出展

Magazine **InterBEE TV**

(株)ケンコープロフェッショナルイメージング 2015.11.20UP

歩きながらも水平保つスタビライザー「Wenpod」 スマホ、GoPro、DSLR用各種




Magazine **InterBEE TV**

(株)シナジー 2015.11.20UP

4Kファイルベースワークフローを効率化するツールを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ストロベリーメディアアーツ 2015.11.20UP

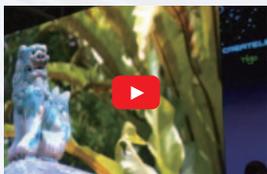
約200インチ、9.375ミリピッチ全天候モデルの移動式車載型大型ビジョンシステム「VisionRunner」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)CreateLED Japan 2015.11.20UP

大型 AirMAGICBOX-3 キューブ型LEDサイネージパネル

Magazine **InterBEE TV**

(株)サンテック 2015.11.20UP

高輝度白色LEDを600個使用した出力36Wの大型LEDライト LG-600SCを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)JVCケンウッド 2015.11.20UP

小型・軽量・4Kビデオカメラ「GY-HM200」を出展 4K60Pのノンリニア編集ワークフローを実演




Magazine **InterBEE TV**

(株)スリー・エム 2015.11.20UP

ダンブラケース、ハードケース、ソフトケースなど各タイプのバッテリーケースが揃う




Magazine **InterBEE TV**

セムテック ジャパン合同会社 2015.11.20UP

12G-SDI対応 ケーブルドライバ「GS12181」/
ケーブルライザ「GS12141」を出展




Magazine **InterBEE TV**

タックシステム(株) 2015.11.20UP

モニタリングコントローラー「VMC-102」を出展




Magazine **InterBEE TV**

TOA(株) 2015.11.20UP

4モジュール体のラインアレイ「コンパクトアレイ
スピーカー HX-7」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ナックイメージテクノロジー 2015.11.20UP

ALEXA miniをステディカムや小型ジンバルに
搭載した体験デモを実施




Magazine **InterBEE TV**

ゼンハイザージャパン(株) 2015.11.20UP

デジタルワイヤレスマイクロフォンD 9000を
はじめとするゼンハイザー製品、ノイマン製品などを
中心に展示




Magazine **InterBEE TV**

Dan Dugan Sound Design, Inc. 2015.11.20UP

有効なマイクを自動検出して各チャンネルのゲイン
およびトータルゲインを自動調整するオートミキサー
を出展




Magazine **InterBEE TV**

TELESTREAM 2015.11.20UP

4Kへのアップコンバート前にノイズを除去して
高画質化を図れるDark Energyプロセッシングなど
各種ソリューションを提案




Magazine **InterBEE TV**

日本通信機(株) 2015.11.20UP

送信出力1kW超のFM親局送信機に向けた
新型PAと電源装置




Magazine **InterBEE TV**

ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株) 2015.11.20UP

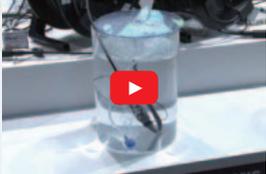
新しいコンセプトのサミングエンジンSigmaを出展




Magazine **InterBEE TV**

中部日本マルコ(株) 2015.11.20UP

光コネクタを中心とした光ハーネスを展示

Magazine **InterBEE TV**

(株)東芝 2015.11.20UP

放送用 HEVC エンコーダーによる符号化デモを実施




Magazine **InterBEE TV**

日本テックトラスト(株) 2015.11.20UP

SOUND DEVICES 688用スライドフェーダー
コントローラーを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ソリトンシステムズ 2015.11.20UP

世界初のモバイルネットワーク向けH.265
ハードウェアエンコーダ「Smart-telecaster Zao」
最大7回線で安定した映像配信




Magazine **InterBEE TV**

(株)TBSテレビ 2015.11.20UP

ライブストリーミングアプリ「Live Multi Viewing」を
デモ 低遅延で複数の映像を同時配信




Magazine **InterBEE TV**

(株)トラフィック・シム 2015.11.20UP

8K4Kソリューション・MMT/IP、TLV/IPの
収録再生装置を参考展示




Magazine **InterBEE TV**

日本無線(株) 2015.11.20UP

可搬性に優れた無線従事者不要の「IP-SNG 車載型
VSAT局」を出展




Magazine **InterBEE TV**

ノイトリック(株) 2015.11.20UP

大容量かつロック機構を備えた、全く新しいタイプの3極電源コネクタ「power CON」ケーブルコネクタを出展




Magazine **InterBEE TV**

ヒビノ(株) 2015.11.20UP

JBL PROFESSIONAL ラインアレイスピーカーの最上位シリーズ「VTX Series」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)芙蓉ビデオエージェンシー 2015.11.20UP

フラッシュ軽減装置をTBSテレビと共同開発 記者会見などでのフラッシュの刺激を軽減




Magazine **InterBEE TV**

メタルトイズ 2015.11.20UP

タイヤ交換無しで、レールと地面の走行を可能にした「オードリー」など各種特機を出展




Magazine **InterBEE TV**

Pioneer DJ(株) 2015.11.20UP

長時間フロアに居ても聴き疲れしない中高域の再生を実現したダンスフロアスピーカーを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ファーストエンジニアリング 2015.11.20UP

最新のステージライティング機器を出展




Magazine **InterBEE TV**

平和精機工業(株) 2015.11.20UP

平和精機工業 60周年を記念し修理相談コーナーで1回のみ50% OFFに




Magazine **InterBEE TV**

(株)ヤマハミュージックジャパン 2015.11.20UP

“音の入口から出口まで”最適なソリューションをトータルに。




Magazine **InterBEE TV**

ハイパーツールズ(株) 2015.11.20UP

最新の4K対応製品やHDMIと音声のブリッジ製品を紹介




Magazine **InterBEE TV**

富士フィルム(株) 2015.11.20UP

最大容量15テラバイト、最大750メガバイトの高速転送可「LTO Ultrium 7」を出展




Magazine **InterBEE TV**

ポーズ(株) 2015.11.20UP

パワードポータブルSRスピーカー「F1 Model 812」スピーカーアレイの形状を変え、会場に合わせた最適なカバレッジを実現




Magazine **InterBEE TV**

ユアサ工機(株) 2015.11.20UP

多軸型パンチルト搭載中継車用伸縮ポールシステム




Magazine **InterBEE TV**

ビジュアル・グラフィックス(株) 2015.11.20UP

“次世代”のファイルベース最新ソリューションを提案




Magazine **InterBEE TV**

(株)府中技研 2015.11.20UP

送信機・中継機をはじめ、各種制御機器、監視機器をラインナップ




Magazine **InterBEE TV**

北海道日興通信(株) 2015.11.20UP

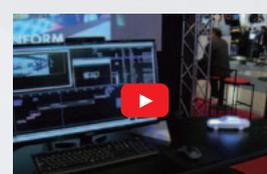
12月17日に発売予定のテロップ作成システム「TELOP CANVAS4」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ラグナヒルズ 2015.11.20UP

Dataton社のソフト「WATCHI OUT」出展 大型スクリーンにマルチ映像表示

Magazine **InterBEE TV**

ランサーリンク(株) 2015.11.20UP

Vマウントと一体化した無線伝送装置 HDMI、HD-SD 対応。伝送距離は 350m と 120m




Magazine **InterBEE TV**

(株)RAID 2015.11.22UP

RED 製 6K WEAPON を各種レンズに装着デモ
FREEFLY SYSTEMS 製リモートコントロール MIMIC も出展




Magazine **InterBEE TV**

アツデン(株) 2015.11.26UP

2.4GHz 対応デジタルワイヤレスマイクロホンシステム「PRO-XD」を出展 DSLR、iPad などに対応
12月1日 37,000円 で発売




Magazine **InterBEE TV**

(株)加藤電気工業所 2015.11.26UP

放送・通信設備の老舗、創業 67 年の加藤電機工業所が初出展 IP 制御が可能な小型回転装置「KP06-8 型パラボラ回転装置」を展示デモ




Magazine **InterBEE TV**

リーダー電子(株) 2015.11.20UP

LV7390 SDI ラスタライザーを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)コンドーブロードキャスト 2015.11.25UP

番組自動送出設備のダウンサイズ化を提案
ケーブルテレビ向けから 4K/IP 放送向けまで
ベースバンドと IP の両ルーターの制御可能




Magazine **InterBEE TV**

伊藤忠ケーブルシステム(株) 2015.11.26UP

3月から WOWOW で稼働中のファイルベース制作システムをデモ 放送系・業務系システムを統合管理する自社開発システム IMC をアピール




Magazine **InterBEE TV**

興和光学(株) 2015.11.26UP

最大 12 入力 8 出力まで構築できる 4K 対応の新型スイッチャー「KS1208SL」を出展、優れたディストーション値のマイクロフォーサーズ対応レンズも出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)サンフォニックス 2015.11.21UP

効果音 / BGM 検索システム「SOUNDMINER」を出展 ファイルを DAW へ瞬時に転送 映像、音声編集スタジオ向け HDD / SSD も出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)テレビ朝日 2015.11.25UP

放送とスマホの映像再生タイミング同期技術「msync-CAM」をデモ 放送中のテレビ音声を取り込んだスマホにマルチカム映像を配信 スポーツ、音楽ライブに有効




Magazine **InterBEE TV**

(株)エレクトリ 2015.11.26UP

SPL 社製マスタリングコンプレッサー「IRON」独自開発「120V テクノロジー」で周波数特性 200KHz、ダイナミックレンジ 150dB を実現




Magazine **InterBEE TV**

ジャパンマテリアル(株)/Matrox 2015.11.26UP

4K H.264 10bit 対応ハードエンコーダー「Matrox M264」や高品質テロップ搭載の議会中継用システム VidiGo CC 出展




Magazine **InterBEE TV**

三友(株) 2015.11.21UP

超高速ネットワークストレージ「Media Bucket」2Gbps で NAS と複数 NLE 共存 4K カメラフォーカスユニットや 4G LTE トランシーバーもデモ




Magazine **InterBEE TV**

ACEBIL JAPAN(株) 2015.11.26UP

製品ラインを一新 中継システム向け 150 Ball Head の「X50SYSTEM」も発売 最大搭載荷重は 50kg に対応




Magazine **InterBEE TV**

音響特機(株) 2015.11.26UP

EAW 製 ミドルクラス Adaptive Systems「ANNA」を展示 ミドルクラスでありながら DSP 処理による放射パターンのコントロール機能を装備




Magazine **InterBEE TV**

デジキャス合同会社 2015.11.26UP

Ross Video 社 12G-SDI 対応ルーティングスイッチャ「Ultrix」コンパクトな筐体で最大 72x72 を構築可能




Magazine **InterBEE TV**

Backstage Equipment, Inc. 2015.11.26UP
 米ハリウッドのカート製造会社 Backstage Equipmentが初出展 折りたたみ可能な小型カート「ミニ・フライトケース・カート」を出展




Magazine **InterBEE TV**

伊藤忠テクノソリューションズ(株)/日本オラクル(株) 2015.11.27UP
 テープライブラリシステム「StorageTek SL150」USB接続300巻まで拡張可能 NASによる複数接続も




Magazine **InterBEE TV**

ディーアンドビー・オーディオテクニク・ジャパン(株) 2015.11.27UP
 V-Seriesの新製品 ポイントソースラウドスピーカー「V7P」、グラウンドスタック専用サブウーファー「V-GSUB」を出展




Magazine **InterBEE TV**

PROMISEテクノロジー(株) 2015.11.27UP
 4K/8K映像制作環境に対応したファイルベース対応ストレージソリューションを提案




Magazine **InterBEE TV**

(株)HAROID 2015.11.26UP
 TVを楽しむためのデジタルの分身「TOVY」を出展 TV番組やウェブ、イベントなどにTOVYが出展 2016年にTOVYアプリリリース予定




Magazine **InterBEE TV**

オタリテック(株) 2015.11.27UP
 GENELEC社3ウェイ・メイン・モニタリング・システム「1234A」を出展 音響特性最適化機能を搭載 最大ピーク音圧レベル125dbSPLを実現




Magazine **InterBEE TV**

DDP DYNAMIC DRIVE POOL 2015.11.27UP
 ギガビット・イーサネットによる高速データ共有環境を提案 低コストで複数混在機器・ツール間のストレージ共有可能に




Magazine **InterBEE TV**

報映産業(株) 2015.11.27UP
 AVID 4Kスターターキットをデモ Artist|DNxIOとISIS|1000に最新のMediacomposerを搭載し4K60p編集に対応




Magazine **InterBEE TV**

三菱電機(株) 2015.11.26UP
 『次世代映像伝送システムソリューション』をテーマに、HEVC/H.265技術や、変復調規格DVB-S2X関連製品を出展




Magazine **InterBEE TV**

コモドマッティーナ(株) 2015.11.27UP
 国連会議室の導入実績を持つTIDEN社のデジタル赤外線会議システムを出展 電波干渉がなく高音質のコミュニケーションを実現




Magazine **InterBEE TV**

(株)Too 2015.11.27UP
 SSD×4基内蔵のターンキーシステム参考出展 読み出し速度8000MB/sを実現 「Premiere Pro」で非圧縮のDPX 4K60p連番再生も可能に




Magazine **InterBEE TV**

武蔵(株) 2015.11.27UP
 2チャンネルの素材のポン出し、リプレイ、スロー、ハイライト送出対応マルチチャンネルビデオサーバーMVXシリーズを出展




Magazine **InterBEE TV**

横河デジタルコンピュータ(株) 2015.11.26UP
 マスター統合監視システム「ICMS-T3シリーズ」を出展 TSとベースバンドの比較・監視が可能に




Magazine **InterBEE TV**

スターコミュニケーションズ(株) 2015.11.27UP
 ポータブル映像伝送システム「TVU ONE」最大10本のワイヤレス回線を効率運用 高画質映像をリアルタイム伝送




Magazine **InterBEE TV**

(株)フォトロン 2015.11.27UP
 EVSの収録制御アプリケーション「X Fly Streamer」出展 独自開発「STING」と組み合わせバラエティ、ドラマでの活用を提案




Magazine **InterBEE TV**

ラリタン・ジャパン(株) 2015.11.27UP
 KVM over IP製品で76カ国5万以上のロケーションに導入実績 100kmまで映像伝送可能なKVM製品などを出展






民放公式テレビポータル「TVer」スタート 放送局による動画配信の課題と展望

日本テレビ放送網、テレビ朝日、TBSテレビ、テレビ東京、フジテレビジョンの在京民放5局が連携し、2015年10月下旬に開始した民放公式テレビポータル「TVer(ティーバー)」。

スタートから3週間、Inter BEE 会期中の11月19日には、早くも累計100万ダウンロードを突破するなど、注目を集めるTVerについての基調講演が18日に開催された。在京民放5社から事業立ち上げに深く携われたキーパーソンをパネリストとして迎え、TVerの紹介とともに、放送局が位置づける動画配信の今後について討議がなされた。

電通 電通総研メディアイノベーションラボ統括責任者 メディアイノベーション研究部 部長の奥律哉氏がモデレータを務め、パネリストには、日本テレビ放送網 営業局営業戦略部 担当副部长 高橋秀明氏、テレビ朝日 総合ビジネス局 ビジネス戦略部 部長 愛宕康志氏、TBSテレビ メディアビジネス局 ペイテレビ事業部 部長代理 高澤宏昌氏、テレビ東京コミュニケーションズ 取締役 蛭川新治郎氏、フジテレビジョン コンテンツ事業局 コンテンツデザイン部 副部长 野村和生氏が登壇した。



INTER BEE CONECTED 内「TVer」出展ブース

■ 各社が期待する動画配信の収益化

冒頭、TVerの概要についてTBSテレビ高澤氏より「TVerとは在京民放5社が共同でテレビ番組を広告付き動画配信するキャッチアップサービス」と説明があった。ねらいは、「若い世代を中心に、だれでも、いつでも、どこでも視聴可能とする」、「違法動画配信の撲滅」、「新広告市場の創設」、そして「見逃し配信から有料動画への流入増加」という。

続いて、各氏から、各社の動画配信の内容と位置づけが説明された。

日本テレビの高橋氏は、広い意味での「動画配信」として、「都度課金」(TVOD)による「日テレオンデマンド」、「月額課金」(SVOD)による「hulu」、そして広告収入で賄う「キャッチアップ」とし、「TVODは、プレミアムコンテンツの配信には適しているが、大規模ビジネスにはなりにくい。SVODは、安定的な収益が見込める」と評価。TVerについて「地上波リアルタイム視聴と有料のインターネットアーカイブ配信への橋渡しになってくれるものと期待している」と述べた。

テレビ朝日の愛宕氏は、2018年に同局が「開局60周年」を迎えるまでに、「日本でトップグループのコンテンツ総合企業」を目指しているとし、その実現に向けた「5メディア戦略」を紹介。「地上波」「BS」「CS」の3メディアを中核事業、「インターネット」「メディアシティ」の2メディアを成長事業として位置づけた。動画配信「テレ朝動画」では、AVOD、TVODを実施。さらにサイバーエージェントと共同で進める「Abema TV」により、ストリーミングとVODを融合した配信サービスを予定していることを紹介。また、KDDIと共同で進めるSVOD「ビデオパス」、東映特撮ファンクラブのような「ファンクラブ型プラットフォーム」などを披露。TVerは、こうした多彩な配信事業の一つとして位置づけているという。

TBSテレビの高澤氏は、「有料課金型も無料広告型の動画配信も同様な比重で力を入れていきたい」とし、有料課金では現在、自社配信に加え「29社44サービスとアライアンスを組み、7,700本の番組配信をしている」ことを紹介。また、「無料見逃しキャンペーン」を、2015年10月から「TBS FREE」として本格運用

を開始したと述べた。高澤氏は、この二つの動画配信のねらいについて、「どちらも地上波番組視聴への回帰、視聴者の番組ネット配信へのニーズ、違法動画駆逐に寄与する」と指摘。「無料で見たい人」「お金を払ってでも見たい人」「リアルタイムで見たい人」「好きな時に見たい人」など「あらゆる要望に応える事業展開を行っている」と述べた。

テレビ東京コミュニケーションズの蛭川氏は、「テレ東っぽさを生かした展開」を目指しているとし、ビジネスパーソン向けの有料動画配信「ビジネスオンデマンド」(月額540円、会員数約5万人)や、北米・中国の配信業者向けにアニメコンテンツを提供していることを紹介。「現在ビジネスモデルが複雑化しており、有料・無料、課金・広告、自社・他社プラットフォーム、独占・非独占等々、ビジネスモデルの最適化を模索しているところ」と述べた。

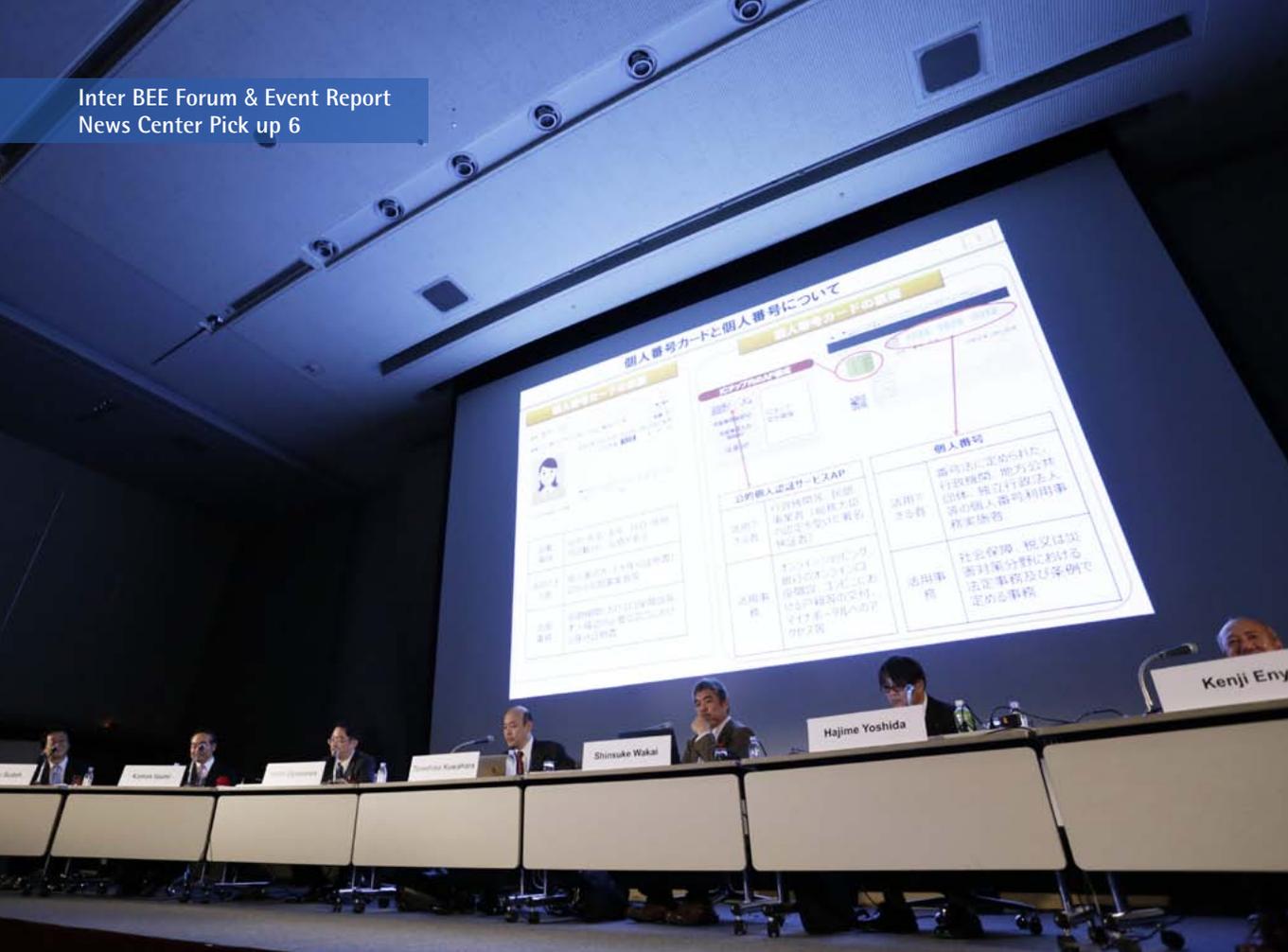
フジテレビの野村氏は、動画配信市場には、無料広告型と有料型のいずれも豊かな成長性があるとし、地上波見逃しやその他のさまざまな動画サービスに足がかりを持ち、それらの組み合わせにより、収益の最大化を図ると述べた。また、TVOD、SVOD、AVODを有機的に組み合わせた1つのプラットフォームで実現する「U-VOD」を「最強のVOD」として、その実現を目指すとした。「U-VOD」は、フジテレビの造語。UはUltra、Ultimate、Uniqueなどを意味する。

■ 放送との連携、相乗効果が鍵

討議では、ネットにおけるテレビ番組の動画配信は、長時間視聴を増加させ、同時に広告視聴時間自体も増やしているという。中でも特徴的なのは、テレビ番組を見た視聴者が録画ではなく、ネットで再度視聴する「二度見」や、「見逃し視聴」など、テレビ視聴をフォロー、強化する形での動画配信視聴が増加している点にある。

奥氏は最後に「各種の調査からも、TVerをはじめとした『見逃しキャッチアップサービス』は、地上波テレビCMと同様、新規顧客を掘り起こし、ブランド好意やブランド興味喚起などの態度変容を促し得る媒体として大いに期待できる」とまとめた。





日本のテレビ放送とメディア産業の次世代サービスを考える特別講演

Inter BEE では毎年、放送をはじめとした国内外のメディア産業の最新動向を伝える講演会を開催している。

初日の18日に開催された特別講演「マイナンバー時代を迎えたテレビ放送の次世代サービスを考える」では、飯泉嘉門 徳島県知事による基調講演「マイナンバー制度と災害対応時のメディア活用」と、パネルディスカッション「マイナンバー時代を迎えたテレビ放送の次世代サービスを考える」が催された。

飯泉知事は講演で、同県の豊かなブロードバンドインフラを活用した雇用創出やデジタルコンテンツの施策を紹介。また、マイナンバーを活用した地域防災等対応システムなど新たな展開も示した。飯泉知事も参加してのパネルディスカッションでは、このマイナンバーとスマートテレビを活用した防災システムの構築について、関係者それぞれの立場から現状と展望が述べられた。地域の放送局と地方公共団体との連携によるビッグデータの活用が、地方創生の一環として重要な役目を担っていることが確認された。



特別講演： 「マイナンバー時代を迎えたテレビ放送の次世代サービスを考える」

■ 飯泉 徳島県知事 「光ブロードバンドを駆使した 地域防災等対応システムを積極推進」

基調講演の冒頭、飯泉知事は高速ブロードバンド環境整備の経緯について説明。「全県CATV網」により県下全域に光ブロードバンド環境を整備し、都市部の企業31社が5市町に「サテライトオフィス」を開設し50名以上の地元雇用を創出した。さらに、4Kプロジェクトアクションマッピングとプロの生演奏を融合したコンサート「青のシンフォニー」を会場のある阿波市から徳島市にライブ中継するなど、「デジタルコンテンツの集積地『徳島』」として積極的な展開を進めている。また、平成27年には「Lアラート」を介してハザードマップなど様々な地理("G空間")情報をカーナビと連携させる「災害対応業務即時支援プロジェクト」を実施した。

飯泉知事は今後の展望として、「マイナンバーによる公的個人認証サービス、ハイブリッドキャスト、ローカルテレビ局をフルに活用することによって『地域防災等対応システム』のさらなる進化・普及に向け、引き続き「スマートテレビ連携・地域防災等対応システム普及高度化機構」と積極的に連携していきたい」と抱負を語った。

■ テレビから個人へ災害避難情報を声かけ

パネルディスカッション「マイナンバー時代を迎えたテレビ放送の次世代サービスを考える」では、平成26年から在京民放5局とNHKを中心とした検討委員会が進めた事例を紹介。徳島県の美波町阿部地区で250名を対象に、テレビ放送と連動した避難訓練を実施。同地域は、東南海地震の際に20m級の津波が予想される地域で、人口の50%以上は65歳以上という高齢化社会だ。実験では全世界のテレビをネットに接続し、個人情報を登録したIDカード「すだちカード」による避難所での個人認証を実施した。テレビモニターを通じて「〇〇さん逃げてください」という個人名による呼びかけを実現した。

■ ハイブリッドキャストの活用へ発展

同実験のさらなる高度化へ向け、平成27年9月16日に「一般社団法人スマートテレビ連携・地域防災等対応システム普及高度化機構」を設立。「ハイブリッドキャストの放送外マネージド」と「個人番号カード」を活用した防災システムの構築を目指した。「放送外マネージド」により、どのチャンネルを見ているかに関わらず、個人への呼びかけが可能になる。マイナンバーが災害対策に使われるのは、チップに含まれる公的個人認証機能のみ。そのため、災害対策で個人番号カードをテレビに接続されたカードリーダーにかざしても、個人情報が全て盗み取られることはないという。

■ サイバー攻撃の標的となりうるテレビ業界

災害時に活躍するスマートテレビの基盤をなすのはクラウドであるが、数百万のデバイスに接続され、毎秒数百万イベントを処理するクラウドは、仮想マシンなら43円/h、Asure Event Hubsなら1.53円/hとかなり安い。現在ではセキュリティの面でもクラウドは安心度が高いが、2020年に最もサイバー攻撃の危険性が高いのはテレビ業界である。業界はクラウド等を駆使したセキュリティ対策に本腰をいれる必要があるという。

■ ビッグデータを駆使した「命のみち」を模索

2015年6月に閣議決定された骨太方針・成長戦略の中に「テレビ・スマートフォン等を活用した電子的な行政手続き等への多様なアクセス」が謳われている。「ケーブルテレビのSTB、スマートテレビ、スマートフォン等における個人番号カードの読み取り機能等の実用化」に、関係各方面、特に地方のテレビ局を中心とする関係者の協力が強く望まれる。

地方創生の一環として、本格的にローカル放送局と地方公共団体が一体となってビッグデータを駆使し「命のみち」を模索する時代がやってきた。



海外における放送・メディア産業の最新動向を紹介した特別講演と招待講演

招待講演1: 「ブラジルテレビ放送技術協会 特別フォーラム」

■ 急ピッチで進む リオ・オリンピック開催への整備

「リオ五輪2016：オリンピックの展望」では、駐日ブラジル大使館 科学技術エネルギー部 部長のヴィートル・バイア・ジニース氏が登壇。リオ・オリンピックへ向けた開発状況について、現在急ピッチで準備が進んでいると説明。選手団の他、NOC役員、審判団、マスコミ関係者、観衆など多くの来場者が予想されるので、交通網の整備などが進められており、地下鉄も6駅の新設が決定し、路線も16kmの伸長工事が進行中であると話した。

■ アナログ停波へ向けた相互干渉問題

「ASO-ブラジルにおけるアナログTV終了」で登壇したブラジルテレビ放送技術協会会長のオリンピオ・ホセ・フランコ氏は、2007年から始まったデジタル放送の状況を説明した。アナログ停波は、2015年から2018年にかけて順次実施が計画されているがSTBでのTVと通信の相互干渉が課題でしばらくこの解決へ向けた取り組みが必要という。

■ テレビの技術進化を支える3つの方向性

「ラテンアメリカ放送業者：過去と未来」では、ブラジルテレビ放送技術協会 副会長のフェルナンド・ビッテンコート氏が登壇し、急速に高度化するテレビ技術と、一般における視聴環境の乖離を指摘した。また今後の課題として、インターネットが普及する中で、「生活に密着した番組」を作り続けることが重要と指摘した。

■ 世界のインタラクティブテレビを包含するプラットフォーム構築を提案

最後の講演「放送とブロードバンドにおける技術収斂とインタラクティブなデジタルTVシステムの相互運用性」では、サンパウロ大学 教授 マルセロ・ズッフォ氏は今後、IPテレビから「インタラクティブテレビ」(双方向・相互作用テレビ)の時代に進むとし、技術的にはiTVシステムの実現が可能であることを指摘。「世界のiTVの中心:Global iTVをつくれれば、世界市場のiTVのメディアコンテンツを相互に運用できる体制ができ上がり、どのプラットフォームでも、TV間での相互作用も可能になるし、統一された基本設計で「Global iTV」が構築できると述べた。



招待講演5: 「放送とメディアの市場及び技術トレンド」

■ IABM「放送機器最終購買者の約3割がクラウド導入済み」

IABM(国際放送機器工業会) APAC 理事のピーター・ブルース氏は、招待講演5「放送とメディアの市場及び技術トレンド」で、2015年10月の最新の放送機器メーカーの販売データを基に今後の展望を次のように話した。

「全世界の放送機器メーカーの販売は5%強アップで落ち着いている。中小企業は2014年終盤にマイナス成長を脱し、2015年7月頃までは全体の伸びを上回る6%強の成長を示したが、7月以降再び下降線をたどっている」

「今後は、中国株式市場の危機、中国への輸出依存国のGDP見通しの暗さ、米国金利引き上げの可能性(2015年12月0.25%の引き上げ決定)、などが足を引っ張らないことを祈っている。

メーカーサイドは46%が「とても明るい・やや明るい」、最終購買者は68%が明るい見通しを持っている。クラウドベースの導入については、29%が既に導入済み、31%が極めて積極的、24%は多分導入するだろうとのことであった」



招待講演6: アメリカにおける次世代テレビ音声の規格動向について ～ATSC3.0の音声規格～

■ 音響規格の有力候補にDolby-AC-4を検討

NAB(全米放送事業者協会) ニューメディアテクノロジーズ・シニアディレクターのスキップ・ピーズィ氏は、招待講演6「アメリカにおける次世代テレビ音声の規格動向について：～ ATSC3.0の音声規格～」で、米国次期デジタルテレビ規格ATSC3.0の規格策定の動向を次のように説明した。

「ATSC3.0は、2016年夏を目処に規格案が発表される予定。後方互換性のない全く新しいシステムを考えている」とし、音響の規格に関して、次のような見解を明らかにした。

「7.1+4は必須。22.2+HOA(HighOrderAmbisonic)もオプション可能。ディスクリットなCHだけでも良いが、CH+(Audio) Objectsも必須と考えている。ヘッドフォンサラウンドや聴覚障害者、また高齢者の聴取サービスを含むユーザーの環境に最適化した音声サービスが可能となる。音声をインターネットで伝送し、放送で受けた映像と同期させる能力も付与したい。最高の効率と極度に高品質の音質を提供し、ステレオや5.1サラウン

ド、さらに11.1CHサラウンドやヘッドフォンサラウンドもサポートする」とし、オプション規格ではNHK22.2CHサラウンドやHOAといった没入感サラウンドを訴求する予定であると述べた。「2016年夏までにコーディング技術とプログラム品質のテスト評価を行う」予定で、有力候補として「Dolby-AC-4」を検討しているという。





メディアビジネスの可能性探り 多彩な取り組み —放送の近未来を見据える—

11月18日(水)から20日(金)までの3日間、幕張メッセで開催したInter BEEの展示会場内で、今年2回目になる企画プログラム「INTER BEE CONNECTED」が開催された。ネットにおける映像配信ビジネスの多様化、高機能なモバイルデバイスの普及による映像視聴の拡大、さらにはSNS等における動画配信やライブ映像配信への関心の高まりなど、ネットの映像視聴が拡大する中で、放送局もネットを活用した事業の拡大において、さまざまな試みを積極化している。そうした動きを反映する催しとして昨年から開催されているのがINTER BEE CONNECTEDだ。

オープンステージでは、毎日3つのテーマで計9回、セッションが開催。動画配信の最新状況や視聴測定技術、米国の放送・通信最新事情など、多彩な視点によるテーマで、最前線で活躍

する担当者を招いてのパネルディスカッションが展開された。会場は毎回、120人を越える席が常に満席状態となり、立ち見が出る盛況だった。昨年の大盛況を受け、今回は特別にサテライトルームも設置したが、そちらも常にほぼ満席状態だったほどの人気ぶりだった。

オープンステージの隣には、CONNECTED Caféや、昨年同様、動画配信関連の企業による出展ブースが設けられたブースエリアのほか、出展企業によるプレゼンテーションが1日10件以上開催されるEXHIBITORS PRESENTATIONエリアも新たに設けられ、各社のサービスや技術に関するプレゼンに多くの来場者が聞き入っていた。

INTER BEE CONNECTED アドバイザリーボード (50音順)

- 安藤 聖泰氏
株式会社 HAROID 代表取締役社長
- 江口 靖二氏
合同会社江口靖二事務所 代表/デジタルメディアコンサルタント
- 齊藤 浩史氏
株式会社毎日放送 経営戦略室 マネージャー
- 境 治氏
OS zero 代表/メディア・コンサルタント
- 塚本 幹夫氏
株式会社フジテレビジョン 主席渉外役
- 二瓶 浩一氏
株式会社電通 ラジオテレビ局 局長 兼 デジタル&グローバルビジネス推進部長
- 村上 圭子氏
日本放送協会 放送文化研究所 メディア研究部 主任研究員



セッション報告 1

「視聴スタイルの変化とビジネスチャンス」 セカンドスクリーンでテレビは祭り化でき、広告収入も付加できる可能性がある

最初のセッション、18日10:30からは「視聴スタイルの変化とビジネスチャンス」のタイトルで、スマートフォンの普及で変化するテレビの視聴に合わせたテレビ局の取り組みを紹介し、ディスカッションした。そこには、これからのテレビにとっての新たなビジネスチャンスの可能性も示されている。

このセッションのモデレータは角川アスキー総研の主席研究員 遠藤諭氏。まずはイントロダクションとして、いまの視聴スタイルの状況を同総研の調査データからスライドで示した。例えば、録画視聴はテレビ視聴の4割に上り、CMスキップについて「すべてする」と答えた人は3割にもなるという。こうした視聴スタイルの変化に、テレビ局としてどう対処するか。三人のパネリストがそれぞれの事例をプレゼンテーションした。



■ネットの利用でリアルタイム視聴を促進した『金曜ロードSHOW!』

日本テレビ『金曜ロードSHOW!』プロデューサーであるターニャ氏は、映画番組を“祭り”として演出することに取り組んできた。「ハリポッター祭り」や「夏はジブリ」などと題して関連作品を連続放送。さらにセカンドスクリーンで映画への“参加”を呼びかけ、リアルタイム視聴の楽しさをアピールした。またWEB上に「金曜ロードシネマクラブ」を設け、続けて視聴するとポイントがたまる仕組みも展開している。ネットの活用でリアルタイム視聴を促進し、視聴率を高めることに成功しているという。



■『TBS ぶぶたすアプリ』でセカンドスクリーン視聴による収益モデル

TBSテレビの安江圭氏は『TBS ぶぶたすアプリ』の事例を紹介した。『王様のブランチ』をはじめとする情報番組でこのアプリを活用、番組を見ながら検索し、検索した情報は画面上に出し、セカンドスクリーン視聴を楽しませている。さらに、テレビCMに合わせたバナーを表示して広告収入につなげたり、番組に出てきた商品の購入を促してEC収入を得るなど、テレビ局の次の時代の収益モデルに挑戦している。

■野球中継の同時再送信『バーチャル高校野球』でスポンサー獲得

朝日放送の岸本拓磨氏はこれまで様々な番組に対し、テレビのCGM(消費者発信メディア)的な仕掛けに取り組んできた。ハイブリッドキャストを活用して番組に視聴者のコメントを表示させるテレビのニコ生化の実験をしたり、『バーチャル高校野球』と題した野球中継のネット上での同時再送信にも関わった。『バーチャル高校野球』では朝日新聞と組むことでより情報の濃いサイトが実現でき、広告セールスもテレビ放送とは別にスポンサーを獲得できたという。

■「ネットとの連携、今のうちに」

後半の議論ではまず、遠藤氏がTwitterとテレビ視聴の関係に質問。視聴率とはあまり関係がないが、ターニャ氏は「視聴率とTwitterが高いときはティーンとF1層が取れているので、やったほうがいいとは考えている」と述べた。続いて遠藤氏はNetflixのCEOが「20年後は電波ではなくネット経由でテレビを見るようになっていだろう」と述べたことへの意見を求めると、安江氏は「テレビに力がある今のうちに、ネットとの連携を図るべき」と将来に向けた試みがいま大切であると主張した。

■西高東低のテレビ視聴傾向

最後に遠藤氏が、5年後のテレビについて意見を求めると、ターニャ氏は「テレビ同様映画も危機なので、金曜ロードSHOWで祭りを続けていきたい」と述べた。安江氏は「テレビは“モニター化”していく。“配給者”としてテレビ局が何をすべきか追求したい」、岸本氏は「テレビ視聴は西高東低で関西はまだテレビを見ている。そうした地域格差が広がっていくのでそれに対処したい」と主張。三者三様に今後への前向きな意思を示した。

パネリストそれぞれが現状への強い危機感を持ちながらも、それぞれの考え方で果敢に新しい挑戦をしていることが伝わり、いろんな意味で学びの多いセッションとなった。

セッション報告2

4K制作で先行するローカル局や各プラットフォーム 将来性に期待し多彩な実験的取り組み

INTER BEE CONNECTED内での企画セッション、初日18日の2つ目のセッションは「映像表現としての4Kの可能性」と題して、4K番組の制作や配信について実績を持つパネリストが集まって事例を披露した。4K番組は地上波での放送はまだロードマップが決まっていない。だがローカル局や各プラットフォームではその将来への期待から実験的取り組みが進んでいる。このセッションでは、4Kについての最新の事例をまとまって聞くことができ、非常に貴重な場となった。

このセッションでは次世代放送推進フォーラム、通称NexTVフォーラムでまさに4K放送を推進する元橋圭哉氏がモデレータを務め、同氏の呼び掛けによって4Kにすでに取り組んでいる6名のパネリストが集められた。



■最新の技術で故郷を見つめ直す「4Kの絵の強さ」生かす

石川テレビの木下敦子氏は今年の8月から『4Kで綴る映像詩・新ふるさと人と人』という15分のレギュラー番組の制作に取り組んでいる。この春の新社屋完成を「第三の開局」と位置づけ、最新の技術で故郷を見つめ直す番組を、というコンセプトで制作に着手した。毎週、試行錯誤を繰り返しながら感じたのは、4Kの絵の強さ。「絵に力がありすぎてナレーションがうざい」と感じることも多いそうで、石川県がこんなに美しいとはと、再発見する日々だという。

■雄大な自然を撮影「4Kはフロンティア」

北海道テレビの濱中貴満氏はアルゼンチンをロケし、氷河などの雄大な自然を撮影して番組にした。既存の撮影とは多くの違いがあり、例えばピントが合いにくいなどで戸惑ったという。また夜の映像はこれまでとあまり変わらないので昼間の風景を中心に撮影した。感想としては「4Kはフロンティア」で、作り手として果敢に取り組みたいと感じているとのこと。

■12月1日から期待のケーブル4Kが開始

須高ケーブルテレビの丸山康照氏は、同局だけでなくオールケーブルの番組制作の取り組みについてプレゼンした。4K番組を全国統一編成で放送するもので、「ケーブル4K」と名付けられている。12月1日からとのことで、スタート間近の新鮮な発表となった。参加局も今後増えていくというので期待したい。

■「4Kを生かすには4Kを理解することが重要」

いまじんCRの堀川健二氏からは番組制作会社としての4K番組制作についてプレゼンがなされた。同社は『行列ができる法律相談所』『有吉反省会』など地上波キー局の人気番組を制作している。そんな彼らが挑戦して制作したのが『4K水中絶景散歩〜慶良間諸島国立公園』だ。取り組んでみて、4K映像の魅力を生かした番組作りには、プロデューサーやディレクターが4Kを理解していることが欠かせないことなどを課題として報告した。

■ひかりTV 4K-VODで700本のラインアップ

さらに、ひかりTVを運営するNTTぶららの佐藤久道氏と、スカパーを運営するスカパーJSATの軽部岳大氏からは、それぞれ4K番組を編成・提供してきての経験が報告された。ひかりTVでは4K-VODを昨年開始し、現在は700本のラインアップを揃えている。4Kチャンネルを放送しているスカパーでは、普及期の問題がまだまだ多いが、それらが解決すれば4Kにはメリットしかないという力強い感想が語られた。

■「課題は多いが、普及が進めばメリットを享受できる」

最後に元橋氏からパネリストに今後への課題について投げかけられたが、回答としてはいずれも普及がまだの段階での、機材や環境・理解の不足に対するものだった。スカパーJSAT軽部氏の発言を思えば、今後普及が進めば課題も解決し、4Kのメリットが享受できるようになると言えるだろう。パネリスト各人の新鮮で前向きな報告により、4Kへの期待が高まるセッションとなった。



セッション報告3

「キー局の動画配信(オンデマンド)」 知見を積み重ねて各局それぞれ独自の戦略を磨く

INTER BEE CONNECTED内での企画セッション、18日最後は「キー局の動画配信」と題して、在京キー局各局の動画配信担当者が一堂に会してのパネルディスカッションだった。昨年も「キー局のネット配信」という同様のセッションがあり立ち見も出る大勢の来場者となったが、今年のこのセッションも満席となり、別に設けられたサテライト会場の席も埋まった。TVerをテーマにしたInter BEE全体の基調講演も熱気を帯びていたが、それに続いてテレビ局による動画配信への関心の高さが感じられた。



■データから見る「テレビ番組のネット配信ニーズ」の大きさ

このセッションのモデレータは、INTER BEE CONNECTEDの発案者でもある江口靖二氏が担当した。まずは昨年の動画配信のセッションでも登壇した電通総研の奥津哉氏が、議論の前提として「テレビ放送とネット動画への接触」の最新データを一通り説明した。

若者のテレビ離れが進むと、各世代がその傾向のまま年齢を重ね、全体としてテレビへの接触が減少することが懸念される。その一方で、ネットで動画を視聴する際は動画共有サイトでテレビ番組を視聴する割合がかなりあることも解説された。つまり、テレビ番組のネット配信には大きなニーズがあるのだと言える。

■多面的な展開を進める日テレの動画配信

続いて各局担当者が、自社の動画配信の考え方をプレゼンした。日本テレビの太田正仁氏は、見逃し視聴を推進する一方、huluではアーカイブを配信するシンプルな考え方を短く説明。テレビ朝日の大場洋士氏はテレ朝動画やTVerで見逃し配信を進める一方、サイバーエージェント社とのAbemaTVやKDDIビデオパスへの番組供給、そして動画に限らない独自のコアポータル構想としてfavclipを展開するなど多面的な戦略を説明した。

■多彩なキー局各社の動画配信

TBSテレビの高澤宏昌氏は、TBS FREEで無料見逃しを、TBSオンデマンドで有料配信を展開するなど四象限のマトリックスで戦略を明示した。テレビ東京コミュニケーションズの蜷川新治郎氏はビジネス系からお色気までの独特な番組群を、テレビ東京らしさを生かして配信していきたいと説明。最後にフジテレビジョンの下川猛氏はFODブランドのもと、TVOD、SVOD、AVODを多角的に展開するU-VOD戦略の考え方を披露した。

■各局が動画配信に取り組む「ねらい」

後半のディスカッションではまず江口氏から、動画配信に取り組む理由が問いかけられた。太田氏は、見逃し配信については若者層へのリーチのためであり、地上波の補完と位置付けているが、有料配信の方では景気に左右されがちな放送とは別の収益源としてとらえていると述べた。高澤氏は大筋同じ意見としながらも、ドラマのアーカイブが豊富なTBSとしては過去の名作の配信でDVDでも見せられなかった番組を配信し、3次4次利用にもなっていることを付け加えた。

■「見逃し視聴」自宅が多くモバイルは少ない傾向

また、奥氏から見逃し視聴を利用するのは自宅のリビングや自分の部屋がほとんどで、外出中の利用は少ないというデータが示され、テレビ受像機で視聴させた方が良いのではとの問いかけがなされた。太田氏はhuluの視聴データを見ると、デバイスはスマホの方が多いが、視聴時間ではテレビの方が多いことを述べた。蜷川氏は、まだスマホが増える中でコンテンツをとにかく出している段階で、どうやって知ってもらうかで苦労している段階だと発言した。

■Amazonへの対応を模索中

また、9月にSVODサービスをはじめたAmazonについて聞くと、蜷川氏と高澤氏はコンテンツを多く出しているもの様子見中だと説明した。太田氏は、よくよく様子を見て、コンテンツ側にお金が戻らないサービスには出さない考え方であると述べた。

見逃し配信も二年目に入り、ポータルとしてのTVerもスタートした今、各局ともそれぞれ知見を積み重ねて独自に戦略を磨いていることがよくわかるセッションだった。今後さらに工夫を積み重ね、収益的にも大きな身を結ぶことを期待したい。

セッション報告 4

「米国放送界最新事情：大手TVネットワークのOTT戦略とその波紋」 テレビ番組もオムニマーケティングを考える時代に入った

INTER BEE CONNECTED 内での企画セッション、19日最初のセッションは米国在住のITジャーナリスト 小池良次氏をお招きし、江口靖二氏の進行のもと米国放送界の最新事情をお話いただいた。大手TVネットワークが積極的にネット配信に乗り出し、それを軸に大きく変化しつつある米国の動向がわかりやすく伝わるセッションとなった。

この記事では、小池氏の話の内容をできるだけ再現してお届けしよう。

■ 3~4人に一人がOTTを利用 すでに成長率は鈍化

「米国の家庭は6割がネットに接続しており、さらにその中の6割が何らかの形(ゲーム機などを介した家庭も含む)でテレビがネットに繋がっている。OTTサービスの最大手はNetflixだが、すでに米国国内では3~4人に一人が利用しているので、成長率は落ちている」

「OTT事業者は大きく4つに分類でき、タイムワナーケーブルのようなネットワークOTT、NetflixやhuluのようなクリアリングハウスOTT、AppleTVやROKUなどのOTT-STB、そしてそれらに番組を提供していた放送局などが直接配信するコンテンツプロバイダーダイレクトという新しいグループも登場している」

■ "世界一周"をめざすNetflix 日本は中国進出の拠点

「Netflixは世界一周をやる宣言しており、日本進出は米国国内でも話題になった。中国に行く前の拠点として日本を重視している。もちろん日本市場そのものも一定の規模があり国内コンテンツもしっかりしているからでもある」

「日本では5年間赤字が続くと明言しており、アジアはブランドを視聴者が重視するので時間がかかってもその後続く市場になると彼らは考えている」

■ ケーブル契約100ドルに対しOTTは5~10ドル

「OTTサービスのリストを見ると、5~6ドルから10ドルというところ。米国のテレビ受信はケーブル契約に100ドル程度かかる。収入の高い層ではこれに加えてOTTをいくつか利用する傾向になっている」

「低収入層ではケーブルなど多チャンネルサービスの契約を減らしてOTTを付加する。コードカッピングではなくコードシェイピングと呼ばれている」

■ OTTに熱心なCBS NFLの独占配信権を獲得したVerizon

「ネットワーク局でOTTに熱心なのはCBSで、All Accessという5.99ドルのサービスを開始した。ライブでの再送信も行いつつ、7,500本程度をオンデマンドで視聴できる。他は例えばFOXの場

合、スポーツとニュースが強いのでオンデマンドに向かない。ケーブル会社や衛星会社にもものすごく高い再送信料をとっている事情もあるようだ。ABCはニュースをネット配信しており広告付きで無料で視聴できる」

「ダークホースがVerizonで、NFLの独占配信権を取った。一方で若者向けのgo90を手に入れショートフォーマットでネットネイティブの制作者たちが作っているのが若者に人気が出ている」

■ コンテキストがEC戦略のポイント

「米国では番組をあらゆる機会に見られるようにして、これはECをモデルにしたオムニマーケティングと言えるだろう。米国のECはコンテキスト(Context)に合わせて広告を出す。コンテキストを握るということが番組にとって重要になる」

「今後、番組と一緒に広告を見せるというより、番組がアドネットワークのようなものになり、そこにワンクリックショッピングがくつつく、ということになるのではないか。放送がネットに出て行ったときに、テレビ番組だけ他のインターネットと違うと考えてはいけない。おのずからネット上での主流であるECのやり方にならざるを得ないだろう」

とくに最後の方は非常に理解しにくい部分だろう。米国でも新しい考え方なので、ようやく番組のネット配信がはじまったばかりの日本ではイメージしにくい。だがネットに出たら「番組と一緒に広告を見せる」とは違うやり方を考えねばならないし、それも含めてオムニマーケティング、つまり番組が視聴されるタッチポイントでそれぞれのマネタイズを整えて擦り合わせていく方向に考え方をシフトせねばならないということだと思ふ。

小池氏のお話を聞くというシンプルなセッションだったが、ある意味もっとも最前線の知見を得る機会となった。



セッション報告 5

「放送同時再送信への取り組み」 どう事業化するのが今後の最大の課題

INTER BEE CONNECTED 内での企画セッション、19日2つ目のセッションは「放送同時再送信」がテーマ。放送界で今年もっともホットな話題を取り上げた。同時再送信に実際に取り組む三社からパネリストが登壇。それぞれの取り組みを紹介しながら、フジテレビの塚本幹夫氏がモデレータ役でディスカッションが行われた。

まずモデレータの塚本氏から、同時再送信を取り巻く背景の解説がなされた。テレビ離れの要因としてタイムシフトとデバイスシフトが言われる中、その打開策の一つとして同時再送信が注目されていること、中でもNHKは放送法の改正もあり、今年1月に発表された新3カ年計画で取り組みが明記されたことなどを解説した。



■ NHK ネット活用の位置づけを大きく方向転換

それを受けてまずパネリストとしてNHKの近藤宏氏がショートプレゼンを行った。背景として、ネット活用を放送の補完とらえていたのを大きく方向転換し、放送の前・中に理解促進にも活用することになったと説明。災害時の同時再送信を、すでに実証実験とは別に、災害時などの同時再送信として火山噴火や水害の時などに行ったという。さらにこの10月から11月にかけて視聴者から募集して、一万人が参加する実証実験を行い、今後はNHKがネット権を持つスポーツ番組でも試験的に提供していくという。課題として、受信料制度との関係や著作権処理、人員の確保などがあり、本格実施には多くのハードルがあると語った。

■ コアファンへ向けたコンテンツで

同時再送信を展開するフジテレビ

続いてパネリストとしてフジテレビの手塚久氏が、CSチャンネルでの同時再送信について説明した。CSチャンネル・フジテレビNEXTの放送を、昨年3月から同時再送信しておりNEXT SMARTと呼んでいる。放送加入者は無料で利用できるほか、放送非加入者でも1,200円で同時再送信だけを視聴できるやり方だ。フジテレビNEXTではF1をはじめとするスポーツや、ももクロなど特定の音楽番組も多く、それぞれコアファンを持つため、この仕組みを試みたという。1年半が過ぎ、同時再送信の加入者は放送契約者の6%に達し一定の成果を感じているとのことだ。

■ 東京メトロポリタンテレビ

同時再送信は全国へ番組提供する仕組み

もうひとりのパネリストとして、東京メトロポリタンテレビの前嶋宏氏もプレゼンを行い、同社のエムキャストというアプリを通じて一部の番組で同時再送信を行った内容を解説した。本年7月からリクルートとの共同実験でスタートし、東京都放送局が日本全国に番組を届ける仕組みとして期待があった。現在、60番組で週63時間を送信している。配信は都道府県単位で配信制御が可能で、同局の番組を販売している地域へは送信しないようにするなど対応できているという。著作権処理は対応が大変で、生の情報番組でも配信許諾が取れてない部分だけにフタをするなどして対処しているようだ。

■ ハードルの高いスポーツの権利取得

ここでモデレータ塚本氏から、3人のプレゼンを受けて同時再送信の課題を示した。著作権、地域制御、インフラ、事業化の4点で、それをもとにディスカッションが行われた。著作権についてはとくにスポーツは難しく、配信も含めたオールライツで権利取得はかなりハードルが高いという。インフラの問題ではアクセス集中への対処が課題だが、CDNやサーバー・サービスを駆使して対応している。事業化については、フジテレビNEXTは課金、エムキャストはいずれ広告収入を得られるかが課題となる。難しいのはNHKだが、追加の受信料を聴取するのかどうか、まだ明確な方針は出ていないようだった。

同時再送信には様々な課題があり、追加コストもかかる中でどう対処すべきか、結論は簡単には出せないだろう。だが視聴者にはニーズもあり、テレビ離れへの対処としても取り組むべきテーマだ。さらに来年以降でどんな成果が見えるのか、期待したいところだ。



セッション報告 6

「放送通信連携で新境地を拓くローカル放送局の取り組み」 海外販売、Facebook 視聴向けドラマなど多彩で積極的な展開の各社

INTER BEE CONNECTED 内での企画セッション、2日目の最終セッションはローカル放送局の取り組みがテーマ。ネットの連携活用でユニークな事例を持つ4つの局のパネリストが集まって、それぞれの取り組みの概要と背景を語ってもらった。ローカル局の困難が言われる中、非常に活力あふれる4人による新鮮な取り組みは、在京キー局にも勇気を与えるセッションとなった。

このセッションのモデレータは、次世代メディア研究所の鈴木祐司氏。まずは鈴木氏によるイントロダクションからセッションははじまった。鈴木氏の話は、ちょうど前週発売の経済誌・週刊ダイヤモンドが組んだ特集、『テレビを殺すのは誰か』の内容を取り上げながら展開。中でも、同誌面に掲載された「地方局122社経営苦境度ランキング」をそのまま掲載し、4人のパネリストが所属する局が何位かを示したスライドがあり、場内の空気が少々重さを帯びた。だがそれに続く4人のプレゼンはその重さを跳ね飛ばすような明るく元気なものだった。



■ 自社制作率 22.7% を誇る九州朝日放送 オウンドメディアでも積極姿勢

九州朝日放送の香月和宏氏は同局の意欲的な姿勢を紹介。自社制作率は22.7%と高く、ネット活用でもオウンドメディア上でのニュースをはじめとする番組配信に取り組み、YouTubeに限らず他社チャンネルへも積極的に配信していることを説明した。オリジナルドラマ『福岡恋愛白書』は昨年3月に世界同時配信し、それが海外10カ国での番組・配信につながったという。さらに「どこにでもウケる番組作りを地方から」のかけ声のもと、『暗闇三太』などアニメのミニ番組を制作し海外でも販売できたという。香月氏と同局の多面的で意欲的な活動には、キー局さえ学ばべき点が多いのではないだろうか。

■ 熊本放送 地域の花火大会をラジオとUstreamで生中継

続いて、熊本放送の田尻浩章氏がプレゼンに立った。田尻氏は、「放送」は「免許を持って公道を走る車道」に、「ネット」は「自由に歩いたり走ったりする車道の脇の歩道」にたとえ、「ポイントは車道と歩道の間」だという考え方をまず述べた。事例としては『山鹿灯籠祭り納涼花火大会』で、花火大会の様相をラジオとUstreamで生中継する画期的な取り組みを紹介。さらに自治体の情報をデータ放送で紹介する「デタポン」も解説した。

■ 広島テレビ「子育てムービーコンテスト」で動画投稿システム構築

広島テレビの益村泉月氏は、2007年に新規ビジネスの担当になり、地産全消を命題に与えられた。そこで益村氏は同局が取り組んでいた子育て支援イベントをもとにWEBサイトとして『子育て応援団』を立ち上げ、全国30局のテレビ局と連携した。そして子育てムービーコンテストを展開し、NTTドコモの協力を得た。この時開発した動画投稿システムは、報道向けに日テレ系列で利用されているという。さらに子どもの予防接種の情報発信もスタートし、データ放送で制作してネットワークで配信してもらった。これは民放連の受賞対象にもなった。益村氏の活動は、子育てを軸にネットワークをうまく巻き込んで広げており、ローカル局の手法として参考になりそうだ。

■ テレビ新広島

Facebook で視聴するライオン提供のドラマを制作

最後にテレビ新広島の香川正二郎氏が、同局の人気情報番組『ひろしま満点ママ』のSNSの取り組みをプレゼンした。同番組は月金ベルトの午前中の主婦向け番組で、ファンを大切にプロデューサーが4年前からFacebookページを立ち上げた。番組休止中も活動するなどファン数を大きく伸ばしている中、ライオン社とのコラボの話が進んだ。番組出演者と制作陣でホームドラマを制作し、放送ではなくFacebook上で視聴させる企画。ドラマの続きでライオンの研究者が登場し、歯磨きや選択のコツを紹介する仕組み。ライオンとしてはこの取り組みで広島県内の流通事業者に製品をプッシュできたという。

■ 現実直視しつつ突破口を見いだす強い意志

後半のディスカッションでは様々な議論が展開された。4人とも非常に前向きな姿勢であるのが印象的で、ローカルの現実、電波媒体の今後の難しさを直視しながらも、突破口を見出そうとする意志に頼もしさを感じた。どのパネリストも、地域メディアらしさを追求しながら同時に新しい取り組みや世界も視野に入れた果敢さを打ち出していた。ローカル局の今後は、こうした人材ひとりひとりに託されていることをあらためて知ったセッションだった。



セッション報告 7

「ケーブルプラットフォーム(コンテンツ関連)について」 ケーブルテレビの本格的な連携がはじまっている

INTER BEE CONNECTED 内での企画セッション、最終日20日の最初は「ケーブルプラットフォーム(コンテンツ関連)について」のタイトルで、ケーブルテレビの最新動向に関して、コンテンツを軸にした発表がなされた。ケーブルテレビ局は、個別の活動はそれなりに目に止まるものの業界全体としての取り組みはなかなか伝わってこない。だが非常に先進的かつ合理的な事例が発表されるなど、ケーブルテレビ界の最新動向が生き生きと伝わるセッションとなった。



■ 全国的な4K番組配信への取り組み

このセッションのモデレータは、須高ケーブルテレビの丸山康昭氏。日本ケーブルテレビ連盟のコンテンツ特別委員長でもある丸山氏からまず、委員会の取り組みの紹介がなされた。ケーブル局を横断したコンテンツの制作力、発信力の向上に取り組んでいる。「けーぶるにつぼん」のタイトルで毎年企画を募集し、採用された企画を全国で配信している。そこから4K制作への取り組みへも発展し、12月1日からスタートする「ケーブル4K」へとつながっていった。こうしたプラットフォーム的な取り組みで、ネットワークが形成され全国的な番組配信が成立しているのは興味深い動きだ。

■ 変革期を迎え、さまざまな取り組みをするケーブル業界

続いて、日本ケーブル連盟の山田協氏のプレゼンに移った。変革期を迎えたケーブル業界は、地域力を生かしたサービスの充実とネットワーク化を進めて業界力を強化することの両方が必要になると説明。MVNOなどの新サービスの充実や人材交流を図り、さらにプラットフォーム化のひとつの軸として、個人番号カードによるID連携の実証実験も紹介された。

■ 334局が利用する「じもテレ」

次に、ジュピターテレコムの高田精一氏にバトンタッチ。ケーブルプラットフォームの具体的な事例として、全国ケーブルテレビ流通システムAJC-CMSとその応用である「じもテレ」についてプレゼンが行われた。AJC-CMSは、ネットを使って全国のケーブル

テレビの番組を同時に配信、共有できるシステムだ。334局が利用中で、2012年度のスタート以降活発に利用され、直近6カ月間では毎月6,700番組がダウンロードされ流通しているという。まったく別の事業者であるケーブルテレビ局がこれだけ番組を共有できているのは画期的だ。このAJC-CMSにアップロードされた番組の中を、一般視聴者にネット上で公開しているのが「じもテレ」。WEB上で日本中のケーブルの番組が誰でも視聴でき、きわめて先進的な取り組みだと言える。

■ 「どローカル」で徹底的に地域の情報発信

この「じもテレ」を活用した事例を東京ケーブルネットワーク瀬間健司氏がプレゼンした。例えばeiga worldcupというアマチュア向けの映像コンテストと連携し、作品の発表の場として「じもテレ」が使われ、地域活性化に役立っているという。

最後に、再び久保田氏からコミュニティチャンネルのコンセプトを「どローカル」に据え、徹底的に地域の日々の情報や活動を伝えていく新方針を解説。その事例として、かながわケーブルの定点ライブカメラを利用できるアプリについてプレゼンがなされた。

ケーブルテレビは地上波ほどスポットが当たらず、インフラとしてだけ見られがちだが、コンテンツにも注力し、ネットもうまく活用することで合理的で斬新な仕組み作りにも取り組んでいる。そこからは、この革新期を地域と密着し愛されることで乗り切っていくという強く熱い意思が感じ取れた。今後のケーブルプラットフォームの動向に注目すべきだろう。



セッション報告 8

「多様な視聴計測から見えるテレビの新しい価値」 見えてきた今後の視聴計測の課題

INTER BEE CONNECTED、20日2つめのセッションではテレビの視聴計測をテーマに、ビデオリサーチの尾関光司氏、ニールセンジャパンの福徳俊弘氏、インテージの長崎貴裕氏が一堂に会した。放送業界では“世帯視聴率”以外の計測があまり取りあげられていないが、ここ数年で多様な手法が開発されており様々な試行錯誤が行われている。その最新の情報を三者それぞれ披露してくれた。

■さまざまな視聴計測が求められる時代に

このセッションのモデレータは、メディアコンサルタントの境治氏。まず最初に境氏から、テレビの視聴計測の課題が提示された。タイムシフト視聴の計測、ネット配信の計測、そしてテレビだけでなくメディア接触全体の計測などが、いま求められている。また、TVerの100万ダウンロードでネット配信の計測がさらに重要視されてきているなど、スポンサー企業の悩みが複雑化する中で、メディア接触全体の計測も課題として急浮上している状況が紹介された。

■最新計測手法の開発事例を紹介

このイントロダクションを受けて三人のパネリストからそれぞれショートプレゼンが行われた。まず尾関氏は、ビデオリサーチが機械式調査を開始してから録画機の登場やパソコンでの視聴など、テレビを取り巻く環境が多様に変化したことを踏まえ、デバイスシフト、タイムシフト、チャンネルシフト、プレイスシフトへの対応が必要だと述べた。そのうえで、タイムシフト視聴やTwitter指標など計測手法の開発事例を紹介。今後はサンプル数の拡大も含め、多様な視聴形態を大きくカバーしていくと説明した。

■米国で進むメディア接触の分散化

福徳氏からは、ニールセンが本国アメリカで取り組んでいる視聴計測についてプレゼンがなされた。メディア接触の分散化(フラグメンテーション)にどう対処するか、アメリカではここ数年間ずっと検討されてきた。米国ニールセンでは5万人を対象とするネットも含めた視聴計測のパネルを保持しているが、分散化があまりに多様でそれだけでは追いつけない。そこでFacebookと提携し、1億8000万人のユーザーデータを、自分たちのパネルと合わせることでトータルに計測可能な体制を作っているという。アメリカのネットワーク局はすでに放送もネットも同様の広告接触としてセールスしようとしており、こうした計測をビジネスに生かすはじめていそうだ。

■市場調査のノウハウで視聴と購買の関係性を調査

長崎氏からはインテージ社についてプレゼンがなされた。放送業界ではあまり知られていない同社だが、市場調査会社としては

日本1位で、50,000人の購買データを収集している。さらに、この購買データとメディア接触データを付け合わせることで、広告の効果も測定できる。i-SSPと呼ばれるシステムにより、メディアと購買に関わる多様な解析が可能になるという。テレビ視聴とWEBでの検索行動が購買にどう作用するかがわかる、ということだ。

■タイムシフト視聴とCMの関係性

その後のディスカッションではまず、テレビ視聴の計測についてタイムシフトを主に議論した。ビデオリサーチですでにデータを出してテレビ局などに提供しており、まだCMの取引に使われてはいない。福徳氏によればアメリカではすでにビジネスの指標として、3日後までのタイムシフトも含めてC3と呼ばれて使われている。録画で見るとCMを飛ばすと言われるが、尾関氏はイメージほど飛ばされてはいないと言う。これはインテージのデータも同様とのことで、ライバル社同士での意気投合も見られた。

■テレビ視聴とネットの関係性が今後の軸に

中盤では境氏が、前日の「米国放送界最新事情」のセッションで小池良次氏が見せた「番組のオムニマーケティング」のスライドを提示した。それを受けて福徳氏はこの考え方を支えるのがニールセンのトータルな視聴計測であることを解説した。さらに尾関氏は、トータルな計測という場合、番組の計測と広告の計測の2つを分けて考える必要があるとフォローした。

またテレビとネットを合わせた計測については、長崎氏はインテージとしてあるレベルでのデータは出せているが、パネルだけでは限界があるので全数データも取り込む必要があるとの課題を挙げた。これに対し尾関氏は、ビデオリサーチでも全数データの調査にもトライしているが、一方で会社の役割として求められているのが代表性なのでそこを大事にしていると述べた。このパネルと全数データをどう使い分け、またどう組み合わせる数値を出していくか、そして代表性をどう担保するかは、今後のメディア計測の議論の大きな軸になっていきそうだ。

このセッションでは視聴計測という非常にデリケートなテーマについて、競合関係にある三社のパネリストが集まったが、それぞれがオープンな姿勢で意見をぶつけ合い、熱い議論が展開された。これからの三社の取り組みにも注目が集まりそうだ。



セッション報告 9

「スポンサー企業が語る新たなテレビ広告手法」 テレビCMは効果が高いからこそ、細かな対応が求められる

INTER BEE CONNECTED内での企画セッション、すべてのプログラムの最後を飾ったのは、スポンサー企業によるパネルディスカッションだった。それぞれ企業としてのステージやポジションが違う3つの企業の宣伝担当者に集まってもらい、テレビ広告の新しい使い方やあらためて問われる価値について率直に語ってもらった。単純に枠を売り買いする中では見えないスポンサー企業の悩みや本音をじっくり聞くことができた。

このセッションのモデレータは雑誌「宣伝会議」編集長の谷口優氏。まずこのセッションの趣旨として、テレビ広告の新たな使い方や価値に参考になる事例をお持ちの3社の方に集まってもらい、企業規模もターゲットも全く違うそれぞれの考え方を披露していただくことを説明した。広告業界での知見が豊富な谷口氏ならではの、的を射た進行となった。



■100万回再生を目指したウェブ動画づくり NTTドコモ

まず、NTTドコモの深田大介氏がプレゼンテーション。まず同社のWEB戦略について、若年層へのアピールを目的に100万回再生を目標にWEB動画に取り組んでいると語った。中でも成功例は「3秒クッキング・爆速エビフライ」で、目標を大きく超えて1,500万回再生された。そして、その好評をもとに、さらなる拡散のために一回だけテレビCMとしてオンエアしたところ、他所区をはるかに上回って拡散され、あらためてテレビの広告メディアとしてのパワーを思い知ったそう。

■BtoBのテレビCM戦略 Sansan

続いて、名刺管理ソフトSansanの日比谷尚武氏がプレゼン、テレビCMを展開するまでの道のりを語った。通常、同社のようなBtoBのスタートアップ企業はテレビCMは必要ないと判断が常識だった。ところがある日、テレビ番組に社長が出演したところ、放送直後から問い合わせが殺到。しかもそれが一カ月続き十分な成果があった。それがきっかけで本格的にテレビCMを制作し放送を開始したという。例えば取引先が導入を検討する際、CMに出演する松重豊が好きだから決着されたなどの思わぬ影響も出た。広告メディアとしてのテレビのパワーを実感しているという。

■テレビCMの効果を活用 ライフネット生命

最後にライフネット生命の肥田康宏氏がプレゼン。ネットで申し込める生命保険として2006年にスタートし、2010年度からテレビCMをオンエアしはじめた。ネットで検索して加入してもらうために、やはりテレビCMは絶大な効果を発揮するという。まだまだ発展途上の会社なのでテレビCMの費用は大きく、一本一本の効果を丁寧に検証している。ターゲットが30代なので、世帯視聴率よりも個人視聴のデータをベースにCM枠を購入しているそうだ。

■CM審査基準がまちまち

後半のディスカッションでは、まずテレビCMの効果について谷口氏が質問。3社とも、その効果は認めていて、積極的に活用したいと述べる一方で、費用が大きい分緻密な効果測定をそれぞれ行いながら運用していることも語られた。

あえて不満な点を谷口氏が問いかけると、深田氏は局審査が厳しく基準も局によってまちまちであること、予算が減っている中で流し方に融通を利かせて欲しいことなどが挙げられた。日比谷氏は、現状関東のみのオンエアだが今後は地方でもCMを流したい。だが枠の買い付けを超えた細やかなサポートがあるとうれしいと述べた。肥田氏は、自分たちにふさわしい番組枠の提案を望んでおり、物足りなさを表明。そして「提案する皆さんもテレビをご覧いただきたい」とも主張した。肥田氏はCMを出稿する番組はすべて見るそうで、そうしないと社内になぜその枠で出稿したか説明できないからだという。提案する広告代理店や局の営業担当者が、売っている番組をあまり見えない傾向を鋭く指摘した。

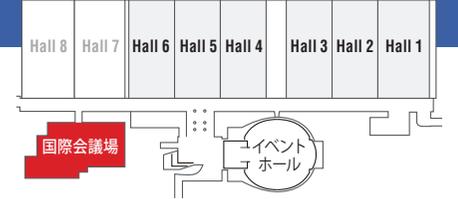
■効果測定への期待大

三者の話から、テレビCMの大きなリーチ力や、副次的な効果も感じることがよく伝わってきた。その一方で、大手であっても細かな効果測定を行っており、その繊細さへの対応が行き届いていないのではと感じられた。いわゆるどんぶり勘定の感覚から脱却し、データを活用してこうした要望に答えていく必要があるだろう。非常に具体的な学びの多いセッションであった。



INTER BEE FORUM

▶11月18日(水)～20日(金) ▶会場:国際会議場2階「国際会議室」



基調講演 1

4K・8Kロードマップ2015 今後の事業展望

我が国の放送政策の最新動向

10:20
▼
12:20

吉田 真人 氏
総務省 情報流通行政局 大臣官房審議官

8K放送の展望と、放送外への展開

浜田 泰人 氏
日本放送協会 理事・技師長

当社の4K放送取り組みについて

小牧 次郎 氏
スカパーJSAT株式会社
取締役 執行役員 専務 有料多チャンネル事業部門長
兼 放送事業本部長

「ひかりTV」における4K IPTVサービス展開について

永田 勝美 氏
株式会社 NTTぷらら 取締役 技術本部長

ケーブルテレビの4Kの取り組み

11.18 (水)
15:00
▼
17:00

田口 和博 氏
株式会社 ジュビターテレコム 上席執行役員 渉外担当役員

4K・8Kロードマップ/その先にあるものは何か?

元橋 圭哉 氏
一般社団法人 次世代放送推進フォーラム 事務局長

基調講演 2

民放公式テレビポータル『TVer』サービススタート～映像配信の今後を考える～

12:40
▼
14:20

モデレーター

奥 律哉 氏
株式会社 電通 電通総研
メディアイノベーションラボ 統括責任者
メディアイノベーション研究部 部長

高橋 秀明 氏
日本テレビ放送網株式会社
営業局営業戦略部 担当副部長

パネルリスト

愛宕 康志 氏
株式会社 テレビ朝日
総合ビジネス局 ビジネス戦略部 部長

高澤 宏昌 氏
株式会社 TBSテレビ
メディアビジネス局 ベイテレビ事業部長 代理

蛸川 新治郎 氏
株式会社 テレビ東京コミュニケーションズ
取締役

野村 和生 氏
株式会社 フジテレビジョン
コンテンツ事業局 コンテンツデザイン部 副部長

特別講演

マイナンバー時代を迎えたテレビ放送の次世代サービスを考える

11.18 (水)
15:00
▼
17:00

基調講演

マイナンバー制度と災害対応時のメディア活用

飯泉 嘉門 氏
徳島県知事

パネルディスカッション

マイナンバー時代を迎えたテレビ放送の次世代サービスを考える

モデレーター

須藤 修 氏
東京大学大学院 情報学環教授 博士 / 一般社団法人 次世代放送推進フォーラム 理事長

飯泉 嘉門 氏
徳島県知事

小笠原 陽一 氏
総務省 情報通信国際戦略局 情報通信政策課長

パネルリスト

桑原 知久 氏
スマートテレビ連携・地域防災等 対応システム普及高度化機構 事務局長

若井 真介 氏
日本テレビ放送網株式会社 インターネット事業局 局長 代理

吉田 元 氏
北海道テレビ放送株式会社 取締役 技術担当 兼 クロスメディアコミュニケーション担当

塩治 憲司 氏
一般社団法人 日本ケーブルテレビ連盟 ID連携活用WG 主席 / 株式会社 シーティーワイ 代表取締役社長

富山 大有 氏
日本マイクロソフト株式会社 デベロッパー エンジェリズム統括本部 テクニカルエバンジェリスト

招待講演 1 ▶会場:国際会議場1階 103会議室

ブラジルテレビ放送技術協会 特別フォーラム

11.18 (水)
13:00
▼
14:30

リオ2016:オリンピックの展望

ヴィートル・バイアー・ジニース 氏
駐日ブラジル大使館 科学技術エネルギー部 部長

ASO-ブラジルにおけるアナログTV終了

オリンピオ・ジョセ・フランコ 氏
ブラジルテレビ放送技術協会 会長

ラテンアメリカ放送業者:過去と未来

フェルナンド・ビッテンコート 氏
ブラジルテレビ放送技術協会 副会長

放送とブロードバンドにおける技術収斂とインタラクティブなデジタルTVシステムの相互運用性

マルセロ・スツッポ 氏
サンパウロ大学 教授

11.19 (木)
14:00
▼
17:00

招待講演 2

最新AzureとWindows10のPremium Video Delivery事情

クラウドでのMPEG-DASH/4K/DRMそして、その活用

10:20
▼
11:50

トニー・エマーソン 氏
マイクロソフト コーポレーション
ワールドワイドメディア業務ビジネス開発担当
マネージング ディレクター

富山 大有 氏
日本マイクロソフト株式会社
テクニカルエバンジェリスト

招待講演 3

クラウド活用によるメディアワークフローの進化

12:10
▼
13:40

バービック・ピアス 氏
アマゾン ウェブ サービス
デジタルメディアパートナー
エコシステム マネージャ

ウスマン・シャキール 氏
アマゾン ウェブ サービス
ソリューションアーキテクト

北迫 清訓 氏
アマゾン ウェブ サービス
ソリューションアーキテクト

映像シンポジウム

新たなコンテンツ制作の潮流

～ビッグデータの視覚化のインパクト～

14:00
▼
17:00

司会・進行 為ヶ谷 秀一 氏 女子美術大学 評議員 (前女子美術大学 大学院教授)
國重 静司 氏 株式会社 NHKアート 常務取締役

NICTにおけるソーシャルビッグデータ研究と可視化の例

細川 瑞彦 氏
国立情報学研究所 情報学 教授
ソート/応用情報センター 副所長
理学博士

データを紡いで社会につなぐ

渡邊 英徳 氏
首都大学東京
システムデザイン学部
准教授

放送番組におけるビッグデータ活用の現状と更なる進化の可能性

阿部 博史 氏
日本放送協会 報道局
選挙プロジェクト ディレクター

データ視覚化システムの開発と課題

鈴木 聡 氏
日本放送協会
放送技術局 制作技術センター
番組制作技術部
映像 CGIスーパーバイザー

招待講演 4

アメリカ大使館商務部 特別フォーラム

ICTと放送の融合、その先の展望

10:30
▼
11:20

挨拶 エリック・キッシュ 氏
アメリカ大使館 商務部 上席商務官

Youtube活用による、コンテンツ制作と流通拡大の可能性

デービッド・マクナルド 氏
グーグル株式会社
YouTube Spaces
アジア太平洋統括部長

ウェアラブルデバイスで変わる放送のカチ

藤井 慶一郎 氏
ビュージャックス コーポレーション
東京支店長

招待講演 5

放送とメディアの市場及び技術トレンド

11:40
▼
12:30

ピーター・ブルース 氏
IABM (国際放送機器工業会) APAC 理事

招待講演 6

次世代テレビ音声を生み出す: ATSC 3.0の音声

12:50
▼
13:40

スキップ・ピースィ 氏
NAB (全米放送事業者協会) ニュースメディアテクノロジーズ
シニアディレクター



招待講演 2

最新AzureとWindows10のPremium Video Delivery事情

クラウドでのMPEG-DASH/4K/DRMそして、その活用

10:20
▼
11:50

トニー・エマーソン 氏
マイクロソフト コーポレーション
ワールドワイドメディア業務ビジネス開発担当
マネージング ディレクター

富山 大有 氏
日本マイクロソフト株式会社
テクニカルエバンジェリスト

招待講演 3

クラウド活用によるメディアワークフローの進化

12:10
▼
13:40

バービック・ピアス 氏
アマゾン ウェブ サービス
デジタルメディアパートナー
エコシステム マネージャ

ウスマン・シャキール 氏
アマゾン ウェブ サービス
ソリューションアーキテクト

北迫 清訓 氏
アマゾン ウェブ サービス
ソリューションアーキテクト

映像シンポジウム

新たなコンテンツ制作の潮流

～ビッグデータの視覚化のインパクト～

14:00
▼
17:00

司会・進行 為ヶ谷 秀一 氏 女子美術大学 評議員 (前女子美術大学 大学院教授)
國重 静司 氏 株式会社 NHKアート 常務取締役

NICTにおけるソーシャルビッグデータ研究と可視化の例

細川 瑞彦 氏
国立情報学研究所 情報学 教授
ソート/応用情報センター 副所長
理学博士

データを紡いで社会につなぐ

渡邊 英徳 氏
首都大学東京
システムデザイン学部
准教授

放送番組におけるビッグデータ活用の現状と更なる進化の可能性

阿部 博史 氏
日本放送協会 報道局
選挙プロジェクト ディレクター

データ視覚化システムの開発と課題

鈴木 聡 氏
日本放送協会
放送技術局 制作技術センター
番組制作技術部
映像 CGIスーパーバイザー

招待講演 4

アメリカ大使館商務部 特別フォーラム

ICTと放送の融合、その先の展望

10:30
▼
11:20

挨拶 エリック・キッシュ 氏
アメリカ大使館 商務部 上席商務官

Youtube活用による、コンテンツ制作と流通拡大の可能性

デービッド・マクナルド 氏
グーグル株式会社
YouTube Spaces
アジア太平洋統括部長

ウェアラブルデバイスで変わる放送のカチ

藤井 慶一郎 氏
ビュージャックス コーポレーション
東京支店長

招待講演 5

放送とメディアの市場及び技術トレンド

11:40
▼
12:30

ピーター・ブルース 氏
IABM (国際放送機器工業会) APAC 理事

招待講演 6

次世代テレビ音声を生み出す: ATSC 3.0の音声

12:50
▼
13:40

スキップ・ピースィ 氏
NAB (全米放送事業者協会) ニュースメディアテクノロジーズ
シニアディレクター

音響シンポジウム

700MHz帯ワイヤレス移行の現状と今後

～2019年の全面周波数移行まで4年を前に～

11.20 (金)
14:00
▼
17:20

司会・進行 沢口 真生 氏 沢口高栄工房 サラウンド音響監修 代表 Fellow AES/ips
亀川 徹 氏 東京芸術大学 音楽学部 音楽環境創造科 教授

700MHz帯における周波数再編について

小林 伸司 氏
総務省 総合通信基盤局
電波部 移動通信課 課長補佐

周波数再編に伴う特定ラジオマイクの運用について

阿部 健彦 氏
株式会社 テレビ朝日 技術局付
(デパートビル5階 制作センター 5階)

特定ラジオマイクの周波数移行後に求められること

甲田 乃次 氏
一般社団法人 音響技術者協会
事務局 技術委員長

アメリカ合衆国における無線マイクロフォンスペクトル政策の変化

マーク・ブルナー 氏
シユア株式会社
シニアディレクター

制作現場におけるPMSE(ワイヤレスマイク)安全運用のための長期的な周波数割り当て

～EUにおけるワイヤレスマイク周波数政策 - 歴史&現在の状況

フォルカー・シュミット 氏
ゼンハイザーエレクトロニクス社
グローバルカスタマーデベロップメント&アプリケーションエンジニアリング
システムソリューションチャネル ディレクター

INTER BEE TUTORIAL SESSION 有料

▶11月19日(木)・20日(金)
▶会場:国際会議場1階 101会議室

受講料 1セッション:2,000円(消費税込) 2セッション割引料金:3,000円(消費税込)

音響チュートリアルセッション

11.19 (木)
13:00
▼
16:30

セッションA 失敗しない、新周波数帯ワイヤレスマイクの管理と運用

小諸 浩和 氏
セカストテクノロジー株式会社
ワイヤレスマネージメントD.V.

水野 政夫 氏
株式会社 ソニックシステムズ
代表取締役

セッションB 本当は教えたくない!カメラマン、ディレクターのための音声処理手法～その②

15:00
▼
16:30

染谷 和孝 氏
有限会社 ビーブレンダー 青山スタジオ
サウンドデザイナー / リレコーディングミキサー

映像チュートリアルセッション

11.20 (金)
13:00
▼
16:30

セッションC 「Ethernet技術者がデジタル映像をIPで流したら」基礎編

セッションD 「Ethernet技術者がデジタル映像をIPで流したら」応用編

土井 猛 氏
株式会社 NTTぷらら 技術本部 ネットワーク管理部 プラットフォーム担当

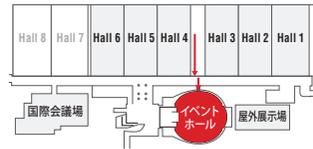


INTER BEE EXPERIENCE

▶11月18日(水)~20日(金)

ラインアレイスピーカー体験デモ Line Array Speakers Demo & Presentation

▶後援：一般社団法人日本舞台音響家協会、日本舞台音響事業協同組合
▶メディアパートナー： Sound & Recording PROSOUND Stage Sound Journal SOUND.
▶会場：イベントホール



国内最大！実感と感動をスケールアップ

音響各社の参加による吊り下げラインアレイスピーカーの体験デモンストレーションを、昨年に引き続き実施しました。参加ブランドは昨年を上回る13社。また今年も、各社ごとにスピーカーの吊り下げ作業から大音量によるデモンストレーション、デモ終了後の降ろし作業まで、トータルでのプレゼンテーションを行い、各社製品の特長や個性を実感していただきました。



参加企業/製品ブランド

A	NEXO	STM Series 株式会社ヤマハミュージックジャパン
B	KH8	ライブギア株式会社
C	CODA	Ti RAY/Ti LOW ヒビノインターサウンド株式会社
D	KARA	ベストックオーディオ株式会社
E	LEOPARD	株式会社エイ・ディー・エル
F	AEAW	ADAPTive Systems Anya 音響特機株式会社
G	BOSE	RoomMatch ボーズ株式会社
H	TOA	compact array speaker HX-7 TOA 株式会社
I	MLA	MLA 株式会社マーチンオーディオジャパン
J	d&b audiotechnik	V-Series ディーアンドビー・オーディオテクニク・ジャパン株式会社
K	VTX Series	ヒビノ株式会社
L	al-8	株式会社イースタンサウンドファクトリー
M	RCF	TT+Series 株式会社エレクトリ

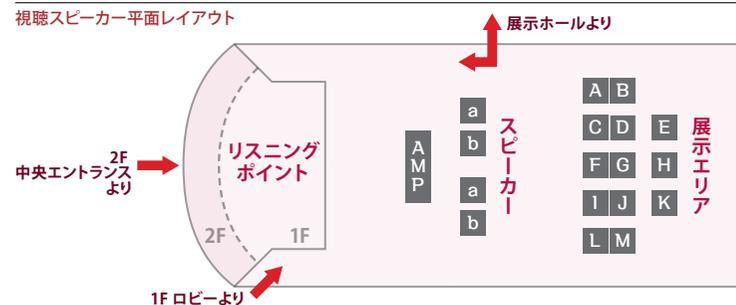
デモスケジュール

各社ごとにスピーカーの吊り下げ作業からデモンストレーション、デモ終了後の降ろし作業までトータルでのプレゼンテーションを行いました。

	11.18(水)	11.19(木)	11.20(金)
10:30 ▼ 11:00	NEXO (株)ヤマハミュージックジャパン	d&b audiotechnik ディーアンドビー・オーディオテクニク(株)	AEAW 音響特機(株)
11:30 ▼ 12:00	KARA ライブギア(株)	JBL ヒビノ(株)	BOSE ボーズ(株)
12:30 ▼ 13:00	CODA ヒビノインターサウンド(株)	AUE audiotechnik (株)イースタンサウンドファクトリー	TOA TOA(株)
13:30 ▼ 14:00	ベストックオーディオ(株)	RCF (株)エレクトリ	MLA (株)マーチンオーディオジャパン
14:30 ▼ 15:00	Meyer Sound (株)エイディーエル	NEXO (株)ヤマハミュージックジャパン	d&b audiotechnik ディーアンドビー・オーディオテクニク(株)
15:30 ▼ 16:00	AEAW 音響特機(株)	KARA ライブギア株式会社	JBL ヒビノ(株)
16:30 ▼ 17:00	BOSE ボーズ(株)	CODA ヒビノインターサウンド(株)	AUE audiotechnik (株)イースタンサウンドファクトリー
17:30 ▼ 18:00	TOA TOA(株)	ベストックオーディオ(株)	RCF (株)エレクトリ
18:30 ▼ 19:00	MLA (株)マーチンオーディオジャパン	Meyer Sound (株)エイディーエル	

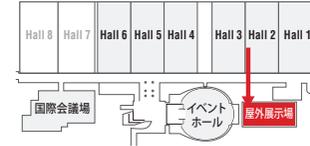
音響機材協力：株式会社オーディオブレインズ
※イベントホールは時間を延長して開催しました。(18日・19日19:30閉場、20日18:30閉場)

※各製品の詳細については、INTER BEE ONLINEよりシステム構成図がダウンロードできます。
<http://www.inter-bee.com/ja/about/conference/experience.html>



ドローン空撮デモ Drone Aerial Photography Demo

▶屋外大型LEDディスプレイ協賛： CREATELED
▶会場：屋外展示場



必見！プロが納得する新発見デモ

いまや空撮映像の重要機材となったドローンを、実際の空撮現場に近い屋外環境での撮影フライトを行い、その性能や活用性をデモンストレーションしました。プロ用最新製品のご紹介と共に、空撮の専門オペレーターによる安全かつ高度な飛行操作・撮影操作により、ドローン空撮のこれまで以上の可能性を、撮影映像をライブで見ながら発見していただきました。

参加企業/デモ製品

enRoute

株式会社エンルート
PG700(有線給電型UAV)
PG390(カード付小型UAV)+UGV(自走型ロボット)
その他、大型機を予定



CIRCLE

株式会社サークル
Cinester8&Movi5



dji

DJI JAPAN
Phantom3
Inspire1
S900/S1000クラス



rikei

株式会社 理經
ドローン音響検知システム
Drone Shield



デモスケジュール

※ のデモは、雨天のため中止になりました。

	11:00▶11:20	11:40▶12:00	12:20▶12:40	14:00▶14:20	14:40▶15:00	15:20▶15:40
11.18(水)	(株)エンルート	(株)サークル	DJI JAPAN	(株)エンルート	(株)サークル	DJI JAPAN
11.19(木)	(株)サークル	DJI JAPAN	(株)エンルート	(株)サークル	DJI JAPAN	(株)エンルート
11.20(金)	DJI JAPAN	(株)エンルート	(株)サークル	DJI JAPAN	(株)エンルート	(株)サークル

LECT 2015 Live Entertainment & Contents Technology Conference

▶日時：11月18日(水)
▶会場：国際会議場2階
コンベンションホールA



日本発・未来！新世代エンターテインメントへの挑戦

映像・音響・照明・パフォーマンスを融合した「ライブエンターテインメント」や、VR・AR・インタラクティブなど新しい体験を提供する「コンテンツテクノロジー」をメディア産業の未来を担う重要なカテゴリーとして捉え、それら《テクノロジーを得たクリエイティブパワー》を、プレゼンテーションと展示で次世代を未来へ発信しました。

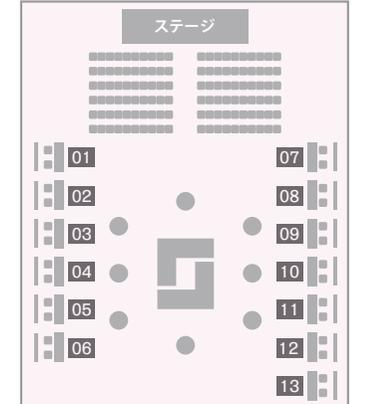
ランチブレイク/ハッピーアワー
参加無料

ステージプログラム

10:30 ▼ 11:10	主催者企画ステージ① 先進テクノロジーとアートの融合が生み出す、 ライブエンターテインメントの可能性 真鍋 大度 氏 Rhizomatiks Research 石橋 素氏 Rhizomatiks Research
11:20 ▼ 11:35	プレゼンテーション(1) 株式会社パップファールネス
11:45 ▼ 12:00	プレゼンテーション(2) 曾根 光輝 (TNYU inc.)
12:15 ▼ 12:55	ランチブレイク
13:05 ▼ 13:20	プレゼンテーション(3) 東京電機大学
13:30 ▼ 13:45	プレゼンテーション(4) 株式会社QDレーザ
13:55 ▼ 14:10	プレゼンテーション(5) 株式会社ユニモト
14:20 ▼ 14:35	プレゼンテーション(6) 株式会社HOME360

14:50 ▼ 15:30	主催者企画ステージ② VR/ARが切り拓く、 疑似体験型コンテンツの未来 モデレーター 西村 真里子 氏 株式会社HEART CATCH CEO & Co Founder パネラー 市原 えつこ 氏 泉 聡一 氏 野口 克也 氏 アーティスト、インタラクティブデザイナー 株式会社カヤック 株式会社ヘキサメディア
15:40 ▼ 15:55	プレゼンテーション(7) 有限会社プロトタイプ
16:05 ▼ 16:20	プレゼンテーション(8) カティンチェ株式会社
16:30 ▼ 16:45	プレゼンテーション(9) 株式会社ネクスト
16:55 ▼ 17:10	プレゼンテーション(10) VRソリューションプロジェクト VRECL
17:25 ▼ 18:25	ハッピーアワー

会場レイアウト



- 出展者
- 01 Rhizomatiks Research
 - 02 株式会社パップファールネス
 - 03 曾根 光輝 (TNYU inc.)
 - 04 株式会社QDレーザ
 - 05 株式会社ユニモト
 - 06 株式会社HOME360
 - 07 有限会社プロトタイプ
 - 08 カティンチェ株式会社
 - 09 株式会社ネクスト
 - 10 VRソリューションプロジェクト VRECL
 - 11 CGコミュニケーションズ株式会社
 - 12 株式会社ビーバンドットコム
 - 13 株式会社アイシル



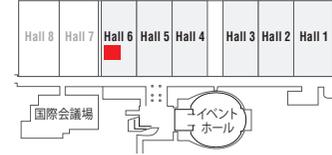
INTER BEE CONNECTED

企画セッション

▶会場：ホール6 Inter BEE CONNECTED内オープンシアター

◆放送はどう変わり、どのように進化するのかを発信

企画セッションでは、番組のネット配信戦略や放送通信連携、視聴スタイルや視聴率の変化から探る新たなビジネスチャンスや広告・マーケティング戦略、ローカル局の取り組みなど、2020年をひとつのターゲット年として、それに向けたテレビ放送の変化と進化を発信しました。



視聴スタイルの変化とビジネスチャンス

録画視聴やネットを介したVOD視聴など、テレビの視聴スタイルの多様化に応じた新しい放送へ向けての試みが新たなビジネスとして動き始めています。その実例と今後の可能性について紹介しました。

モデレータ

10:30
12:00

遠藤 諭氏
株式会社角川アスキー総合研究所
取締役 主席研究員

岸本 拓磨氏
朝日放送株式会社
コンテンツ事業部

安江 圭氏
株式会社TBSテレビ
メディアビジネス局
メディアプロデューサー

ターニャ氏
日本テレビ放送網株式会社
編成局 総合コンテンツ部

映像表現としての4Kの可能性と課題 ～制作・プラットフォームの先駆者たちに学ぶ～

4Kテレビ番組の制作環境は大幅に改善が進み、4K制作に力を入れる放送局、制作会社が増えてきました。現場の制作担当者たちに、4Kによる新しい映像表現の可能性や課題などについて語り合いました。

モデレータ

13:00
15:00

元橋 圭哉氏
一般社団法人次世代放送推進フォーラム
事務局長

濱中 貴満氏
北海道テレビ放送株式会社
報道部プロデューサー

木下 敦子氏
石川テレビ放送株式会社
制作部プロデューサー

丸山 康照氏
須高ケーブルテレビ株式会社
代表取締役社長

堀川 健二氏
株式会社いしましんCP
常務取締役

佐藤 久道氏
株式会社NTTぷらら
コンテンツ戦略部
戦略企画担当/編成担当 担当部長

軽部 岳大氏
スカパーJSAT株式会社
放送事業本部 チャンネル運営部
アシスタントマネージャー

キー局の動画配信(オンデマンド)

昨年も絶大な注目を浴びた地上波キー局による動画配信事業の最新動向紹介のセッションが今年も開催されました。まさに激動の1年を経てどのような進化を遂げたか、より競争が激化するとされる今後の戦略について聞きました。

モデレータ

15:30
17:30

江口 靖二氏
合同会社江口靖二事務所 代表
デジタルメディアコンサルタント

奥律哉氏
株式会社電通 電通総研
メディアイノベーションラボ 統括責任者
メディアイノベーション研究部 部長

太田 正仁氏
日本テレビ放送網株式会社
インターネット事業部 担当部長

高澤 宏昌氏
株式会社TBSテレビ
メディアビジネス局 ベイテレビ事業部長
TBSメディア情報センター
TBSメディア情報センター
デジタルマーケティング部長

下川 猛氏
株式会社フジテレビジョン
コンテンツ事業部
コンテンツデザイン部 兼
編成局 番組制作センター
デジタルマーケティング部長

キー局の動画配信(オンデマンド)

昨年も絶大な注目を浴びた地上波キー局による動画配信事業の最新動向紹介のセッションが今年も開催されました。まさに激動の1年を経てどのような進化を遂げたか、より競争が激化するとされる今後の戦略について聞きました。

モデレータ

15:30
17:30

江口 靖二氏
合同会社江口靖二事務所 代表
デジタルメディアコンサルタント

奥律哉氏
株式会社電通 電通総研
メディアイノベーションラボ 統括責任者
メディアイノベーション研究部 部長

太田 正仁氏
日本テレビ放送網株式会社
インターネット事業部 担当部長

高澤 宏昌氏
株式会社TBSテレビ
メディアビジネス局 ベイテレビ事業部長
TBSメディア情報センター
TBSメディア情報センター
デジタルマーケティング部長

下川 猛氏
株式会社フジテレビジョン
コンテンツ事業部
コンテンツデザイン部 兼
編成局 番組制作センター
デジタルマーケティング部長

米国放送界最新事情: 大手TV ネットワークのOTT戦略とその波紋

2015年、米国のネット系放送(以下OTT放送)は大きなターニングポイントに入っている。従来のオンデマンド系配信から地上波やケーブルチャンネルのサイマル放送へとサービスが拡大している一方、若者は従来の地上波放送やCATVからショートフォーマットのネット専門チャンネルへと移行している。本セミナーでは米大手地上局の対応を中心に、急速に変化するOTT環境を分析しながら、日本の地上波放送局の将来を占めました。

講演

10:30
12:00

小池 良次氏
在米ITジャーナリスト

江口 靖二氏
合同会社江口靖二事務所 代表
デジタルメディアコンサルタント

放送同時再送信への取り組み

ネット配信も含めた「同時再送信」は、視聴者により高い利便性を提供するための新たな展開として具体化が進んでいます。ルールを守り、良好な関係性をキープしながら、新しい方向をめざす課題について聞きました。

モデレータ

13:00
15:00

塚本 幹夫氏
株式会社フジテレビジョン
主席渉外役

近藤 宏氏
日本放送協会
メディア企画室長

手塚 久氏
株式会社フジテレビジョン
総合開発局 開発担当部長

前嶋 宏氏
東京外口ビルディング株式会社
執行役員 事業局長

放送通信連携で新境地を拓く ローカル放送局の取り組み

放送とネットの関わりが深まる中、地域の情報発信の要となるローカル放送局もまた、ネットを活用した新たなサービスで新境地を開拓しています。各地域のローカル放送局に新たな試みについて紹介しました。

モデレータ

15:30
17:00

鈴木 祐司氏
次世代メディア研究所
代表

香月 和宏氏
九州朝日放送株式会社
コンテンツ事業部 部長

田尻 浩章氏
株式会社熊本放送
編成局 編成部

香川 正二郎氏
株式会社テレビ新広島
業務推進局長 兼
コンテンツ営業開発部長

益村 泉月珠氏
広島テレビ放送株式会社
編成局 コンテンツビジネス部
クロスメディアプロデューサー

出展者一覧

6704 アマゾン ウェブ サービス ジャパン(株)	6708 (株)HAROiD
6703 伊藤忠ケーブルシステム(株)	6709 (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ
6743 (株)オルカプロダクション	6706 (株)フジテレビジョン
6710 (株)TBSテレビ	6705 (株)マジックハット
6701 (株)テレビ朝日	6711 マルチスクリーン型放送研究会
6707 日本テレビ放送網(株)	6718 民放公式テレビポータル「TVer」
6702 (株)ネクストスケープ	

ケーブル・プラットフォーム(コンテンツ関連)について

日本ケーブルテレビ連盟の協力により、ケーブル業界の関係者を招いたセッションを実施しました。4K専門チャンネルや、コンテンツの新たな事業展開など、ケーブルテレビ局のさまざまな取り組みを紹介しました。

モデレータ

10:30
12:00

丸山 康照氏
一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟
コンテンツ特別委員会 委員長
須高ケーブルテレビ株式会社 代表取締役社長

山田 協氏
一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟
審議役

久保田 精一氏
株式会社シユビスターテレコム
地域メディア本部
コミュニティチャンネル部 部長

瀬間 健司氏
東京ケーブルネットワーク株式会社
制作部 次長

多様な視聴計測から見えるテレビの新しい価値

視聴デバイスの多様化にともなう視聴形態の変化や、広告手法の多様化により、視聴計測は大きな変革を迫られています。国内外の放送業界へ向けデータを提供する各社に参加いただき、最新状況を報告しました。

モデレータ

13:00
15:00

境 治氏
メディアコンサルタント

長崎 貴裕氏
株式会社インテージ
執行役員 MCA事業部長

福徳 俊弘氏
ニールセン ジャパン
CEO

尾関 光司氏
株式会社ビデオリサーチ
取締役 営業局長

スポンサー企業が語る新たなテレビ広告手法

映像コンテンツのモバイル視聴が拡大し、映像を提供する手法も多様になる中、テレビCMの効果も改めて注目されています。テレビCMにおける新しい可能性を引き出すマーケティング活用について、事例を紹介しました。

モデレータ

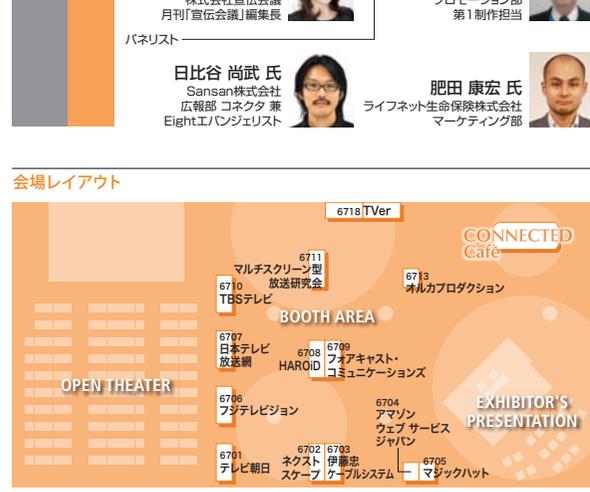
15:30
17:00

谷口 優氏
株式会社宣伝会議
月刊「宣伝会議」編集長

深田 大介氏
株式会社NTTドコモ
プロモーション部
第1制作担当

日比谷 尚武氏
Sansan株式会社
広報部 コネクタ 兼
Eightエノビエリスト

肥田 康宏氏
ライフネット生命保険株式会社
マーケティング部



出展者プレゼンテーション

▶会場：ホール6 Inter BEE CONNECTED内プレゼンコーナー

◆広がるメディアコミュニケーションの可能性を発信

放送をはじめ、Webやアプリ、デジタルコンテンツ、クラウド、サイネージなど、映像とICTの最新動向とメディアコミュニケーションの進化を幅広く捉え、新たなビジネスにつながる可能性を発信。日々進化するメディアとネットワークビジネスの最新情報をプレゼンテーションする場として、幅広いメディア関係者とコネクしました。

11.20 (水)

11:20 クラウド・メディアワークフロー アマゾン ウェブ サービス ジャパン(株)

11:35 放送とスマートフォンの映像再生タイミング同期技術「msync-CAM(エムシンク-カム)」について (株)テレビ朝日

11:55 SNSを利用した最新デジタルサイネージ (株)マジックハット

12:00 ライブストリームへの広告挿入による収益化支援とOTT配信における最新のトレンド情報のご紹介 伊藤忠ケーブルシステム(株)

12:15 Microsoft Azureを活用した最新サービス (株)ネクストスケープ

12:40 モバイルファースト、マルチデバイス、DRM、MPEG-DASH: 映像配信システム「Unified Streaming Platform™ (USP)」のご紹介 (株)オルカプロダクション

12:55 テレビと連携するロボットと、その未来 日本テレビ放送網(株)

13:20 こんなに簡単! SyncCastのコンテンツ作成・運用ツール マルチスクリーン型放送研究会

13:35 テレビをアップグレードする HAROiDのプロダクトその1 (株)HAROiD

13:50 ライブストリームへの広告挿入による収益化支援とOTT配信における最新のトレンド情報のご紹介 伊藤忠ケーブルシステム(株)

14:00 クラウドを活用した瞬間的な集中アクセスにも耐えうる大規模データ受付システム (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ

14:15

14:30

14:45

14:55

15:00

15:15

15:20

15:35

15:40

15:55

16:00

16:15

11.19 (木)

11:20 Microsoft Azure を活用した最新サービス (株)ネクストスケープ

11:35 モバイルファースト、マルチデバイス、DRM、MPEG-DASH: 映像配信システム「Unified Streaming Platform™ (USP)」のご紹介 (株)オルカプロダクション

11:55 広がるコンテンツの選択版。放送も配信も 日本テレビ放送網(株)

12:00 こんなに簡単! SyncCastのコンテンツ作成・運用ツール マルチスクリーン型放送研究会

12:15 テレビをアップグレードする HAROiDのプロダクトその2 (株)HAROiD

12:30 ライブストリームへの広告挿入による収益化支援とOTT配信における最新のトレンド情報のご紹介 伊藤忠ケーブルシステム(株)

12:45 クラウドを活用した瞬間的な集中アクセスにも耐えうる大規模データ受付システム (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ

12:55 「詳しくはこのビデオをご覧ください。」「どの部分??」そんな不毛な会話を無くして、ビジネスの効率を高めましょう。 (株)オルカプロダクション

13:00 民放公式テレビポータル TVer とは? 民放公式テレビポータル「TVer」

13:15 AWS WAFとCloudFrontで構成する配信技術 アマゾン ウェブ サービス ジャパン(株)

13:30 SNSを利用した最新デジタルサイネージ (株)マジックハット

13:45

13:55

14:00

14:15

14:30

14:45

14:55

15:00

15:15

15:20

15:35

15:40

15:55

16:00

16:15

16:30

16:45

16:55

11.20 (金)

11:00 こんなに簡単! SyncCastのコンテンツ作成・運用ツール マルチスクリーン型放送研究会

11:15 テレビをアップグレードする HAROiDのプロダクトその3 (株)HAROiD

11:30 ライブストリームへの広告挿入による収益化支援とOTT配信における最新のトレンド情報のご紹介 伊藤忠ケーブルシステム(株)

11:45 クラウドを活用した瞬間的な集中アクセスにも耐えうる大規模データ受付システム (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ

12:00 民放公式テレビポータル TVer とは? 民放公式テレビポータル「TVer」

12:15 クラウド・メディアワークフロー アマゾン ウェブ サービス ジャパン(株)

12:30 放送とスマートフォンの映像再生タイミング同期技術「msync-CAM(エムシンク-カム)」について (株)テレビ朝日

12:45 SNSを利用した最新デジタルサイネージ (株)マジックハット

12:55 クラウドを活用した瞬間的な集中アクセスにも耐えうる大規模データ受付システム (株)フォアキャスト・コミュニケーションズ

13:10 「詳しくはこのビデオをご覧ください。」「どの部分??」そんな不毛な会話を無くして、ビジネスの効率を高めましょう。 (株)オルカプロダクション

13:25 Microsoft Azure を活用した最新サービス (株)ネクストスケープ

13:40 モバイルファースト、マルチデバイス、DRM、MPEG-DASH: 映像配信システム「Unified Streaming Platform™ (USP)」のご紹介 (株)オルカプロダクション

13:55 日本テレビのセカンドスクリーン事例 日本テレビ放送網(株)

14:10

14:25

14:40

14:55

15:10

15:25

15:40

15:55

16:10

16:25

16:40

16:55

INTER BEE ASIA CONTENTS FORUM

Asia Contents Forum 4K Theater

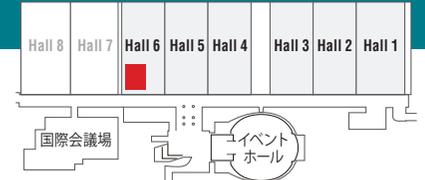
▶会場: 展示ホール6 ▶協賛:

Asia Contents Forum 4K Theaterへようこそ!!

日本から、そしてアジアから世界に向けてのコンテンツ映像制作の最新情報をキャッチアップ。今年は「iPhoneの映像表現」から「4Dシアターの映像体験」まで、ますます多様化する映像制作・映像視聴の最新情報をお届けしました。昨年好評いただきましたJPPA Dayも開催いたしました。日本の最新ポストプロ業界の動向をキャッチしてください。またメディア・コンテンツ業界で活躍が注目される女性クリエイターたちによる「アジアのWoman Power」は要チェック！ Asia Contents Forum恒例のDigiCon6セッションでは過去10年の作品を振り返り、アジアのクリエイティビティがいかに成長したかを見ていきました。そして何と云っても今年の目玉は、この夏の映画シーンを盛り上げた「進撃の巨人」の樋口監督、佐藤VFXスーパーバイザーによるスーパートークセッションでした。日本を代表する両クリエイターのトークからは目が離せません。プロダクションブースおよび業界の人材交流を目的とした Production & Creator's Nightも引き続き今年も開催いたしました。映像業界・コンテンツ業界のますますの活性化の一翼を担えればと思っております。



Inter BEE Asia Contents Forum ディレクター 結城 崇史 氏



10:30 ▼ 11:00	Ultra MAGIC! Ultra COLOR! Ultra HD! - Adobe Creative Cloud映像制作ツール次期アップデート	古田 正剛 氏 アドビ システムズ 株式会社 マーケティング本部 ビデオ製品担当
11:30 ▼ 12:30	iPhoneが可能にする映像表現	川本 康 氏 コマーシャルフォト 統括編集長
11:30 ▼ 12:30	「Adobe & Intel presents」 クリエイティブ ユーザー セッション	富田 兼次 氏 株式会社トリプルオー
13:00 ▼ 13:30	ブランドドフィルム 〜ブランドとしてのショートフィルム〜	川本 康 氏 コマーシャルフォト 統括編集長
14:00 ▼ 15:00	アジア最大のデジタル・コンテンツ・アワード 「DigiCon6」から見たアジア10年の 映像クリエイターの成長を振り返る	山田 亜樹 氏 株式会社TBSテレビ DigiCon6 ASIA事務局 フェスティバルディレクター
15:00 ▼ 16:00	オー・エル・エム・デジタルにおける After Effectsの活用とプラグイン開発	四倉 達夫 氏 株式会社オー・エル・エム・デジタル 研究開発部門 R&Dスタッフ

11:30 ▼ 11:55	JPPA Day 一般社団法人日本ポストプロダクション協会 正会員企業によるプレゼンテーション	レスパビジョン株式会社
12:00 ▼ 12:25	効率のよいワークフローへの取り組みの紹介	株式会社キュー・テック
12:30 ▼ 12:55	UltraHD Solutions	株式会社東京サウンド・プロダクション
13:00 ▼ 13:25	奉納劇『降臨』の4K撮影から仕上げまで	株式会社IMAGICA
13:30 ▼ 13:55	HDR映像の魅力とIMAGICAの評価画像	株式会社日テレ・テクニカル・リソースズ
14:00 ▼ 14:25	4K撮影とDIT	株式会社TYOテクニカルランチ
14:30 ▼ 14:55	Live編集システムの提案	株式会社レイ
15:00 ▼ 15:25	4KHFR&HDR『POOLSIDE MONSTER』 〜クリエイティブフレームレートの編集ワークフロー〜	株式会社レイ
15:30 ▼ 15:55	立体音響で市場を切り開く -3D AUDIOへの当社の取り組み-	株式会社ポニーキャニオンエンタープライズ
16:00 ▼ 17:15	4K映像制作ソリューション	パナソニック映像株式会社
17:30 ▼ 19:00	JPPA AWARDS 2015受賞者によるセッション 映像技術部門 VFX部門 ゴールド賞受賞作品 CITIZEN White Awakening テーマ「生物と静物の表現。実写とCGIによるVFX制作手法。」 音響技術部門 グランプリ受賞作品 VP・PV・Web関連その他部門 ゴールド賞受賞作品 Grand Seiko 「想いを刻む」 テーマ「私の音へのアプローチ」	森田 輝 氏 株式会社デジタル・ガーデン 三神 健太 氏 株式会社デジタルエッグ

Production & Creator's Night

11.19(木) 17:30 ▶ 19:00

幕張メッセ 展示ホール 6 Asia Contents Forum 内

映像機器のみならず、最新の映像作品そのものにも親しんでいただくために、日本を代表するCG・VFXプロダクションの首脳と、デジタルCG・VFXクリエイターとの交流パーティProduction & Creator's Nightを開催しました。

10:30 ▼ 11:00	Ultra MAGIC! Ultra COLOR! Ultra HD! - Adobe Creative Cloud 映像制作ツール次期アップデート	古田 正剛 氏 アドビ システムズ 株式会社 マーケティング本部 ビデオ製品担当
11:20 (金)	海外ビジネス最前線	和野 のり子 氏 株式会社東証送ホールディングス 次世代ビジネス企画課 兼 メディア戦略室「i-cam」担当部長 / 国際共同制作プロデューサー
11:30 ▼ 12:30	「Adobe & Intel presents」 クリエイティブ ユーザー セッション	富田 兼次 氏 株式会社トリプルオー
13:00 ▼ 13:30	海外ビジネス最前線	藤本 鈴子 氏 日本テレビ放送網株式会社 海外ビジネス推進室 海外事業部長

14:00 ▼ 15:00	New Entertainment Experience 4Dシアターが届ける新しい映像体験	チェ・ヨンスン 氏 CJ 4DPLEX 4DX Studio クリエイティブディレクター
15:00 ▼ 16:00	Asia Contents Forum ジャパン・クリエイティブ・スーパーセッション 『進撃の巨人』を顕現させたVFXの全貌	樋口 真嗣 氏 映画監督
16:30 ▼ 17:00	オー・エル・エム・デジタルにおける After Effectsの活用とプラグイン開発	前島 謙宣 氏 株式会社オー・エル・エム・デジタル 研究開発部門 R&Dスタッフ

ロケ弁グランプリ

ロケ弁は映像制作やコンサート、各種イベントなどで食を提供し、現場の活力を引き出すメディア産業の陰の主役です。新しくお気に入りに加えたいロケ弁を、ぜひとも発見してください。

▶会場: 幕張メッセ 展示ホール6 ▶協力: ロケーションジャパン/ロケなび!

食べて納得! ロケ弁コンテストグランプリ受賞店が本格参入!! 塩麹弁当 かもし堂	朝食・夜食の対応も問題なし! 数々の制作者を虜にさせてきたお弁当が遂に解禁!! ドルフィン
初の栄光6冠達成! 世界モンドセレクション最高金賞受賞! 主菜・副菜すべて手作り! お米は、新潟県産コシヒカリ! 新潟本舗 ふるさと屋	えび寿屋の「鶏めし」は、まさにロケ向き! おにぎり一つで、ご飯もおかずも存分に味わえる! 日本橋浜町えび寿屋
冷めても美味しいがっつりカワ飯。 見た目のオシャレ感・味・ボリューム三拍子揃ったお弁当。 Bent-Bent	焼肉通の間で評判の「焼肉ふたご」。秘伝のタレと冷めても柔らかく美味しく食べられる焼肉弁当をお届け! 大阪焼肉・ホルモン ふたごデリ
千葉、茨城県の素材を手作りで、 制作スタッフのお腹を満たします! ロケ弁当 Hungry	ロケ弁歴15年以上のシェフが作る 「外さない」と評判の料理! ラジュール東京
制作者のために作られたお弁当といっても 過言じゃない!! 本場韓国仕込みの焼肉弁当。 焼肉屋さんのお弁当	世界を旅する弁当屋さん。 各国の美味しいをお届けします! ソライロKitchen

ロケ弁人気投票結果 ロケ弁グランプリでは、実際に食べて頂いた方からの「美味しい」という声を形にした、「ロケ弁人気投票」を開催しました。

グランプリ 大阪焼肉・ホルモン ふたごデリ (961票) 準グランプリ ラジュール東京 (455票) 第3位 焼肉屋さんのお弁当 (419票)

同時開催

コンファレンススポンサーセッション
Conference Sponsored Session

▶会場:国際会議場1階「103」

11.18 (水) 15:15 - 16:45 **Dalet アカデミー** 聴講無料
 ~The state of MXF around the world
 presented by Dalet & VILLAGE island
 ブルース・デヴリン 氏 DALET

11.18 (水) 13:00 - 14:30 **セミナーとブースツアーで深める 4K・8Kを見通す「映像コンテンツ データ保管とアーカイブ」の展望** 有料
 ~EMCジャパン、ソニー、日本IBM、パイオニア、パナソニック、ビデオ・テック、朋栄の7社が勢揃い~
 ▶主催:「映像コンテンツ データ保管とアーカイブ」セミナー・ブースツアー開催実行委員会

受講料 セミナー+ブースツアー参加 3,000円(消費税込)
 セミナーのみ参加 2,000円(消費税込)
 ブースツアーのみ参加 3,000円(消費税込)

特典 参加者のみ先行入手できる「実行委員会7メーカーオリジナル「データ保管・アーカイブメディア特性」一覽」を配布

11.19 (木) 13:00 - 14:30 **事例報告① 4K番組の制作 ~放送の経験をデータ保管から考える** 聴講無料
 藤原 徹 氏 日本テレビ放送網株式会社 技術統括局・インターネット技術部専ら部長

事例講演② 中京テレビ放送「導入2年の経験から見たアーカイブ構築の課題整理」
 北折 政樹 氏 中京テレビ放送株式会社 技術推進局放送技術部 副部長

参加者ディスカッション
 「近い将来の4K・8K対応を見通したデータ保管を考える」
 メーカー担当者としてフロア段階別に参加者とのディスカッション
 登壇社: EMCジャパン、ソニー、日本IBM、パイオニア、パナソニック、ビデオ・テック、朋栄

11.19 (木) 14:30 - 15:50 **ブースツアー** 聴講無料

11.19 (木) 15:30 - 17:30 **地域におけるアニメビジネスの可能性 ~アニメ×地域のWIN-WINに向けて~** 聴講無料
 経済産業省 関東経済産業局 一般財団法人デジタルコンテンツ協会

1. 挨拶 経済産業省 関東経済産業局 情報政策課長 久世 尚史 氏

2. セミナー アニメビジネスと地域活性化の今と未来
 柿崎 俊道 氏 聖地巡礼プロデューサー/アニメ祭総合プロデューサー/埼玉県「アニメの地化プロジェクト」副座長

地域発アニメによるライツビジネスと地域貢献
 高橋 英彦 氏 株式会社テレビ埼玉 営業局営業部長

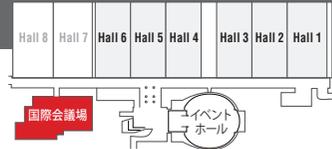
地方放送局等と連携した地域発キャラクター展開
 椎木 隆太 氏 株式会社ディー・エル・イー 代表取締役CEO & Founder

3. 名刺交換会

11.20 (金) 12:30 - 14:00 **Ultra High Definition SDI SMPTE ST 2081/2 detail, update, design and measurements** 聴講無料
 Mr. John Hudson Director of Strategic Technology and New Business development, Semtech Corporation

11.20 (金) 15:00 - 17:00 **ハイダイナミックレンジ(HDR)で創る。デバイスにとられない新しい映像体験** 同時通訳付 聴講無料
 ▶主催:株式会社フォトロン

サイモン ロアーズ 氏 ROHDE&SCHWARZ リーショナルマネージャ
 スティーブン・バードソング 氏 ROHDE&SCHWARZ ポストプロダクションソリューションプロダクトマネージャ
 クリス・フェトナー 氏 Netflix グローバルメディアエンジニアリング&パートナーシップ ディレクター



第3回 ポスト・プロダクション研修会議 2015
 The3rd Japan Post Production Conference 2015 日英逐次通訳付 有料

▶会場:国際会議場1階「101」
 ▶主催: Future Media Channel ▶協賛: Adobe ▶協力: Inter BEE NABSHOW
 ▶受講料: 1セッション=11,000円(消費税込)・全4セッション割引価格=32,000円(消費税込)

09:00 - 10:45	セッション1 4K以上の映像の撮影技法	ジェム・スコフィールド 氏
11:00 - 12:45	セッション2 ログとLUTを使用した作業 -プロダクションからポストプロダクションへ-	ジェム・スコフィールド 氏
14:00 - 15:45	セッション3 4K以上の環境におけるDaVinci Resolveを使用したカラーグレーディング	ロビー・カーマン 氏
16:00 - 17:45	セッション4 Adobe Creative Cloudを使った色彩作業の流れ	ロビー・カーマン 氏

講師 ジェム・スコフィールド 氏
 ビデオ制作および映像制作の技術をオンラインおよびオフラインで教える教育組織the C47の創始者である。彼はプロデューサー、DP、ディレクター兼教育者であり、芸術および科学のドキュメンタリーおよび物語形式の映像制作に特化したプログラムThe Filmmaker's Intensiveの運営にも携わっている。過去19年間彼の得意先は常に拡大を続け、彼のプロダクションは数多くのプロジェクトに関わってきた。クライアントには、アップル、AbelCine、キヤノンアメリカ、EMI、Manfrotto base、Motley Fool、ニューヨークタイムズ、Scottish Enterprise、TED、Wescott & Zeissなどがある。

講師 ロビー・カーマン 氏
 カラーリスト、Amigo Media LLC社副社長。ロビー・カーマンはアップルのFinal Cut Pro認定インストラクターの第一世代の一人。現在、カーマン氏はFinal Cut Pro、DVD Studio Pro、Aperture、Motion、Colorを教えることのできる認定インストラクターでもある。これまでにいくつかの書籍の共同著者としてまた技術編集者として活躍してきた。主な書籍:「Final Cut Pro Workflows: The Independent Studio Handbook」(ジェイソン・オスター共著)、他。カーマン氏は最近Lynda.comの「Color Essential Training(カラー基本トレーニング)」のビデオ・コースを制作した。

第52回 民放技術報告会
 The 52nd JBA Symposium of Broadcast Technology 聴講無料 予約不要

▶会場:国際会議場3階
 ▶主催・企画:一般社団法人日本民間放送連盟(JBA)

	第1会場「301号室」	第2会場「302号室」	第3会場「303号室」
11.18 (水)	10:30▶12:10 画像技術部門	10:30▶17:10 制作技術部門	10:30▶17:10 ラジオ・音声部門
11.19 (木)	13:00▶17:10 データ放送・デジタルサービス部門	10:30▶13:00 送信部門	10:30▶12:35 情報・ネットワーク部門
11.20 (金)	14:00▶16:30 特別企画「ニュース制作を支える報道技術の最新事情」	10:30▶16:45 回線・伝送部門	10:30▶15:55 制作技術部門



全映協フォーラム2015 in 幕張
 ZENEIKYO Forum 2015 in Makuhari 聴講無料

▶会場:APAホテル 東京ベイ幕張「東京ベイ幕張ホール」
 ▶主催:一般社団法人全国地域映像団体協議会

11.19 (木)

13:00▶	開会式
14:40▶	パネルディスカッション:「地方からの発信」その魅力とは
15:00▶	総務省プレゼンテーション
15:30▶	経済産業省プレゼンテーション
16:30▶	若い制作者のためのセミナー
18:30▶	全映協グランプリ2015 結果発表・表彰式
	大懇親会(会費:7,000円)



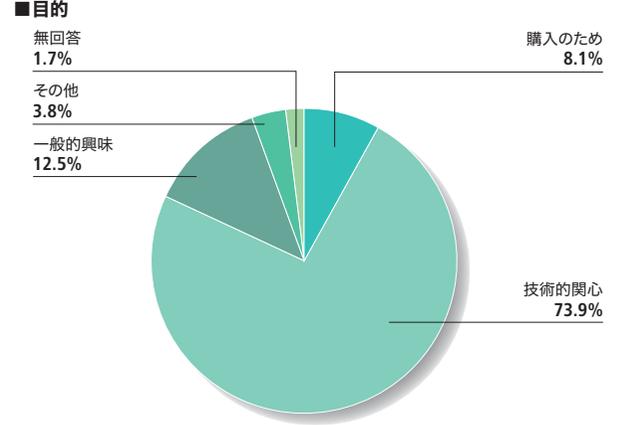
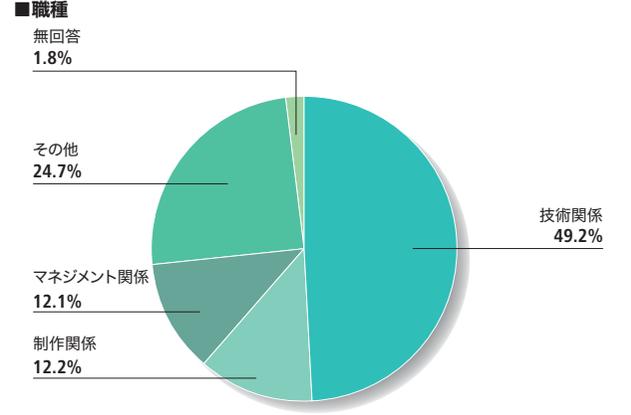
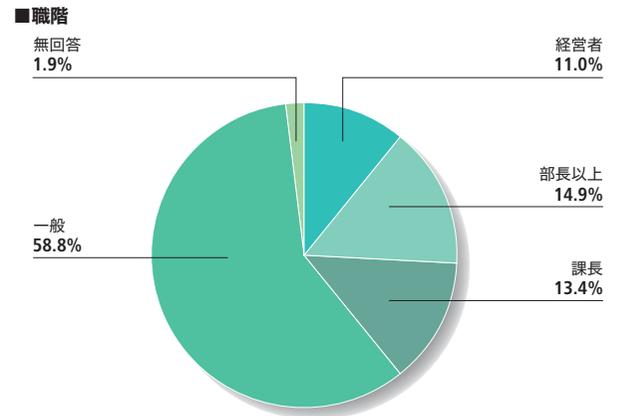
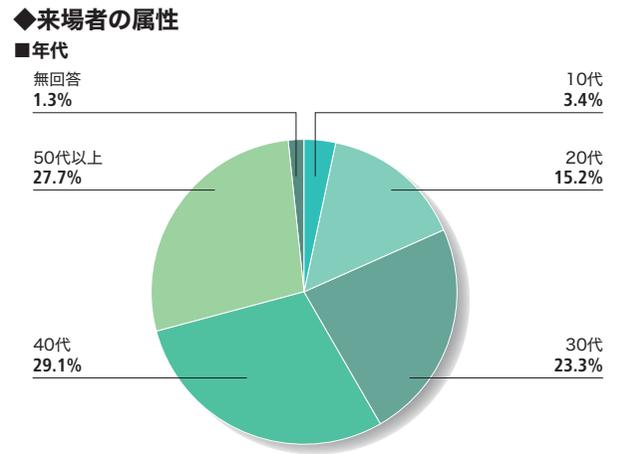
■日別来場者内訳

	11/18(水)	11/19(木)	11/20(金)	合計
国内登録来場者数	12,324	11,572	10,930	34,826
海外登録来場者数	474	254	92	820
合計	12,798	11,826	11,022	35,646

来場者数: **35,646**名

■登録来場者数の内訳

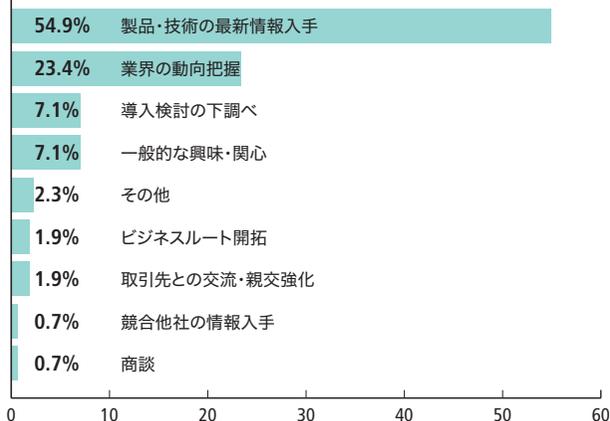
エリア	国・地域数/来場者数	国・地域別の来場者数
日本国内	1カ国/34,826名	日本 34,826名
アジア地域	14カ国・地域/607名	韓国 294名/タイ 75名/中国 66名/台湾 62名/インドネシア 33名/シンガポール 30名/香港 26名/フィリピン 8名/マレーシア 4名/ベトナム 3名/インド 2名/パキスタン 2名/カンボジア 1名/ Bangladesh 1名
北中南米地域	7カ国・地域/72名	アメリカ合衆国 52名/ブラジル 8名/カナダ 5名/アルゼンチン2名/メキシコ 2名/ペルー2名/エクアドル 1名
大洋州地域	1カ国・地域/6名	オーストラリア 6名
中東・アフリカ地域	3カ国・地域/3名	イラン1名/トルコ1名/イスラエル 1名
ヨーロッパ地域	13カ国・地域/40名	イギリス 13名/ドイツ 7名/イタリア 4名/フランス 3名/ベルギー 3名/ノルウェー 2名/ロシア 2名/オランダ 1名/スイス 1名/デンマーク 1名/チェコ 1名/ハンガリー 1名/ルーマニア 1名
不明		92名
合計	39カ国・地域	35,646名



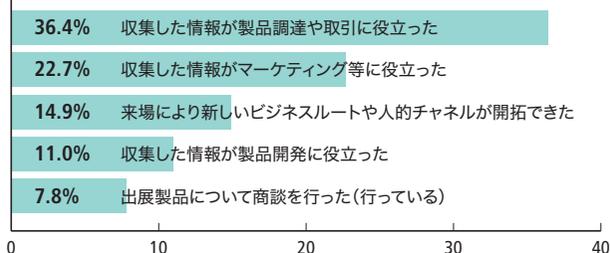


2015年来場者アンケート

◆『Inter BEE 2015』にご来場された目的を教えてください。
(複数回答)

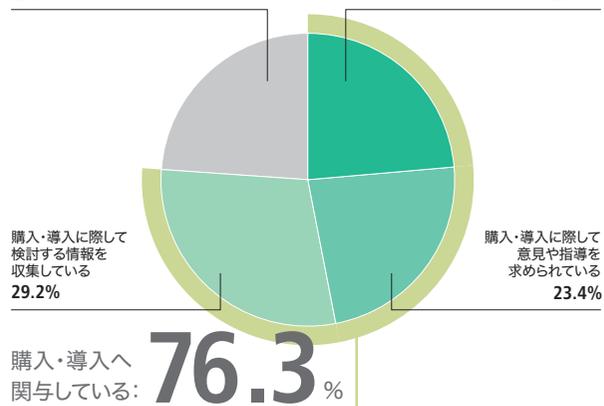


◆『Inter BEE 2015』を見学して、その後のビジネスに役立ちましたか。
(複数回答)

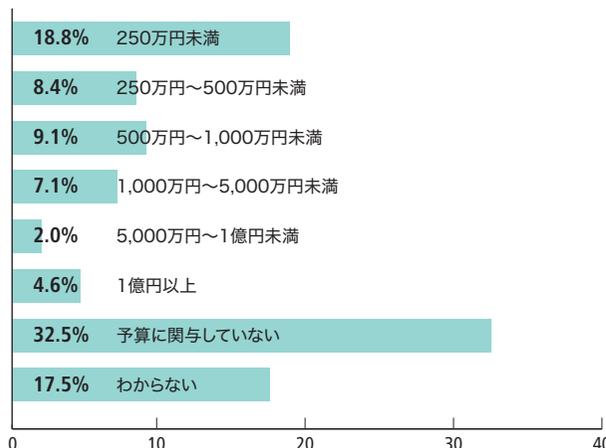


◆御社での製品・サービスの購入・導入にあたって、
あなたはどの程度関与されていますか。

いずれも該当しない 23.7% 購入・導入に際して決定権がある 23.7%

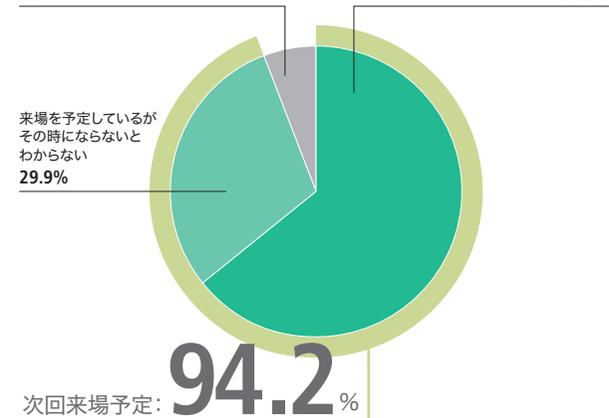


◆あなたが関与する製品・サービスの購入・導入に対する予算は、
おおよそ年間いくらくらいですか。



◆次回の『Inter BEE 2016』にご来場いただけますか。

未定 5.8% 来場を予定している 64.3%



■業種

放送機器メーカー	13.1%	コンテンツ制作関連	2.8%
民間放送テレビ局	9.4%	舞台・演出・美術・照明関連	2.7%
その他ユーザ	9.0%	インターネット関連	2.6%
その他ゲスト	8.2%	CATV関係	2.5%
ポストプロダクション	7.2%	官公庁・団体	1.9%
映画・映像制作会社	5.8%	施設・店舗関係	1.6%
商社	5.8%	広告代理店	1.2%
学生	5.8%	コンテンツ配信事業者	1.1%
プロダクション	4.6%	ビデオソフト制作会社	1.1%
PA関係	4.2%	民間放送ラジオ局	0.6%
NHK	3.7%	レコード制作会社	0.6%
通信事業者	3.3%	無回答	1.2%

■関心(複数回答)

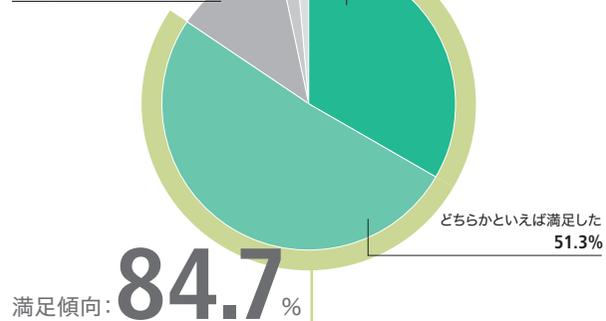
映像機器全般	55.6%	送出システム	8.9%
オーディオ機器全般	32.3%	IPTV関連	8.2%
カメラ	27.8%	照明機器	8.0%
編集・制作装置	19.8%	各種特機・周辺製品	8.0%
映像モニタ	16.5%	デジタルシネマ	7.9%
ミキサ	11.6%	マルチメディアシステム	7.9%
スピーカ	11.1%	3D	6.4%
VTR・メモリーカード・光ディスク	11.1%	測定機器	5.7%
サーバ・ストレージ	11.1%	Mobile TV関連	5.3%
ソフトウェア	10.7%	製作管理システム	4.7%
中継システム	10.5%	美術・舞台演出関連	3.9%
マイクロホン	10.4%	電源装置	3.8%
デジタルコンテンツ	10.4%	その他	1.9%
デジタルサイネージ	9.8%	無回答	1.4%
送信システム	9.0%		

◆Inter BEE 2015全体を通して、どの程度満足しましたか。

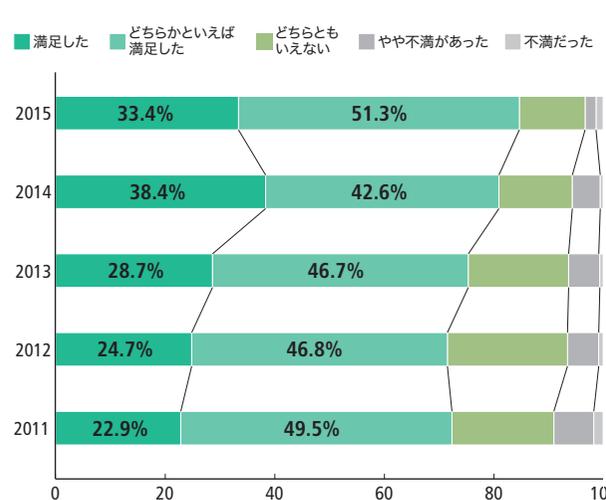
不満だった 1.3% 満足した 33.4%

やや不満があった 2.0%

どちらともいえない 12.0%



■満足度の変遷



Result: Exhibitor Profile

■出展者数

展示部門	出展者数	小間数
プロオーディオ部門	303社	311小間
プロライティング部門	14社	19小間
映像・放送関連機材部門	587社	1,323小間
ICT/クロスメディア部門	92社	127小間
合計	996社	1,780小間

出展者数: **996**社(過去最多)

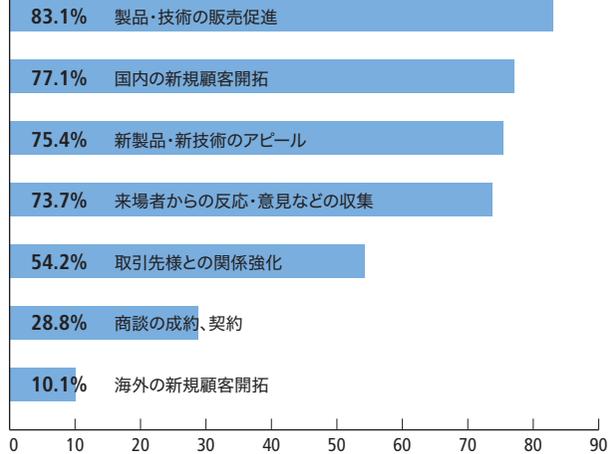
■出展者数の内訳

エリア	国・地域数/出展者数	国・地域別の出展者数
日本国内	1カ国/456社	日本456
アジア地域	5カ国・地域/68社	中国33/韓国17/台湾16/インド1/香港1
北中南米地域	3カ国・地域/217社	アメリカ192/カナダ24/ブラジル1
大洋州地域	2カ国・地域/13社	オーストラリア12/ニュージーランド1
中東地域	1カ国・地域/11社	イスラエル11
ヨーロッパ地域	20カ国・地域/231社	イギリス65/ドイツ62/フランス20/イタリア14/スウェーデン12/オランダ10/スイス10/スペイン8/ベルギー8/デンマーク5/ノルウェー4/ブルガリア3/オーストリア2/チェコ2/スロバキア1/フィンランド1/ハンガリー1/ポルトガル1/リヒテンシュタイン1/ロシア1
	32カ国・地域	996社

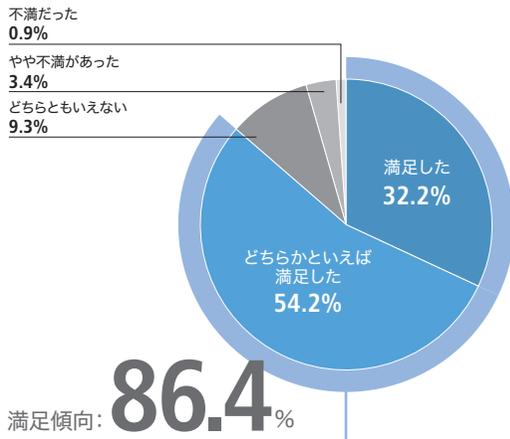
出展国・地域数: **32**カ国・地域
海外出展者数: **540**社

2015年出展者アンケート

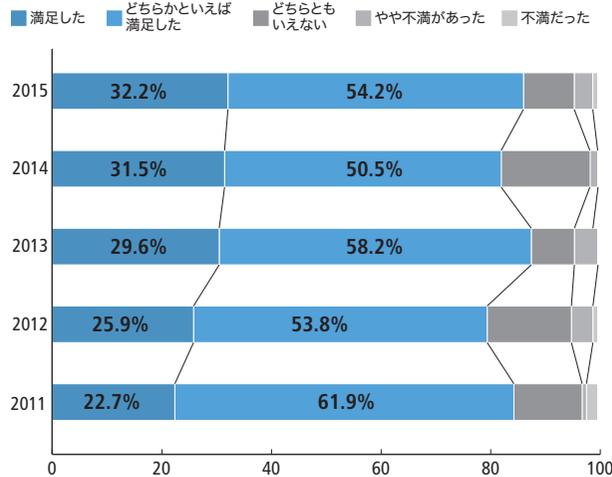
◆出展した目的【複数回答】



◆今回の目的達成の満足度



■満足度の変遷



Result: Publication and Promotion



1. 広報活動(リリース配信実績)

- *出展募集開始告知(3/5)
- *入場事前登録開始告知(10/5)
- *取材誘致案内(11/12・11/14・11/16)
- *開幕告知(11/17)
- *プレスルーム設置(11/18~20)
- *終了報告(11/20)

2. プレス登録者数

417名(うち海外20名)

3. 印刷媒体掲載記事数

掲載時期	記事数
開催前	116件
開催中	30件
開催後	121件
合計	267件

※2016.1.20現在

4. 国内記事掲載(主な掲載実績)

掲載日	媒体名	内容
3/9	電波タイムズ	Inter BEE 2015 出展者募集 メディア産業のフラッグシップイベント
3/9	家電流通新聞	Inter BEE 2015 11月18日~20日開催 JEITAが出展募集開始
4/13	映像新聞	Inter BEE 2015 展示会出展の募集開始 11月18-20日 幕張メッセで開催
5/12	週刊カメラタイムズ	Inter BEE 2015 11月に幕張メッセ 出展者の募集を開始
8/3	映像新聞	Inter BEE 2015 放送・映像の最新機器・情報一堂に
10月号	放送ジャーナル	Inter BEE 2015 開催概要を発表 11月18~20日開催
10月号	PROSOUND	INTER BEE EXPERIENCE 開催決定! 2015年は3日間!
10/6	電波新聞	国際放送機器展 4K・8Kで多様な展示 来月幕張メッセで開催
10/12	電波新聞	Inter BEE 2015 体験イベントをさらに拡充 11月18~20日開催
10/19	電波タイムズ	Inter BEE 2015 開催概要が決定 公式ウェブサイトに入場事前登録開始
10/21	電波タイムズ	Inter BEE 2015 「IBC」「NAB」と並ぶ国際放送機器展
10/25	JPPA REPORT	Inter BEE 2015 国際放送機器展の見どころ
11月号	OPTCOM	Inter BEE 2015 音と映像と通信のプロフェッショナル展 開催概要
11月号	衛星&ケーブルテレビ	(特集)Inter BEE 2015 見所のすべて
11月号	B-maga	(特集)Inter BEE 2015 開幕直前 目録は4Kと、その先へ
11月号	FDI(Full Digital Innovation)	(特別記事)Inter BEE 2015に期待する~映像制作機器関連~ (特別記事)Inter BEE 2015を前にして
11月号	VIDEO JOURnAL	Inter BEE 2015 開幕 基調講演/体験イベント/コンファレンス情報
11/1	見本市展示会通信	Inter BEE 2015 4K・8Kに関する最新情報を紹介
11/2	電波新聞	50年の歴史の国際放送機器展
11/6	毎日新聞(東京・夕刊)	Inter BEE 2015 開催
11/16	映像新聞	Inter BEE 2015 開幕 高画質化技術で新展開 4K・8Kの制作環境が前進
12月号	Stereo Sound	今年のInter BEE は11/18開幕。4K・8Kの技術提案や新製品発表。
12月号	Sound & Recording Magazine	INTER BEE EXPERIENCE 開催決定! 2015年は3日間!
12月号	SOUND DESIGNER	プロのための音と映像と通信のイベント「Inter BEE」が幕張メッセで開催
12月号	NEW MEDIA	Inter BEE 2015 「ここに注目」11月18(水)-20日(金)開催
12月号	OPTCOM	Inter BEE 2015 Preview ~放送と通信の連携やICT活用を支える製品~
11/18	電波新聞	Inter BEE きょうから開催 海外からの評価も高い名称しかり根付く 国際放送機器展 過去最多996社・団体参加
11/18	電波タイムズ	Inter BEE 2015 新たな半世紀に向けた第一歩始まる Inter BEE 2015 日本の最先端の放送技術を世界に発信 「INTER BEE EXPERIENCE」ライオンアレイスピーカーのデモ再び
11/18	オートメーション新聞	Inter BEE 2015 11月18(水)-20日(金)幕張メッセ
11/19	日経産業新聞(東京・大阪)	国際放送機器展 開幕 4K放送の最先端披露 国際放送機器展 開幕 4K先端技術競う
11/19	アジアビジネスアイ(東京・大阪)	Inter BEE 2015 開幕 空撮ドローン利用へ“追い風”
11/19	電波新聞	国際放送機器展 注目集まる4K・8K 幕張で開幕

掲載日	媒体名	内容
11/19	ビデオ通信	Inter BEE 2015 開幕
11/20	FILM & DIGITAL TIMES	Inter BEE 2015 Tokyo Photos
11/23	アジアビジネスアイ(東京・大阪)	国際放送機器展「Inter BEE 2015」ドローンに注目
11/23	映像新聞	Inter BEE 2015 4Kがスタンダード化
11/23	ビデオ通信	Inter BEE 2015 開幕
11/25	電波タイムズ	Inter BEE 2015 Report 4K映像などのライブ制作インフラをIPへ
11/26	ビデオ通信	Inter BEE 2015 996社が出展、約3万6000人が来場
11/27	日経産業新聞(東京・大阪)	インタービー2015 放送機器融合で 医療・車載に技術転用
11/30	電波タイムズ	Inter BEE 2015 20日開幕 過去最多の996社・団体が出展
11/30	映像新聞	Inter BEE 2015レポートで各社が競演 最新の大型LED装置を披露
12月号	FDI(Full Digital Innovation)	FDI(Full Digital Innovation)
12月号	B-maga	4K本格化へ Inter BEE 2015 Report
12月号	VIDEO JOURnAL	Inter BEE 2015 開幕
12/1	電波新聞	国際放送機器展 放送機器メーカー 4K・8K放送に取り組み 来年「4K・8K元年」国際放送機器展は4K・8K一色
12/7	映像新聞	Inter BEE 2015レポート 広がるHEVC技術活用 4K時代への対応進む
12/8	東京IT新聞	2015年国際放送機器展 4K・8Kのトレンドを体感
12/8	週刊カメラタイムズ	Inter BEE 2015レポート 活況の映像制作市場
12/14	映像新聞	Inter BEE 2015レポート ブラジルの地デジ放送より高い品質への挑戦
12/14	電波タイムズ	Inter BEE Report② (出展各社)
12/16	電波タイムズ	Inter BEE Report③ (出展各社)
12/18	電波タイムズ	Inter BEE Report④ (出展各社)
12/21	映像新聞	Inter BEE 2015レポート (出展各社)
12/21	電波タイムズ	Inter BEE Report⑤ (出展各社)
12/25	電波タイムズ	Inter BEE Report(終) (出展各社)
12/28	映像新聞	Inter BEE 2015レポート (出展各社)
16/1月号	SOUND DESIGNER	Inter BEE 速報 (出展各社) INTER BEE EXPERIENCE
1月号	VIDEO JOURnAL	秋山謙一の映像業界トレンド探訪 ~Inter BEEで各社が新製品を発表~
1月号	ビデオSALON	Inter BEE 2015レポート 編集部がピックアップしたの編(出展各社)
1月号	放送技術	特集 Inter BEE 2015 第51回「国際放送機器展」概観 特集 Inter BEE 2015 に見る映像技術動向
1月号	FDI(Full Digital Innovation)	(特別記事)Inter BEE 2015 REPORT 全体概要およびContent Forum 2015 (特別記事)Inter BEE 2015で注目を集めた衛星通信・衛星放送関連機器の動向
1月号	B-maga	「Inter BEE 2015」 Report
1月号	日本カメラ	Inter BEE 2015レポート 映像の技術の最新線を見る
2月号	NEW MEDIA	Inter BEE 2015 Report「マインナー世代にテレビができること」 Inter BEE 2015 Report① IP伝送「2大規格の違いとHDRの課題解決への取り組み

5. 国内テレビ放映

放送日	放送局	番組名
11月19日(木)	BSジャパン	日経プラス10
11月20日(金)	TBS	白熱ライブ・ビビット
11月26日(木)	TBS	Nスタ
11月28日(土)	フジテレビ	新・週刊フジテレビ批評

6. 海外テレビ放映(事前取材・放映)

放送日	放送局	番組名
10月17日(土)	BBC WORLD/ BBC News Channel	Click - 事前取材
10月18日(日)	BBC WORLD/ BBC News Channel	Click - 事前取材(再)
10月19日(月)	BBC 2	Click - 事前取材(再)
10月20日(火)	BBC WORLD/ BBC News Channel	Click - 事前取材(再) *米国のみ放映

クリック(Click)は、英国放送協会(BBC)が、BBC2、BBC News Channel/Breakfast で英国国内に向けて、またBBC Worldで世界各地に向けて放送している大変人気の高いIT情報番組である。BBCのWebサイトではビデオ・オン・デマンド方式で番組のダイジェストが無料配信されており、世界中でいつでも番組を視聴できる。

7. 広告掲載(国内)

発行日	掲載紙誌
9月15日	Sound & Recording Magazine
9月18日	PRO SOUND
9月25日	テレコミュニケーション
9月28日	放送技術
9月28日	FDI (Full Digital Innovation)
10月1日	NEW MEDIA
10月10日	CG World & Digital Video
10月10日	無線と実験 (MJ)
10月15日	VIDEO JOURNAL
10月15日	Report JPPA
10月20日	ビデオ SALON
10月30日・11月18日	電波タイムズ (ロゴ広告を含む)
11月1日	放送ジャーナル
11月1日	映画テレビ技術
11月10日	電波技術協会報誌FORN
11月10日	月刊「B-maga」
11月16日	月刊「OPTCOM」
11月17日・18日	日経産業新聞
11月18日	オートメーション新聞
11月18日	電波新聞

8. 広告掲載(海外)

発行日	掲載紙誌
9月1日~11月20日	Asia Pacific Broadcasting (アジア放送 web広告)
9月1日~9月30日	Broadcast India (インド映像・音響 web広告)
9月14日	Broadcasting & Cable (米放送)
9月20日	Broadcast & Production (中国放送・制作)
9月23日	Television Asia (アジア放送)
9月28日・10月28日	Video Plus (韓国映像)
9月30日・10月30日	PA (Professional Audio) (韓国音響)
9月30日	ABU Technical Review (アジア放送技術)
10月1日	Asia Pacific Broadcasting (アジア放送)
10月9日	Broadcast India (インド映像・音響)
10月1日~10月31日	Broadcasting & Cable (北米版放送 web広告)
10月1日~10月31日	科訊ネット (中国語圏 web広告)

9. Inter BEE Official Mail Magazine

過去の来場者データベースおよび、2015年の事前登録者に向けて、「Inter BEE 2015 OFFICIAL MAIL MAGAZINE」を配信。

約 **88,000** 件 **25** 回配信

※情報配信可能なデータ件数

10. Inter BEE 公式 Website

◆サイト訪問数: **205,101** 件 (対前年比 **107%**)
(11月1日~30日)

Inter BEE Online Magazineでは、年間を通じてInter BEE出展者情報はもとより、関連展示会や業界最新ニュースなど、話題性の高い情報をいち早くキャッチアップして配信しています。

出展者事前取材記事: **27** 本

会場取材ビデオオンデマンド: **185** 本
(Inter BEE TV)



11. 公式Facebook

◆会期終了直後の「いいね!」数:

3,733 件 (対前年比 **117%**)

◆Facebookページから公式Websiteへのアクセス数:

15,575 件 (対前年比 **88%**)



12. 公式Twitter

◆Twitterフォロワー数(最大):

741 件 (対前年比 **132%**)

◆Inter BEE関連つぶやき件数:

8,965 件

※つぶやきに「Inter BEE」「インタービー」が含まれるもの



13. メディアパートナー

関連業界紙誌にはメディアパートナーとしてInter BEEをサポートいただき、多くの出展者の記事を掲載いただいています。



主催: **JEITA** 一般社団法人電子情報技術産業協会

運営: お問い合わせ

一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-1-3

大手センタービル5階

電話: (03)6212-5231 FAX: (03)6212-5225

E-mail: contact2016@inter-bee.com



下記サイトからバックナンバーをダウンロードできます

INTER BEE ONLINE
www.inter-bee.com